



Sun Java System Communications Express 6 2005Q4 管理ガイド

Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 819-3544

Copyright 2005 Sun Microsystems, Inc. 4150 Network Circle, Santa Clara, CA 95054 U.S.A. All rights reserved.

本製品および本書は著作権法によって保護されており、その使用、複製、頒布、および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社による事前の許可なく、本製品および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。フォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

本製品の一部は Berkeley BSD システムより派生したもので、カリフォルニア大学よりライセンスを受けています。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびにほかの国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、docs.sun.com、AnswerBook、AnswerBook2、Solaris は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。Sun のロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

OPEN LOOK および Sun™ Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカルユーザーインターフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK GUI を実装するか、または米国 Sun Microsystems 社の書面によるライセンス契約に従う米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

U.S. Government Rights – Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されず、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。



051214@13215



目次

1	はじめに	15
	対象読者	15
	お読みになる前に	15
	内容の紹介	16
	表記上の規則	17
	書体の表記規則	17
	記号	18
	デフォルトパスとファイル名	18
	コマンド行プロンプト	19
	関連マニュアル	20
	Messaging Server のマニュアル	20
	Calendar Server のマニュアル	20
	Communications Services のマニュアル	20
	関連情報を入手するには	21
	オンラインでこのマニュアルを入手するには	21
	関連するサードパーティー Web サイトの参照	21
2	Communications Express の概要	23
	システム要件	23
	プラットフォーム	23
	ソフトウェアの依存関係	24
	製品の特徴	24
	高レベルのアーキテクチャー	25
	配備に関する FAQ	26
	シングルサインオンの目的は何ですか。	26
	<i>Messaging</i> シングルサインオンは、いつ使用すべきですか。	26

	<i>Access Manager</i> シングルサインオンは、いつ使用すべきですか。	27
	<i>Communications Express</i> の配備の要件はどのようなものですか。	27
	▼ 配備の要件	27
	既存の <i>Messaging Server</i> 、たとえば、 <i>Messaging Server 5.2</i> または <i>Messaging Server 6.0</i> の PAB エントリを <i>Communications Express</i> に移行できますか。	28
	<i>Communications Express</i> のアプリケーションを無効にすることはできますか。	28
3	Communications Express のインストールおよび設定	29
	注	29
	Java Enterprise System インストーラからの <i>Communications Express</i> のインストール	30
	▼ <i>Communications Express</i> のインストール	30
	<i>Communications Express</i> の設定の前提条件	31
	▼ 前提条件	31
	スキーマの選択	32
	設定ツールの呼び出し	33
	▼ 設定ツールの呼び出し	33
	<i>Communications Express</i> の設定	34
	▼ <i>Communications Express</i> の設定	34
	設定後の手順	42
	▼ 設定後の手順	42
	<i>Communications Express</i> の設定解除	43
	<i>Communications Express</i> のファイルとディレクトリの配置	44
4	設定の詳細	47
	<i>Communications Express</i> の設定ファイル	47
	▼ 設定ファイルを編集する	48
	設定パラメータの詳細	48
	アドレス帳サーバーの水平方向のスケーラビリティのサポート	59
5	シングルサインオンの実装	63
	<i>Access Manager</i> シングルサインオンの設定	63
	▼ <i>Communications Express</i> で <i>Access Manager</i> によるシングルサインオンを有効にする	64
	▼ <i>Access Manager</i> と <i>Communications Express</i> を同じ Web コンテナインスタンスに配備する	67

	▼ Access Manager と Communications Express を異なる Web コンテナインスタンスに配備する	67
	▼ Messenger Express で Access Manager によるシングルサインオンを有効にする	68
	Messaging シングルサインオンの設定	70
	▼ Messaging SSO を使用して Communications Express を有効にする	71
	▼ Messaging SSO を使用して Messenger Express を有効にする	74
6	障害追跡	77
	問題の特定と障害追跡	77
	▼ 共通の障害追跡方法	77
	一般に判明している問題の障害追跡	78
	▼ アドレス帳へのアクセス	84
	ログファイル	89
	▼ ロギングを有効にする	89
7	ホストドメインの設定	93
	ホストドメインの有効化	93
	カレンダーでのホストドメイン設定の有効化	93
	メールでのホストドメインのプロビジョニング	93
	アドレス帳でのホストドメイン設定の有効化	94
	ホストドメインの設定	94
	▼ ホストドメイン	94
	ホストドメインの作成	94
	▼ ドメイン関連のプロパティを特定のドメインに指定する場合は、次の手順を実行します。	95
	ホストドメイン用のパラメータの設定	96
	uwcdomainconfig.properties ファイル内のパラメータの設定	96
	personalstore.properties ファイルの設定	100
	defaultps.xml ファイルの設定	102
	▼ 企業アドレス帳	103
	グローバル GUI のカスタマイズ	103
	uwcdomainconfig.properties ファイル内の言語の設定	103
8	PAB データのアドレス帳サーバーへの移行	105
	概要	105
	移行シナリオ	108
	設定後の手順	108

水平方向のスケラビリティのサポートに必要な追加の設定 112
移行配備のシナリオ 113

9 チューニングとパフォーマンスについて 115

Directory Server のチューニング 115

LDAP Directory Server のインデックス作成 115

nsSizeLimit および nsLookthroughLimit パラメータの設定 116

Calendar Server のチューニング 117

複数 CPU にわたるロードバランスの使用 117

▼ ロードバランスを無効にする 117

Web Server のチューニング 117

acceptorthreads の値の設定 118

JVM オプションの設定 118

Communications Express のチューニング 119

▼ サーバー応答の圧縮を有効にする 119

▼ Communications Express のセッションタイムアウトをカスタマイズする 119

A Access Manager の事後配備の有効化または無効化 121

B 設定パネルシーケンス 123

C Messaging Server なしで、シングルツリー構造を使用した Communications Express のインストール 127

2 ツリーネームスペースのメカニズム 127

2 ツリーネームスペースメカニズムの動作 127

2 つのディレクトリ情報ツリーを使用する理由 128

▼ 既存の DIT をデュアルツリーのネームスペースにマップする方法 128

D 設定パラメータのリファレンス 131

uwconfig.properties および uwcauth.properties ファイル内のアプリケーション全体のパラメータ 132

db_config.properties file 133

uwconfig.properties 137

uwcauth.properties ファイル 140

uwclogging.properties ファイル 146

uwcdomainconfig.properties 147

personalstore.properties ファイル 153

索引 155

表目次

表 1-1	『Sun Java System Communications Express 管理ガイド』の構成	16
表 1-2	書体の表記規則	17
表 1-3	記号の表記規則	18
表 1-4	デフォルトパスとファイル名	19
表 2-1	ブラウザとプラットフォームの推奨	24
表 3-1	Communications Express のディレクトリとファイル	44
表 4-1	メールのパラメータ	49
表 4-2	LDAP Auth フィルタパラメータ	50
表 4-3	LDAP ユーザーグループのパラメータ	50
表 4-4	Access Manager パラメータ	51
表 4-5	ユーザー検索パラメータ	52
表 4-6	Calendar Server のパラメータ	53
表 4-7	個人アドレス帳の個人ストアパラメータ	54
表 4-8	企業ディレクトリパラメータ	56
表 7-1	uwcdomainconfig.properties ファイル内のデフォルトユーザー設定	97
表 7-2	uwcdomainconfig.properties ファイル内のデフォルトカレンダー設定	98
表 7-3	uwcdomainconfig.properties ファイル内のデフォルトのアドレス帳設定	99
表 7-4	personalstore.properties ファイルに格納されている設定	101
表 8-1	設定ファイルと各ファイルの目的	109
表 8-2	PAB 移行用に設定可能な migrate.properties 内のパラメータ	109
表 8-3	連絡先のフィールドマッピング	111
表 8-4	グループのフィールドマッピング	112
表 8-5	PAB 移行電子メールパラメータ	112
表 B-1	スキーマと Web コンテナの選択に応じたパネルシーケンス	123

表 D-1	uwconfig.properties 内のパラメータ	132
表 D-2	uwcauth.properties 内のパラメータ	133
表 D-3	企業ディレクトリパラメータ	133
表 D-4	uwconfig.properties のパラメータ	137
表 D-5	uwcauth.properties のパラメータ	140
表 D-6	デフォルトのロギング設定ファイル	147
表 D-7	uwdomainconfig.properties 内のパラメータ	147
表 D-8	personalstore.properties 内のパラメータ	153

図目次

図 2-1	高レベルのアーキテクチャー	25
図 4-1	アドレス帳の水平方向のスケーラビリティ	61
図 8-1	データ移行プロセスの概要	106
図 8-2	PAB ツリーでの Entry1 の場所	107
図 8-3	アドレス帳サーバーツリー内の Entry1 の場所	107

例目次

例 4-1	xlate-introperson のデフォルトの内容	57
例 6-1	commcli によるプロビジョニング	81
例 7-1	個人アドレス帳定義を含む XML セクション	102
例 7-2	企業アドレス帳定義を含む XML セクション	102
例 C-1	LDIF ファイル 1	129
例 C-2	LDIF ファイル 2	129

第 1 章

はじめに

このマニュアルでは、Sun Java™ System Communications Express 6.1 2005Q4 およびその付属ソフトウェアコンポーネントを管理する方法について説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 15 ページの「対象読者」
- 15 ページの「お読みになる前に」
- 16 ページの「内容の紹介」
- 17 ページの「表記上の規則」
- 20 ページの「関連マニュアル」
- 21 ページの「関連するサードパーティー Web サイトの参照」

対象読者

このマニュアルは、Communications Express を管理、設定、および配備する担当者を対象としています。

お読みになる前に

このマニュアルでは、読者が Communications Express を設定、管理、および維持する担当者であり、次の項目を理解していることを前提としています。

- JavaScript™
- HTML
- Sun Java™ System Calendar Server

- Sun Java™ System Web Server Enterprise Edition
または
Sun Java™ System Application Server Enterprise Edition
- Sun Java™ System Messaging Server
- Sun Java™ System Access Manager (以前は Sun Java™ System Identity Server と呼ばれていたもの)
- Sun Java™ System Directory Server

内容の紹介

このマニュアルには、次の章があります。

表 1-1 『Sun Java™ System Communications Express 管理ガイド』の構成

章	説明
この章	対象読者、前提知識、構成、表記上の規則、関連情報について説明します。
第 2 章	コンポーネント、アーキテクチャー、インタフェースなど、Communications Express の高レベルな概要について説明します。
第 2 章	設定ツールを呼び出して、Communications Express を設定する方法について説明します。
第 2 章	Communications Express の設定の詳細について説明します。
第 2 章	シングルサインオン処理とその実装の概要について説明します。
第 2 章	Communications Express のインストールおよび配備中に発生するよくある問題について説明し、エラーログを作成および有効にする手順の概要について説明します。
第 2 章	ホストドメインを有効にするために Communications Express に加える変更について説明します。
第 8 章	データ移行プロセスの高レベルな概要と、PAB データをアドレス帳サーバーに移行する手順について説明します。
第 2 章	Directory Server、Calendar Server、Web Server、および Communications Express のパフォーマンスを向上させるために、それぞれで実行できるチューニングについて説明します。
付録 A	Access Manager の事後配備を有効または無効にする手順について説明します。

表 1-1 『Sun Java™ System Communications Express 管理ガイド』の構成 (続き)

章	説明
付録 B	選択されたスキーマと Web コンテナに応じたパネルシーケンスを一覧表示しています。
付録 C	Communications Express で 2 つのディレクトリ情報ツリーメカニズムがどのように使用され、既存のシングルツリーのネームスペース構造がデュアルツリーのネームスペースにどのようにマップされるかについて説明します。
付録 D	db_config.properties ファイル、uwconfig.properties ファイル、uwcauth.properties ファイル、uwlogging.properties ファイル、uwcdomainconfig.properties ファイル、および personalstore.properties ファイルにある Communications Express の設定パラメータについて説明します。
用語集	
索引	

表記上の規則

この節にある表は、このマニュアルで使用されている表記上の規則について説明しています。

書体の表記規則

次の表は、このマニュアルで使用されている書体の変更について説明しています。

表 1-2 書体の表記規則

書体	意味	例
AaBbCc123 (モノスペース)	コンピュータ画面上に表示されるテキスト、またはユーザーが入力するテキスト。API や言語要素、HTML タグ、Web サイトの URL、コマンド名、ファイル名、ディレクトリパス名、画面上のコンピュータ出力、コード例などがあります。	.login ファイルを編集します。 すべてのファイルを一覧表示するには、ls -a を使用します。 % You have mail.

表 1-2 書体の表記規則 (続き)

書体	意味	例
AaBbCc123 (太字のモノスペース)	コード例またはその他の画面上のコンピュータ出力の中でユーザーが入力するテキスト。	% su Password:
<i>AaBbCc123</i> (イタリック)	変数など、実際の名前や値で置き換えなければならないコマンド名またはパス名内のプレースホルダ。 マニュアル名、新しい用語、強調する語などにも使用されます。	このファイルは、 <i>msg_svr_base/bin</i> ディレクトリにあります。 ユーザーズガイドの第 6 章をお読みください。 これらはクラスオプションともいいます。 ファイルを保存しないでください。

記号

次の表は、このマニュアルで使用されている記号の表記規則について説明しています。

表 1-3 記号の表記規則

記号	説明	例	意味
[]	省略可能なコマンドオプションが含まれています。	ls [-l]	-l オプションは必須ではありません。
{ }	必要なコマンドオプションに対する選択の組が含まれています。	-d {y n}	-d オプションでは、y または n のどちらかの引数を使用する必要があります。
-	同時に押す複数のキーを結合します。	Ctrl-A	Ctrl キーを押したまま、A キーを押します。
+	連続して押す複数のキーを結合します。	Ctrl+A+N	Ctrl キーを押し、いったん離してから、それ以降のキーを押します。
>	グラフィカルユーザーインタフェースでのメニュー項目の選択を示します。	「ファイル」>「新規作成」>「テンプレート」	「ファイル」メニューから、「新規作成」を選択します。「新規作成」サブメニューから、「テンプレート」を選択します。

デフォルトパスとファイル名

次の表は、このマニュアルで使用されているデフォルトパスとファイル名について説明しています。

表 1-4 デフォルトパスとファイル名

用語	説明
msg_svr_base	Messaging Server のベースインストールディレクトリを表します。msg_svr_base インストールのデフォルト値は次のとおりです。 Solaris™ システム: /opt/SUNWmsgsr Linux システム: /opt/sun/messaging
cal_svr_base	Calendar Server のベースインストールディレクトリを表します。cal_svr_base インストールのデフォルト値は次のとおりです。 Solaris™ システム: /opt/SUNWics5 Linux システム: /opt/sun/calendar
uwc-basedir	インストールディレクトリを表します。このディレクトリパスは、JES インストーラの「インストールディレクトリ」パネルで Communications Express 用に入力されます。 デフォルトパスは var/opt/SUNWuwc です。
uwc-deployed-path/WEB-INF/classes	この Communications Express 設定ファイルが格納されるディレクトリを表します。
uwc-deployed-path	Communications Express が配備されるディレクトリを表します。このディレクトリパスは、設定プログラムツールの「設定ファイルとデータファイルを保存するディレクトリを選択」パネルで入力されます。
uwc-deployed-path/WEB-INF/domain	ドメイン固有の設定ファイルが含まれているディレクトリを表します。

コマンド行プロンプト

このマニュアルの例には、コマンド行プロンプト (たとえば、C シェルの %、Korn/Bourne シェルの \$ など) は表示されていません。使用しているオペレーティングシステム的环境によって、コマンド行プロンプトは異なります。ただし、コマンドは特に指定されていないかぎり、このマニュアルに示されているとおりに入力してください。

関連マニュアル

<http://docs.sun.com> (<http://docs.sun.com>) の Web サイトを利用すると、Sun の技術的なマニュアルにオンラインでアクセスできます。アーカイブをブラウズするか、または特定のマニュアル名または主題を検索することができます。

Messaging Server のマニュアル

次の URL を利用すると、すべての Messaging Server マニュアルを参照できます。

http://docs.sun.com/app/docs/coll/MessagingServer_05q1?l=ja
(http://docs.sun.com/app/docs/coll/MessagingServer_05q1?l=ja)

利用可能なマニュアルは、次のとおりです。

- 『Sun Java™ System Messaging Server リリースノート』
- 『Sun Java™ System Messaging Server 配備計画ガイド』
- 『Sun Java™ System Messaging Server Administration Reference』
- 『Sun Java™ System Messaging Server Developer's Reference』
- 『Sun Java™ System Messenger Express Customization Guide』
- 『Sun Java™ System Delegated 管理者ガイド』

Calendar Server のマニュアル

次の URL を利用すると、すべての Calendar Server マニュアルを参照できます。

http://docs.sun.com/app/docs/coll/CalendarServer_05q1?l=ja
(http://docs.sun.com/app/docs/coll/CalendarServer_05q1?l=ja)

利用可能なマニュアルは、次のとおりです。

- 『Sun Java™ System Calendar Server リリースノート』
- 『Sun Java™ System Calendar Server 管理ガイド』
- 『Sun Java™ System Calendar Server Developer's Guide』

Communications Services のマニュアル

利用可能なマニュアルは、次のとおりです。

- 『Sun Java™ System Communications Services User Management Utility Administration Guide』
- 『Sun Java™ System Communications Services 配備計画ガイド』

- 『Sun Java™ System Communications Services Schema Migration Guide』
- 『Sun Java™ System Communications Services Schema Reference』
- 『Sun Java™ System Communications Services Event Notification Service Guide』
- 『Sun Java™ System Communications Express 管理ガイド』
- 『Sun Java™ System Communications Express Customization Guide』

関連情報入手するには

Sun Java Systems Communications Express には、このマニュアルのほかに、管理者向けの補足情報や、エンドユーザーおよび開発者向けのマニュアルが用意されています。次の URL を使用すると、すべての Communications Express マニュアルを参照できます。

<http://docs.sun.com/db/prod>

オンラインでこのマニュアルを入手するには

このマニュアルは、PDF 形式および HTML 形式でオンラインで参照できます。次の URL をご利用ください。

<http://docs.sun.com/source/819-3544?l=ja>

関連するサードパーティー Web サイトの参照

Sun は、このリリースノートに記載されたサードパーティーの Web サイトの有効性および有用性に関して責任を負いません。Sun は、これらのサイトまたはリソースで利用可能な内容、広告、製品、他の資料に関し、それらを保証することも、責任や義務を負うこともありません。Sun は、これらのサイトやリソースで利用可能な内容、製品、またはサービスを使用または信頼することに起因する、または起因すると主張されるいかなる直接的または間接的な損害についても責任を負いません。

第 2 章

Communications Express の概要

Sun Java™ System Communications Express 6.1 2005Q4 は、インターネットサービスプロバイダ、企業、OEM などのニーズを満たすことのできる、508 に準拠した、統合された Web ベースの通信およびコラボレーションクライアントを提供します。

Web ベースのクライアントであるため、Communications Express の 3 つのクライアントモジュールであるカレンダー、アドレス帳、メールの表示はブラウザによって異なります。

この章には、次の節があります。

- 23 ページの「システム要件」
- 24 ページの「製品の特徴」
- 25 ページの「高レベルのアーキテクチャー」
- 26 ページの「配備に関する FAQ」

システム要件

この節では、次の項目について説明します。

- 23 ページの「プラットフォーム」
- 24 ページの「ソフトウェアの依存関係」

プラットフォーム

この製品は、次に示すプラットフォームでサポートされています。

- Web Server 6.1 SP4 と Application Server 8.1 がインストールされた Sparc 上の Solaris 9
- Web Server 6.1 SP4 と Application Server 8.1 がインストールされた X86 上の Solaris 9

- Web Server 6.1 SP4 と Application Server 8.1 がインストールされた Linux Red Hat 2.1

最適なパフォーマンスを得るために、次の一覧に示すブラウザとプラットフォームの組み合わせを使用してください。

表 2-1 ブラウザとプラットフォームの推奨

ブラウザ	Windows XP	Windows 2000	Solaris	RH Linux	Macintosh OS X
Netscape™ Communicator	7.2	7.2	7.2	なし	なし
Internet Explorer	6.0 sp1+	6.0 sp1+	なし	なし	なし
Mozilla™	1.4+	1.4+	1.4	1.4+	なし

ソフトウェアの依存関係

Communications Express のインストール前に、次の各製品をインストールしておく必要があります。

- Directory Server 5.2
- Calendar Sever 6.2
- Messaging Server 6.2
- Access Manager 6.2 (以前の Identity Server)。 Schema 2 を使用している場合
- Web Server 6.1 SP4 および JDK バージョン 1.5
または
Application Server 8.1

製品の特徴

- Communications Express には、カレンダー、メール、およびアドレス帳用に統合されたユーザーインタフェースが用意されています。
- Communications Express は、Identity シングルサインオンと Messaging シングルサインオンをサポートしています。
- カレンダーとメールの両方のアプリケーションで同じアドレス帳を共有します。
- カレンダー、メール、およびアドレス帳モジュールでは、Communications Express の「オプション」タブで指定された共通のユーザー設定が共有されます。
- Communications Express は、仮想ドメインをサポートしています。

高レベルのアーキテクチャー

カレンダーおよびアドレス帳クライアントモジュールは、どの Web コンテナでも単一の Web アプリケーションとして配備されます。メールモジュールは、Messenger Express によって描画されます。Messenger Express は、Messaging Server の HTTP サービスを Web ベースで使用するスタンドアロンのメールアプリケーションです。

Messenger Express または MEM は、Communications Express と同じシステム上に配備してください。

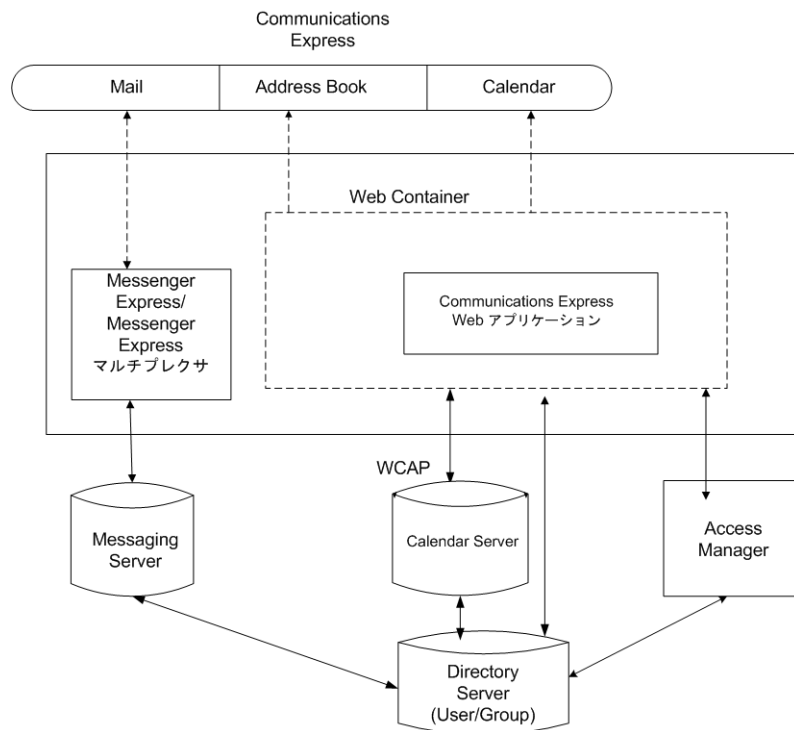


図 2-1 高レベルのアーキテクチャー

配備に関する FAQ

この節では、よく尋ねられるいくつかの質問への回答を示します。

- 26 ページの「シングルサインオンの目的は何ですか。」
- 26 ページの「Messaging シングルサインオンは、いつ使用すべきですか。」
- 27 ページの「Access Manager シングルサインオンは、いつ使用すべきですか。」
- 27 ページの「Communications Express の配備の要件はどのようなものですか。」
- 27 ページの「Communications Express の配備の要件はどのようなものですか。」
- 28 ページの「既存の Messaging Server、たとえば、Messaging Server 5.2 または Messaging Server 6.0 の PAB エントリを Communications Express に移行できますか。」
- 28 ページの「Communications Express のアプリケーションを無効にすることはできますか。」

シングルサインオンの目的は何ですか。

シングルサインオンは、カレンダー、アドレス帳、およびメールの間のシームレスな相互運用のために必要です。

Messaging シングルサインオンは、いつ使用すべきですか。

Messaging Server がすでに Access Manager のサポートなしで Sun Java System LDAP Schema1 を使用するように設定されている場合は、認証のために Messaging シングルサインオンを有効にしてください。

Communications Express で Messaging Server によるシングルサインオンを有効にするには、このガイドの第 4 章にある 70 ページの「Messaging シングルサインオンの設定」の節を参照してください。

Access Manager シングルサインオンは、いつ使用すべきですか。

Sun Java System LDAP Schema 2 が設定されたセットアップがすでに存在する場合は、Access Manager シングルサインオンを有効にしてください。

Communications Express で Access Manager によるシングルサインオンを有効にするには、このガイドの第 4 章にある 63 ページの「Access Manager シングルサインオンの設定」の節を参照してください。

Communications Express の配備の要件はどのようなものですか。

▼ 配備の要件

- 手順
1. メールが有効になっている場合は、**Messenger Express** を同じホスト上にインストールし、設定してください。
 - a. **Communications Express** がリモートの **Messaging Server** を指すようにすることは可能ですか。
はい、可能です。その場合は、**Messaging Server** を **Communications Express** と同じホスト上にインストールし、このメッセージングインストールを MEM として設定してから、リモートの **Messaging Server** を指すようにする必要があります。
 2. **Access Manager** が有効な場合は、**Access Manager** を **Communications Express** と同じマシン上にインストールするか、または **Access Manager SDK** をインストールし、それがリモートの **Access Manager** を指すように設定します。
リモートの **Access Manager SDK** を設定するには、63 ページの「Access Manager シングルサインオンの設定」で説明されている手順を参照してください。

既存の Messaging Server、たとえば、Messaging Server 5.2 または Messaging Server 6.0 の PAB エントリを Communications Express に移行できますか。

はい、可能です。移行の詳細については、[第 8 章](#)を参照してください。

Communications Express のアプリケーションを無効にすることはできますか。

カレンダーアプリケーションとメールアプリケーションは無効にできますが、アドレス帳アプリケーションは無効にすることはできません。

第 3 章

Communications Express のインストールおよび設定

この章では、Communications Express をインストールし、設定する手順について説明します。

この章には、次の項目があります。

- 30 ページの「Java Enterprise System インストーラからの Communications Express のインストール」
- 31 ページの「Communications Express の設定の前提条件」
- 32 ページの「スキーマの選択」
- 33 ページの「設定ツールの呼び出し」
- 34 ページの「Communications Express の設定」
- 42 ページの「設定後の手順」
- 43 ページの「Communications Express の設定解除」
- 44 ページの「Communications Express のファイルとディレクトリの配置」

注

注 -

- Messaging Server 6.2 と Calendar Server 6.2 がインストールおよび設定されており、Messenger Express が同じマシン上に設定されていることを確認してください。
 - Sun Java System LDAP Schema, v.2 を使用するには、最新の Access Manager 6.2 (以前の Identity Server) がインストールおよび設定されていることを確認してください。
 - Java Enterprise System インストーラから Directory Preparation スクリプト (comm_dssetup.p1) をインストールしてください。
-

Java Enterprise System インストーラからの Communications Express のインストール

Communications Express をインストールするには、次の手順に従います。

注 - 先にインストールされている Communications Express をアンインストールします。

以前のビルドの Java Enterprise System インストーラでインストールした場合は、Java Enterprise System アンインストールで Communications Express をアンインストールする必要があります。Solaris の場合、Sun Java™ Enterprise System アンインストールは、次の場所にあります。/var/sadm/prod/entsys/uninstall

▼ Communications Express のインストール

- 手順
1. **Sun Java™ Enterprise System** インストールウィザードに表示されるコンポーネントのリストから、「**Sun Java™ System Communications Express**」を選択します。

注 - 「Sun Java System Communications Express」を選択すると、Communications Express に必要な製品が自動的に選択されます。ただし、システムにこれらの製品のいずれかがすでにインストールされている場合、このオプションは無効になります。

2. 「インストールディレクトリ」パネルが表示されます。各コンポーネント製品のインストール先ディレクトリの名前を参照して指定します。
「次へ」をクリックします。
3. いくつかパネルが表示されたあと、「設定タイプ」パネルが表示されます。
 - a. 設定のタイプを決定します。選択可能なオプションは、次のとおりです。
 - 「今すぐ設定」: インストール時に設定可能なコンポーネント製品を設定できます。
 - 「あとで設定」: 指定したディレクトリパスにパッケージがインストールされ、設定なしで処理が進みます。詳細については、『Sun Java Enterprise System インストールガイド』の第 2 章にある「設定の種類を選択」の節を参照してください。

注 – Communications Express は、Sun Java™ Enterprise System インストールウィザードからは設定できません。Communications Express を設定するには、Communications Express 設定プログラムを実行する必要があります。

- b. 設定のタイプを選択し、「次へ」をクリックします。
4. 「カスタム設定」パネルが表示されます。
他のコンポーネントを設定する場合は、「次へ」をクリックします。
5. インストールプロセスを終了します。

Communications Express の設定の前提条件

Communications Express 設定プログラムの実行前に、次の作業を行ってください。

▼ 前提条件

- 手順
1. 使用するスキーマを選択します。選択可能なスキーマについては、[32 ページ](#)の「スキーマの選択」の節を参照してください。
 2. 次のエントリが **Solaris** システムの `/etc/hosts` ファイルにあることを確認します。
ip-of system FQHN hostname
例:

```
129.158.230.64 budgie.siroe.varrius.com budgie
```
 3. **Communications Express** を設定する前に、次の各コンポーネントが動作していることを確認してください。**Communications Express** 用の製品の設定が、次に示す順序に従い完了していることを確認します。
 - a. **Directory Server**
 - i. **Directory Server** の **Administrative Console**
 - ii. **Application Server** (選択した場合) または **Web Server** (選択した場合)

注 – この手順の後、Directory Preparation スクリプト (comm_dssetup.pl) を実行して、ユーザー/グループの Directory Server のスキーマ詳細を更新してください。

Messaging Server と Calendar Server をすでに正常に設定している場合は、この手順を省略して先に進んでください。

Directory Preparation スクリプト (comm_dssetup.pl) を実行するには、次のコマンドを入力します。

```
cd /root -of -the -directory -preparatory-script /SUNWcomds/sbin  
  
perl comm_dssetup.pl
```

iii. **Access Manager**。 Sun Java System LDAP Schema, v.2 を選択した場合

iv. **Messaging Server**

v. **Calendar Server**

vi. **Delegated Administrator**。 Sun Java System LDAP Schema, v.2 を選択した場合

各製品の設定プロセスの詳細については、『Sun Java Enterprise System インストールガイド』の第 10 章を参照してください。

- b. ユーザーが次の各サーバーに正常にログインできるかどうかを確認してください。
- Messaging Server
 - Calendar Server
 - Access Manager (以前の Identity Server)。 Sun Java System LDAP Schema, v.2 を選択した場合

スキーマの選択

インストールおよび設定の前に、採用するスキーマモデルを決定する必要があります。Communications Express を配備する場合、スキーマと Web コンテナに関して 2 つのオプションが選択できます。

- Web Server および Sun Java System LDAP Schema, v.1
または
Web Server および Sun Java System LDAP Schema, v.2 (Access Manager を含む)

- Application Server および Sun Java System LDAP Schema, v.1
または
Application Server および Sun Java System LDAP Schema, v.2 (Access Manager を含む)

スキーマと Web コンテナの各組み合わせに対して表示される設定パネルは、スキーマと Web コンテナの選択に応じて異なります。付録 B に、スキーマと Web コンテナの各組み合わせに対して表示されるパネルを一覧表示しています。

設定ツールの呼び出し

この節では、設定ツールを呼び出す方法について説明します。

▼ 設定ツールの呼び出し

- 手順
1. 管理者 (**UNIX** または **Linux** のスーパーユーザー) としてログインします。
 2. 設定ウィザードを呼び出す前に、表示設定を行います。
 3. `uwc-basedir/SUNWuwc/sbin` ディレクトリに移動します。
 4. 次のように入力します。

`./config-uwc` は、設定ツールを GUI モードで呼び出します。

`./config-uwc - nodisplay` は、設定ツールをコンソールモードで呼び出します。

注 - このバージョンでは、サイレントインストールモードがサポートされていません。

5. 設定ウィザードが表示されます。

Communications Express の設定

次の手順で、Communications Express を設定します。

注 - ウィザードを英語以外の言語で呼び出している場合は、内容が正しく表示されるように、設定パネルのサイズを変更してください。

▼ Communications Express の設定

- 手順
1. 「ようこそ」パネル
設定プログラムの最初の画面は、著作権表示のページです。「次へ」を選択して先に進むか、「取消し」をクリックして終了します。
 2. 「設定ファイルとデータファイルを保存するディレクトリを選択」パネルが表示されます。
Communications Express の設定とデータファイルを配備するディレクトリを選択します。たとえば「/var/opt/SUNWuwc」。
このディレクトリは、このガイドでは *uwc-deployed-path* と示されます。
「次へ」をクリックします。
 3. 「設定するコンポーネントを選択」パネルが表示されます。
設定するコンポーネントを選択し、設定しないコンポーネントの選択を解除します。
 - メールコンポーネント
 - カレンダーコンポーネント

注 - 「設定するコンポーネントを選択」パネルでは、コンポーネントを1つ以上選択する必要があります。

コンポーネントサイズが0と表示されますが、メールコンポーネントとカレンダーコンポーネントはインストールされます。

「次へ」をクリックします。

4. 「ネットワーク接続」パネルが表示されます。
設定プログラムでは、このパネルに表示されたホスト名およびDNSドメイン名を使用してネットワーク接続を確立しようとします。

「ホスト名」: Communications Express を構成しているホスト名が表示され
ます。

「DNS ドメイン名」: DNS サーバーが保持している DNS ドメイン名が表示され
ます。

「次へ」をクリックします。

5. 「Web コンテナを選択」パネルが表示されます。

表示されるオプションから、使用する Web コンテナを選択します。選択可能なオ
プションは、次のとおりです。

- 「Web Server」。「Web Server」パネルの詳細については、[34 ページ](#)
の「[Communications Express の設定](#)」を参照してください。

Web Server

Web コンテナとして Web Server を選択した場合は、次のパネルが表示されま
す。

- 「Web Server の設定の詳細」パネル

ローカル Web Server インスタンスの詳細を指定します。ここで指定した
Web Server の詳細は、Web Server に Communications Express を配備する
ためにインストーラが使用します。

「サーバーのルートディレクトリ」: Web Server のインストールルートをブ
ラウズして選択します。デフォルトの場所は、/opt/SUNWwbsvr/ です。

「サーバーインスタンスの識別子」: Communications Express が配備される
Web Server インスタンスを入力します。たとえ
ば「budgie.siroe.varrius.com」。

「仮想サーバーの識別子」: Communications Express が配備される仮想サー
バーの識別子を入力します。たとえ
ば「https-budgie.siroe.varrius.com」。

「HTTP ポート」: Web Server が待機する HTTP ポート番号を入力します。
Communications Express にアクセスする HTTP ポートです。

注 - セキュリティー保護された HTTP ポート番号を設定する場合は、
Communications Express の設定後にその番号を指定してください。セ
キュリティー保護されたポート番号を設定するには、このガイドの第 3 章に
ある [58 ページ](#)の「[SSL \(Secure Socket Layer\) の設定](#)」の節で説明する設定
後の手順を参照してください。

「次へ」をクリックします。

Web Server のインスタンスが検証されていることを示す小さいポップ
アップウィンドウが表示されます。この処理には数分かかることがありま
す。

設定ツールが Web Server のインスタンスに接続できない場合は、エラーメッセージが表示されます。インストールプロセスを続ける場合は「受け入れる」をクリックします。別の「Web Server の設定の詳細」を指定する場合は「新規選択」をクリックします。

- 「Web コンテナのユーザーとグループ」パネル

Web コンテナがサービスの実行に使用する ID を指定します。

「**Web** コンテナのユーザー ID」: ユーザーデータベースから取得した Web コンテナのユーザー識別子が表示されます。

「**Web** コンテナのグループ ID」: グループデータベースから取得した Web コンテナのグループ識別子が表示されます。

「次へ」をクリックします。

パスワードなどの機密データを含むファイルおよびディレクトリがインストールされます。これらのファイルおよびディレクトリの所有権が、このパネルに表示される Web コンテナのユーザーおよびグループに付与されます。機密データを含むファイルおよびディレクトリに対する読み取りおよび書き込み権は、Web コンテナユーザーだけに付与されます。

注 - 正しい Web コンテナ ユーザー ID およびグループ ID をこのパネルに入力してください。間違った値を入力すると、Communications Express の起動に失敗するおそれがあります。

Web コンテナとして Web Server を設定したあと、[34 ページ](#)の「Communications Express の設定」に進みます。

- 「**Application Server**」。「**Application Server**」パネルの詳細については、[34 ページ](#)の「Communications Express の設定」を参照してください。

Application Server

Web コンテナとして Application Server を選択した場合は、次のパネルが表示されます。

■ 「Application Server の設定の詳細」パネル

「Application Server の設定の詳細」パネルで、次に示す詳細を指定します。

「インストールディレクトリ」: Application Server がインストールされているローカルディレクトリをブラウズして選択します。

「ドメインディレクトリ」: Application Server のドメインディレクトリをブラウズして選択します。

「ドキュメントルートディレクトリ」: Application Server のドキュメントルートディレクトリをブラウズして選択します。

「サーバーターゲット名」: Communications Express が設定される Application Server のインスタンス名を入力します。Communications Express 設定プログラムは、Application Server 8.1 への Domain Administration Server (DAS) の配備のみをサポートしています。

「仮想サーバーの識別子」: Communications Express が設定される仮想サーバー識別子を入力します。

「サーバーインスタンスの HTTP ポート」: HTTP サービスが利用できる Application Server のポート番号を入力します。Communications Express にアクセスする HTTP ポートです。

「次へ」をクリックします。

注 - HTTP ポート番号はここで指定します。セキュリティー保護された HTTP ポート番号を設定する場合は、Communications Express の設定後にその番号を指定してください。セキュリティー保護されたポート番号を設定するには、このガイドの [58 ページ](#)の「[SSL \(Secure Socket Layer\) の設定](#)」の節で説明する設定後の手順を参照してください。

Application Server のインスタンスが検証されていることを示す小さいポップアップウィンドウが表示されます。この処理には数分かかることがあります。

設定ツールが Application Server のインスタンスに接続できない場合は、エラーメッセージが表示されます。インストールプロセスを続ける場合は「受け入れる」をクリックします。「Application Server の設定の詳細」をもう一度指定する場合は「新規選択」をクリックします。

■ 「Application Server: 管理インスタンスの詳細」パネル

Application Server の管理インスタンスの詳細を指定します。管理インスタンスの詳細は、Application Server で Communications Express を配備するために、設定プログラムが使用します。

「管理サーバーポート」: 管理サーバーのポート番号を入力します。

注 – Application Server に Communications Express を設定するには、Application Server の管理ポートが利用できる必要があります。

「管理者のユーザー ID」: 管理者のユーザー識別子を入力します。

「管理者のパスワード」: 管理者のユーザーパスワードを入力します。

「セキュリティ保護された管理サーバーインスタンス」: Application Server の管理インスタンスがセキュリティ保護されたモードで実行していることを指定するには、このチェックボックスを選択します。

Application Server の管理インスタンスが通常モードで実行していることを指定するには、このチェックボックスを選択解除します。

「次へ」をクリックします。

選択した内容によっては、Application Server の管理インスタンスが実行されているモードを確認する、ポップアップウィンドウが表示されます。「了解」をクリックしてポップアップウィンドウを閉じます。

注 – Application Server に Communications Express を配備するときは、server.xml および server.policy の 2 ファイルが変更されます。

server.xml および server.policy ファイルを変更する前に、設定プログラムによってこれらのファイルのバックアップが作成されます。バックアップファイルは、次のディレクトリに格納されます。

DOMAIN-DIRECTORY/
SERVER-INSTANCE-NAME/config/.CommsExpress_YYYYMMDDhhmmss

各表記の意味は次のとおりです。

DOMAIN-DIRECTORY は Application Server のドメインディレクトリです。

SERVER-INSTANCE-NAME は Communications Express が設定される Application Server のインスタンス名です。

YYYYMMDDhhmmss はバックアップディレクトリのタイムスタンプです。

- 「この Web アプリケーションのモジュール名」パネル
Application Server に配備される Communications Express のモジュール名を入力します。
「次へ」をクリックします。

Web コンテナとして Application Server を設定したあと、34 ページの「Communications Express の設定」に進みます。

「次へ」をクリックします。

6. 「URI パス設定」パネルが表示されます。
Communications Express が配備される URI を入力します。たとえば「/uwc」。



注意 – Communications Express の配備に既存の URI を使用している場合は、その URI に Communications Express を配備する前に、過去のアプリケーションデータが設定ツールによりすべて削除されます。たとえば、Web アプリケーションがすでに配備されている /uwc などの URI に Communications Express を配備する場合、Communications Express の配備前に Communications Express 設定プログラムによって既存の Web アプリケーションが /uwc から削除されます。このため、以前のアプリケーションデータが失われ、アプリケーションへアクセスできなくなる可能性があります。

「次へ」をクリックします。

7. 「ホストドメインのサポートが必要ですか？」パネルが表示されます。
Communications Express でホストされているドメインのサポートを有効にするオプションを選択します。Calendar Server で、ホストドメインのサポートを有効にした場合だけ、このオプションを選択してください。

「次へ」をクリックします。

8. 「ユーザー/グループのディレクトリ (LDAP) サーバーの詳細」パネルが表示されます。
次の詳細を入力します。

「LdapURL」: ユーザー/グループの LDAP URL を
ldap://UG-LDAP-HOST:UG-LDAP-PORT の形式で指定します。

「バインド DN」: ユーザー/グループ管理者の LDAP 識別名を入力します。

「バインドパスワード」: ユーザー/グループ管理者のバインドパスワードを入力します。

「次へ」をクリックします。

9. 「DC ツリーサフィックス」パネルが表示されます。
DC ツリーサフィックスのベース識別名を入力します。このサフィックスは、Communications Express がドメインを検索するために使用します。

「次へ」をクリックします。

10. 「デフォルトドメイン名」パネルが表示されます。
デフォルトのドメイン名を入力します。

各ドメインには、特定のプロパティが設定されています。ユーザーが、必要なプロパティが設定されていないドメインにログインすると、デフォルトドメイン名からプロパティが生成されます。

11. 「シングルサインオンに **Identity Server** を有効にする」パネルが表示されます。

Access Manager のシングルサインオンを設定するには、「Communications Express 用の Identity Server のサポートを有効にする」を選択します。

Sun Java System Communications Express で Identity Server のサポートを有効にした場合だけ、「Identity Server の設定」パネルが表示されます。

ログイン URL、Access Manager 管理者 DN、パスワードなどの Access Manager 設定をこのパネルに入力します。

「ログイン URL」: Access Manager のログイン URL を *protocol://Access Manager hostname:Access Manager port/context -path-of-amserver/UI/Login* の形式で指定します。

「管理 DN」: DN=*uid=amAdmin, ou=people* や *Access Manager-root suffix* などの Access Manager 管理者の完全な LDAP DN (識別名) を入力します。

「管理パスワード」: Access Manager 管理者のパスワードを入力します。

「次へ」をクリックします。

12. 「Messaging Express ポート」パネルが表示されます。

このパネルは、「設定するコンポーネントを選択」パネルでメールコンポーネントを選択した場合だけ表示されます。

Messenger Express サービスが利用できるポート番号を入力します。

注 - Communications Express が Messenger Express が配備されているマシンと同じマシンに配備されていることを確認してください。

「次へ」をクリックします。

13. 「Calendar Server のホストおよびポートの設定」パネルが表示されます。

このパネルは、「設定するコンポーネントを選択」パネルでカレンダーコンポーネントを選択した場合だけ表示されます。

「Calendar Server のホスト名」: Calendar Server のホスト名を入力します。

「Calendar Server のポート番号」: Calendar Server の HTTP ポート番号を入力します。

「次へ」をクリックします。

14. 「Calendar Server の管理者の詳細」パネルが表示されます。

このパネルは、「設定するコンポーネントを選択」パネルでカレンダーコンポーネントを選択した場合だけ表示されます。

「管理者のユーザー ID」: Calendar Server の管理者名を入力します。たとえば「calmaster」。

「管理者のユーザーパスワード」: Calendar Server の管理者のパスワードを入力します。

注 - ここで入力した Calendar Server 管理者のユーザー ID 値が、Calendar Server の ics.conf ファイルに記述されている service.admin.calmaster.userid の値と同じであることを確認してください。

「次へ」をクリックします。

15. 「PAB ディレクトリサーバーの詳細」パネルが表示されます。

個人用アドレス帳 LDAP サーバーは、ユーザーの個人用アドレス帳が格納されるストアです。このパネルで、次のように詳細を指定します。

「LDAP URL」: PAB ストアの LDAP ホストおよびポートを指定します。URL は、次の形式で入力します。

ldap://PAB-ldap-hostname:PAB-ldap-portnumber

「バインド DN」: PAB ストアへのバインドに使用する LDAP DN を入力します。ここで指定するバインド DN には、ルートサフィックス o=PiServerDB の下にありデータを管理できる適切なアクセス権がなければなりません。

「パスワード」: バインドパスワードを入力します。

「次へ」をクリックします。

16. 「設定の準備が完了しました」パネルが表示されます。

設定プログラムは、マシンに十分なディスク容量があることを確認してから、設定の準備が完了したコンポーネントを一覧表示します。

「今すぐ設定」をクリックし、Communications Express を設定します。

設定変数を変更する場合は、「戻る」をクリックします。

設定プログラムを終了する場合は、「取消し」をクリックします。

17. 作業の概要とシーケンスの状態が表示されます。

「次へ」をクリックします。

18. 「設定の概要」パネルに、設定プログラムの状態が一覧表示されます。「詳細」ボタンをクリックすると、ログを確認できます。

19. 設定が正常に終了した場合だけ、「設定後の手順」パネルが表示されます。このパネルには、必要な共有コンポーネントがインストールされていない場合に、警告メッセージが表示される可能性があります。

設定プロセスを完了するために、次に説明する設定後の手順に従ってください。

設定後の手順

注 - Communications Express ファイルの場所を確認してください。

このガイドの「はじめに」にある 18 ページの「デフォルトパスとファイル名」の節を参照してください。

設定パラメータについては、第 2 章および 第 2 章を参照してください。

設定後の手順を実行する前に、次の手順がすでに実行されていることを確認してください。

▼ 設定後の手順

- 手順
1. **Communications Express** パッケージがすでにインストールされていれば、**Access Manager** シングルサインオンを使用したセットアップのために、**Core** および **LDAP** サービスが追加されていることを確認します。詳細については、このガイドの第 8 章にある 115 ページの「**Directory Server** のチューニング」の節を参照してください。
 2. **Communications Express** の設定を終えたら、次の手順を実行してください。
 - a. **Communications Express** のメールコンポーネントを有効にするには、シングルサインオンを設定します。**Messenger Express** と **Communications Express** の設定については、第 2 章を参照してください。
 - b. `calendar-server-install-directory/SUNWics5/cal/bin/config` (`/opt/SUNWics5/cal/bin/config` など) に移動します。
`ics.conf` ファイルを編集し、次のように設定します。
 - `service.http.allowadminproxy = "yes"`
 - `service.http.admins = proxy-admin-for-calendar-http-service`
 - `service.admin.calmaster.userid = the-value-specified-for-calendar.wcap.adminid-in-uwccconfig.properties`

- `service.admin.calmaster.cred = the-value-specified-for-calendar.wcap.passwd-in-uwccconfig.properties`
 - `service.wcap.anonymous.allowpubliccalendarwrite = "yes"`
 - `service.http.allowanonymouslogin = "yes"`
 - `service.calendarsearch.ldap = "no"`
- `ics.conf` ファイルを編集した場合は、変更を有効にするために Calendar Server を再起動します。

3. **Web** コンテナとしてどちらを選択したかに応じて、**Web Server** または **Application Server** を再起動します。
4. **Communications Express** の準備ができ、次の **URL** からアプリケーションにアクセスできるようになりました。

`http://Web-Container-host: Web-Container-port/URI path`

各表記の意味は次のとおりです。

`Web-Container-host` は、Communications Express アプリケーションが設定された Web コンテナインスタンスのホスト名です。

`Web-Container-port` は、Communications Express が設定された Web コンテナインスタンスのポート番号です。

`URI path` は「URI パス設定」パネルで指定したパスです。

Communications Express の設定解除

Communications Express を Web Server または Application Server 上に設定し、Communications Express を設定解除する必要がある場合は、次の手順を実行します。

- Communications Express を Web Server から設定解除するには、Web Server の `wdeploy` ツールを使用します。`wdeploy` ツールを実行する方法については、『Web Server 管理ガイド』を参照してください。
- Communications Express を Application Server から設定解除するには、Application Server の `asadmin` ツールを使用します。`asadmin` ツールを実行する方法については、『Application Server 管理ガイド』を参照してください。

Communications Express のファイルとディレクトリの配置

Communications Express をインストールして設定すると、そのディレクトリとファイルは、表 2-1 に示すように組織内に配置されます。この表には、すべてのディレクトリとファイルは記載されていません。代表的なサーバー管理作業にもっとも関連するものだけが示されています。

表 3-1 Communications Express のディレクトリとファイル

ディレクトリと凡例	デフォルトの場所と説明
Communications Express のベース <i>uwc-basedir</i>	デフォルトの場所: Solaris: <i>/opt/SUNWuwc/</i> Linux: <i>/opt/sun/uwc/</i> このディレクトリは、Communications Express がインストールされる場所です。 注: マシンあたり、1つの Communications Express ベースディレクトリだけが許可されます。
配備されるディレクトリ <i>uwc-deployed-dir</i>	デフォルトの場所: Solaris: <i>/var/opt/SUNWuwc/</i> Linux: <i>/var/opt/sun/uwc/</i> Communications Express は、このディレクトリに配備されます。Web コンテナは、Communications Express を読み込むときに、ファイルをこの場所から取得します。
Web アプリケーションのルートディレクトリ <i>web-inf</i>	<i>uwc-deployed-dir/WEB-INF</i> Communications Express Web アプリケーションの WEB-INF ディレクトリ。
Web アプリケーションのルートディレクトリ <i>web-inf</i>	<i>uwc-deployed-dir/WEB-INF</i> Communications Express Web アプリケーションの WEB-INF ディレクトリ。
設定 <i>config</i>	<i>uwc-deployed-dir/WEB-INF/config/</i> すべての Communications Express 設定ファイルが含まれています。
ドメイン <i>domain</i>	<i>uwc-deployed-dir/WEB-INF/domain/</i> ドメイン単位のローカライズおよびカスタマイズファイルが含まれています。

表 3-1 Communications Express のディレクトリとファイル (続き)

ディレクトリと凡例	デフォルトの場所と説明
スキン skin	<i>uwc-deployed-dir</i> /WEB-INF/skin/ ドメイン単位のテーマが含まれています。
ログ logs	<i>uwc-deployed-dir</i> /logs/ Communications Express のログファイルが含まれています。
システム管理者プログラム sbin	<i>uwc-basedir</i> /sbin/ Communications Express のシステム管理者の実行可能プログラムとスクリプトが含まれています。
ヘルプ help	<i>uwc-deployed-dir</i> /help Communications Express のヘルプファイルが含まれています。

第 4 章

設定の詳細

この章では、Communications Express の設定の詳細について説明します。

- 47 ページの「Communications Express の設定ファイル」
- 48 ページの「設定パラメータの詳細」
- 59 ページの「アドレス帳サーバーの水平方向のスケーラビリティのサポート」

Communications Express の設定ファイル

Communications Express では、設定パラメータを次の各ファイルに保持しています。

- `uwcauth.properties` ファイルには、認証、ユーザー/グループアクセス、およびシングルサインオン関連のパラメータが含まれています。
`uwcauth.properties` ファイルは、次の場所にあります。`uwc-deployed-path` /WEB-INF/config/
- `uwconfig.properties` ファイルには、カレンダー、メール、およびアドレス帳関連の設定パラメータが含まれています。`uwconfig.properties` ファイルは、次の場所にあります。`uwc-deployed-path` /WEB-INF/config/
- `db_config.properties` ファイルは、アドレス帳ストア設定の詳細を定義するために使用されます。デフォルトでは、Communications Express は 2 つのタイプの `db_config.properties` ファイルを配備します。
 - 個人アドレス帳ストア: 個人アドレス帳ストアの設定ファイルは、`uwc-deployed-path` /WEB-INF/config/ldapstore/db_config.properties にあります。
 - 企業アドレス帳ストア: 企業アドレス帳ストアの設定ファイルは、`uwc-deployed-path` /WEB-INF/config/corp-dir/db_config.properties にあります。

すべての設定ファイルは ASCII テキストファイルで、各行にはパラメータとその関連する値が次の形式で定義されています。

パラメータ = 値

Communications Express の設定時にパラメータが初期化されます。インストールを終えると、テキストエディタを使用して、ファイルを編集できます。

▼ 設定ファイルを編集する

- 手順
1. 編集権を持つユーザーでログインします。
 2. **.properties** ファイルがあるディレクトリに移動します。
 3. テキストエディタを使用してパラメータを編集します。
パラメータの表記規則は次のとおりです。
 - すべてのパラメータと関連する値は、等号 (=) で区切られなければなりません。等号の前後には空白文字またはタブを使用できます。
例

```
uwc-user-attr-sunUCDefaultApplication=calendar
```
 - コメント行は感嘆符 (!) で始まります。
設定パラメータにはデフォルトで、感嘆符を使用してコメントアウトされている場合があります。そのようなパラメータを使用するには、感嘆符を削除し、必要に応じて値を変更します。
 4. **Web Server** または **Application Server** を再起動して、新しい設定値を有効にします。

設定パラメータの詳細

カレンダー、メール、およびアドレス帳の設定パラメータは、次の各表で説明するように変更できます。

- 49 ページの「[uwconfig.properties](#) ファイルでの Messenger Express のパラメータの設定」
 - 49 ページの「[uwcauth.properties](#) ファイルでの Sun Java System LDAP Schema v.1 用 Directory Server 関連のパラメータの設定」
 - 51 ページの「[uwcauth.properties](#) ファイルでの Access Manager パラメータの設定」
 - 52 ページの「[uwcauth.properties](#) ファイルでのユーザー/グループのユーザー検索パラメータの設定」
 - 53 ページの「[uwconfig.properties](#) ファイルでの Calendar Server のパラメータの設定」

- 54 ページの「db_config.properties ファイルでのアドレス帳個人ストアパラメータの設定」
 - 55 ページの「db_config.properties ファイルでの企業ディレクトリパラメータの設定」
 - 59 ページの「アドレス帳サーバーの水平方向のスケーラビリティのサポート」
 - 58 ページの「SSL (Secure Socket Layer) の設定」
- メール、カレンダー、およびアドレス帳で設定可能なパラメータの詳細については、第 2 章を参照してください。

uwccconfig.properties ファイルでの Messenger Express のパラメータの設定

表 4-1 メールのパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
mail.deployed		Messenger Express が配備されているかどうかを指定します。このパラメータは、設定ウィザードの実行時に設定されます。 Messenger Express が配備されると、この属性が「true」になります。
webmail.host		Messenger Express が配備されるマシンのホスト名を指定します。 Messenger Express のホスト名は、Web Server が配備されるマシンの名前に対応させます。
webmail.port		Messenger Express HTTP Server が待機するポート番号を指定します。

uwcauth.properties ファイルでの Sun Java System LDAP Schema v.1 用 Directory Server 関連のパラメータの設定

認証 LDAP サーバーがユーザー/グループの LDAP と異なる場合は、表 3-2 に示すパラメータを編集できます。

表 4-2 LDAP Auth フィルタパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
ldapauth.ldaphost		LDAP ホスト値を指定します。 通常、ldapauth.ldaphost の値は ldapusersession の値と同じです。必要に応じて異なる値を設定できます。
ldapauth.ldapport		LDAP ポート番号を指定します。
ldapauth.dcreot		認証ツリーの DC ルートを指定します。
ldapauth.domainattr	inetDomainBaseDN,inetDomainStatus,inetDomainSearchFilter,domainUidSeparator,preferredDomainName	認証されるディレクトリから取得する属性のリストを指定します。
ldapauth.domainfilter	(!(objectclass=inetDomainBaseDN)(objectclass=inetDomainStatus)(objectclass=inetDomainSearchFilter)(objectclass=preferredDomainName))	ディレクトリから取得する属性のリストを指定します。
ldapauth.ldapbinddn		認証 LDAP にバインドしているユーザーのユーザー DN を指定します。
ldapauth.ldapbindcred		認証 LDAP にバインドしているユーザーのパスワードを指定します。
ldapauth.enablessl	false	認証を実行するディレクトリが SSL モードにあるかどうかを指定します。 セキュリティ保護された LDAP 接続を設定するには、デフォルト値を「true」に変更します。

表 4-3 LDAP ユーザーグループのパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
ldapusersession.ldaphost		ユーザー/グループの Directory Server のホスト名を指定します。
ldapusersession.ldapport		ユーザー/グループの Directory Server のポート番号を指定します。
ldapusersession.ldapbinddn		ユーザー/グループの Directory Server にバインドしている管理者のユーザー DN を指定します。

表 4-3 LDAP ユーザーグループのパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
ldapusersession.ldapbindcred		ユーザーツリーにバインドしている管理者のパスワードを指定します。
ldapusersession.dcreot		Sun Java System LDAP Schema v.1 内のユーザーエントリを解決するために使用するユーザー/グループ LDAP 内のドメインコンポーネント (DC) ツリーを指定します。

uwcauth.properties ファイルでの Access Manager パラメータの設定

表 4-4 Access Manager パラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
uwcauth.identity.enabled		Identity Server が使用可能かどうかを指定します。 Access Manager のシングルサインオンメカニズムを認証に使用する場合は、「true」を設定します。
uwcauth.identity.naming.url		Access Manager のネーミング URL を指定します。 たとえば uwcauth.identity.naming.url= protocol://hostname:port Context URI
uwcauth.identity.binddn		amAdmin ユーザーの完全な識別名 (DN) を指定します。 例 uid=amadmin, ou=People, o=siroe.com
uwcauth.identity.bindcred		amAdmin のパスワードを指定します。

注 - uwcauth.identity.enabled の値が “true” に設定されている場合は、uwcauth.identity.naming.url、uwcauth.identity.binddn、uwcauth.identity.bindcred を必ず設定する必要があります。

uwcauth.properties ファイルでのユーザー/グループのユーザー検索パラメータの設定

表 4-5 ユーザー検索パラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
ldapusersession.defaultugfilter	uid@domain	ユーザーエントリを取得するときに使用するデフォルトフィルタの構文を指定します。
ldapusersession.ldappoolmin	30	ユーザー/グループ LDAP 用に作成される LDAP ユーザー接続の最小数を指定します。
ldapusersession.ldappoolmax	100	ユーザー/グループ LDAP 用に作成される LDAP ユーザー接続の最大数を指定します。 配備の要件に合った最適な値を入力します。
ldapusersession.lookthru_limit	1000	検索の検索クエリの上限を指定します。

uwccconfig.properties ファイルでの Calendar Server のパラメータの設定

注 – Sun Java™ System Calendar Server で、プロキシ認証と匿名アクセスが有効になっていることを確認してください。

プロキシ認証と匿名アクセスを有効にするには、カレンダー設定ファイル `ics.config` に次の各 Calendar Server パラメータを設定します。

- `service.http.allowadminproxy = "yes"`
- `service.http.admins = includes-the-value-specified-for-calendar.wcap.adminid-in-uwccconfig.properties.`
- `service.admin.calmaster.userid = the-value-specified-for-calendar.wcap.adminid-in-uwccconfig.properties`
- `service.admin.calmaster.cred = the-value-specified-for-calendar.wcap.passwd-in-uwccconfig.properties`
- `service.wcap.anonymous.allowpubliccalendarwrite = "yes"`
- `service.http.allowanonymouslogin = "yes"`
- `service.calendarsearch.ldap = "no"`

プロキシ認証を有効にする方法、および Calendar Server のパラメータを設定する方法については、『Sun Java System Calendar Server 管理ガイド』を参照してください。

表 4-6 Calendar Server のパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>calendar.deployed</code>	<code>true</code>	カレンダーモジュールが配備されているかどうかを指定します。このパラメータは、設定ウィザードの実行時に設定されます。 カレンダーが配備されている場合は、この属性を「true」に設定します。
<code>calendar.wcap.host</code>		WCAP サーバーのホスト名を指定します。
<code>calendar.wcap.port</code>		WCAP が待機するポート番号を指定します。
<code>calendar.wcap.adminid</code>		WCAP サーバーの管理 ID を指定します。
<code>calendar.wcap.passwd</code>		WCAP サーバーの管理パスワードを指定します。

注 -

- `calendar.wcap.adminid` に割り当てた Calendar Server 管理者のユーザー ID が、Calendar Server の `ics.conf` ファイルに指定されている `service.admin.calmaster.userid` 値と同じであることを確認してください。
 - Calendar Server の管理者ユーザー ID に対応するエントリが LDAP サーバー上に存在している必要があります。
-

db_config.properties ファイルでのアドレス帳個人ストアパラメータの設定

表 3-7 は、`db_config.properties` ファイル内のデフォルトのアドレス帳個人ストア設定パラメータを一覧表示しています。

このファイルは次の場所にあります。

`uwc-deployed-path/WEB-INF/config/ldapstore/`

表 4-7 個人アドレス帳の個人ストアパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
<code>defaultserver.ldaphost</code>		個人アドレス帳 (PAB) ストアの LDAP ホストを指定します。
<code>defaultserver.ldapport</code>		ストアのポートを指定します。
<code>defaultserver.ldapbinddn</code>		個人アドレス帳ストアにバインドするために使用する DN を指定します。 ログインのタイプが「 <code>restricted</code> 」または「 <code>proxy</code> 」の場合は、この値を必ず入力する必要があります。 ログインのタイプが「 <code>anonymous</code> 」(匿名)の場合は、このパラメータの値を入力する必要はありません。
<code>defaultserver.ldapbindcred</code>		個人アドレス帳ストアにバインドするために使用する DN のパスワードを指定します。

表 4-7 個人アドレス帳の個人ストアパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
login_type	restricted	<p>LDAP ストアへの接続を保持するために使用する方法を指定します。</p> <p>このパラメータには、次の3つのいずれかの値を割り当てることができます。</p> <p>anon - 匿名ユーザーとして LDAP に接続します。</p> <p>restricted - アドレス帳ストアに対する操作権限を持つユーザーとして接続します。</p> <p>proxy - アドレス帳ストアを操作できるユーザーであると見せかけます。この値を指定すると、各操作で LDAP バインドをバイパスするため、パフォーマンスが向上します。</p> <p>注: ここで見せかけるユーザーには、管理レベルの ACL を設定することをお勧めします。</p>
defaultserver.ldappoolmin	4	個人アドレス帳ストア用に保持される LDAP クライアント接続の最小数を指定します。
defaultserver.ldappoolmax	12	個人アドレス帳ストア用に保持される LDAP クライアント接続の最大数を指定します。
defaultserver.ldappooltimeout	10	LDAP 接続がタイムアウトするまでの秒数を指定します。大規模な検索結果に対応するには、この値を大きくします。
lookthru_limit	1000	検索の検索クエリの上限を指定します。
delete_perm	true	<p>連絡先/グループエントリを削除用にマークするか、または完全に削除できるようにします。</p> <p>連絡先/グループを削除用にマークするには、このパラメータを false に設定します。</p> <p>連絡先/グループを完全に削除するには、このパラメータを true に設定します。</p>

db_config.properties ファイルでの企業ディレクトリパラメータの設定

表 3-8 は、db_config.properties ファイル内のデフォルトの企業ディレクトリパラメータを一覧表示しています。デフォルトでは、すべての LDAP 関連情報は、ユーザー/グループディレクトリで説明した値を基に設定されています。

db_config.properties ファイルは次の場所にあります。

WEB-INF/config/corp-dir/

表 4-8 企業ディレクトリパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
defaultserver.ldaphost		企業ディレクトリの LDAP ホストを指定します。
defaultserver.ldapport		企業ディレクトリのポートを指定します。
defaultserver.ldapbinddn		企業ディレクトリにバインドするために使用する DN を指定します。 ログインのタイプが「restricted」または「proxy」の場合は、defaultserver.ldapbinddn に必ず値を割り当てる必要があります。 ログインのタイプが「anonymous」(匿名)の場合は、このパラメータの値を入力する必要はありません。
defaultserver.ldapbindcred		バインドパスワードを指定します。
entry_id	uid	連絡先/グループエントリを特定するために使用する企業ディレクトリ内のキーを指定します。 entry_id には、UID か、または empid や主体 ID などの連絡先/グループ情報をフェッチするために使用するキーを設定できます。 xlate-inetorgperson.xml ファイルで、<entry entryID="db:uid"> の "uid" をここで指定した entry_id 値に置き換えます。
login_type	restricted	LDAP ストアへの接続を保持するために使用する方法を指定します。 このパラメータには、次の3つのいずれかの値を割り当てることができます。 anon - 匿名ユーザーとして LDAP に接続します。 restricted - アドレス帳ストアに対する操作権限を持つユーザーとして接続します。 proxy - アドレス帳ストアを操作できるユーザーであると見せかけます。この値を指定すると、各操作で LDAP バインドをバイパスするため、パフォーマンスが向上します。 注: 見せかけるユーザーには、読み取り専用アクセス権が付与されます。

表 4-8 企業ディレクトリパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
defaultserver.ldappoolmin	1	企業ディレクトリ用に維持される LDAP クライアント接続の最小数を指定します。
defaultserver.ldappoolmax	4	企業ディレクトリ用に維持される LDAP クライアント接続の最大数を指定します。
defaultserver.ldappooltimeout	10	LDAP 接続がタイムアウトするまでの秒数を指定します。大規模な検索結果に対応するには、この値を大きくします。
lookthru_limit	1000	検索の検索クエリの上限を指定します。

企業ディレクトリには、`xlate-objectclass-name.xml` という形式の `xlate` ファイルが 2 つあります。

- `xlate-inetorgperson.xml` - 連絡先用
- `xlate-groupofuniquemembers.xml` - グループ用

`xlate-objectclass-name.xml` の場合、`objectclass-name` は LDAP エントリタイプを特定するオブジェクトクラスを表します。たとえば `xlate-inetorgperson.xml` は、連絡先を特定するために使用されるオブジェクトクラス、`groupofuniquemembers` は Sun Java System Directory Server 内のグループを特定するために使用されるオブジェクトクラスです。

`xlate` ファイルには、LDAP スキーマと、連絡先またはグループのアドレス帳 XML スキーマとの間のフィールドマッピングが含まれています。マッピングは XML ノードに関して定義されています。例

`ab-xml-schema-keydb:LDAPField /ab-xml-schema-key`

各表記の意味は次のとおりです。

`ab-xml-schema-field` は、コード内でアドレス帳が使用する値です。

`LDAPField` は、LDAP 内の対応するフィールド名です。

`LDAPField` には適切なフィールド名を指定する必要があります。`LDAPField` に割り当てられた値は、企業ディレクトリ LDAP スキーマ内に存在する `LDAPField` の値に対応していなければなりません。

コード例 3-1 は、`xlate-inetorgperson.xml` ファイルの例です。

例 4-1 `xlate-introtperson` のデフォルトの内容

```
<abperson uid="db:uid">
  <entry entryID="db:uid">
    <displayname\>db:cn</displayname\>
    <description\>db:multilineDescription</description\>
    <creationdate\>db:createtimestamp</creationdate\>
    <lastmodifieddate\>db:modifytimestamp</lastmodifieddate\>
```

例 4-1 xlate-intropperson のデフォルトの内容 (続き)

```
</entry\>
<person\>
  <givenname\>db:givenname</givenname\>
  <surname\>db:sn</surname\>
</person\>
<organization\>
  <company\>db:company</company\>
  <organizationalunit\>db:ou</organizationalunit\>
  <location\>
    <building\>db:buildingnum</building\>
    <floor\>db:iplanetbuildinglev</floor\>
    <office\>db:roomNumber</office\>
  </location\>
  <title\>db:title</title\>
  <manager\>db:manager</manager\>
  <secretary\>db:secretary</secretary\>
</organization\>
<phone priority="1" type="work"\>db:telephoneNumber</phone\>
<phone priority="2" type="fax"\>db:facsimileTelephoneNumber</phone\>
<phone priority="3" type="mobile"\>db:mobile</phone\>
<phone priority="4" type="home"\>db:homePhone</phone\>
<phone priority="5" type="pager"\>db:pager</phone\>
<email priority="1" type="work"\>db:mail</email\>
<im priority="1" service="SunONE"\>db:uid</im\>
<im priority="2" service="AIM"\>db:aimscreenname</im\>
<im priority="3" service="ICQ"\>db:icqnumber</im\>
<postaladdress type="home"\>
  <street\>db:homePostalAddress</street\>
</postaladdress\>
<postaladdress type="work"\>
  <street\>db:postaladdress</street\>
</postaladdress\>
<weburl priority="1"\>
  <urladdr\>db:labeleduri</urladdr\>
  <description\>URL</description\>
</weburl\>
<weburl priority="2"\>
  <urladdr\>db:homepage</urladdr\>
  <description\>Home URL</description\>
</weburl\>
<calendar type="calendar"\>
  <urladdr\>db:caluri</urladdr\>
</calendar\>
</abperson\>
```

SSL (Secure Socket Layer) の設定

Communications Express が配備されている Web Server を SSL モードで設定できません。Communications Express が SSL モードで配備される Web Server を設定する方法については、Sun ONE Web Server Administrator's Configuration File Reference を参照してください。

▼ Communications Express を SSL モードで使用する

- 手順
1. `uwv-deployed-path/WEB-INF/config/uwcauth.properties` にある次の各設定パラメータを編集します。
 - `uwcauth.ssl.enabled=true`
 - `uwcauth.https.port=SSL-port-number-of-the-webserver-in-which-uwc-is-deployed`
Communications Express を、認証専用 SSL モードに設定することもできます。つまり認証は SSL 上で実行できますが、その後のアプリケーションへのアクセスは、SSL ではないモードになります。
 2. Messenger Express の `local.webmail.sso.uwcport` パラメータ値に、Communications Express が配備される Web Server の SSL ポート番号を設定する必要があります。
例
`local.webmail.sso.uwcport=Communications Express が配備される Web Server の SSL ポート番号`

▼ Communications Express に認証専用の SSL を設定する

- 手順
1. `uwcauth.properties` ファイルで、`uwcauth.ssl.enabled` を「false」に設定します。
 2. `uwcauth.https.port` に、Communications Express が配備される Web Server の SSL ポート番号を設定します。
 3. `uwcauth.ssl.authonly` を「true」に設定します。

注-2つのパラメータ `uwcauth.ssl.authonly` と `uwcauth.ssl.enabled` は、互いに排他的なパラメータです。

SSL では、Messaging SSO はサポートされていません。

アドレス帳サーバーの水平方向のスケラビリティのサポート

以前のリリースの Sun Java System Communications Express の場合、特定のドメインの個人用アドレス帳エントリは、`db_config.properties` ファイルに定義された `defaultserver` インスタンスで表現される LDAP の単一の場所に格納されていました。`db_config.properties` ファイルは、ドメインの `personalstore.properties` で示されるディレクトリ内に存在していました。たとえば、「`uwv-install/WEB-INF/config/ldappstore`」です。

この配備を、各個人用アドレス帳で多数のユーザーと連絡先をサポートするように拡張することはできませんでした。この制限を克服するために、Sun Java System Communications Express 6.2 では、管理者が `psRoot` 属性を使用して、各ユーザーの PAB データが LDAP の複数の場所に分散するようにユーザーをプロビジョニングできるようになりました。

たとえば、

```
[ldap://mydir.com:389/piPStoreOwner=jsmith,o=siroe.com,o=PiServerDb]
```

と指定できます。

図 3-1 は、アドレス帳サーバーの水平方向の拡張に使用されるアーキテクチャーの高レベルの概要を示しています。

アドレス帳の水平方向のスケラビリティアーキテクチャーの主要なコンポーネントは、次のとおりです。

- 個人ストア
- DB
- DBMap

個人ストアには、ユーザーのアドレス帳情報が保持されます。ユーザーが作成したすべてのアドレス帳の定義のほか、それらのアドレス帳内のすべてのエントリが含まれています。個人ストアは、それが格納されているディレクトリインスタンスと、その特定のディレクトリインスタンス内の DN を示す URL として表現されます。

DB には個人ストアの集合が含まれており、図 3-1 に示すように、アドレス帳サーバーは任意数の DB にアクセスできます。すべての DB は、その DB 用の接続パラメータを指定する DB ID で定義されます。各 DB のタイプは異なっていてもよく、また別の DB の場所を指すこともできます。

DBMap は、同じタイプの DB の集合です。各 DBMap には、その DBMap 用の設定情報を示す ID が割り当てられます。

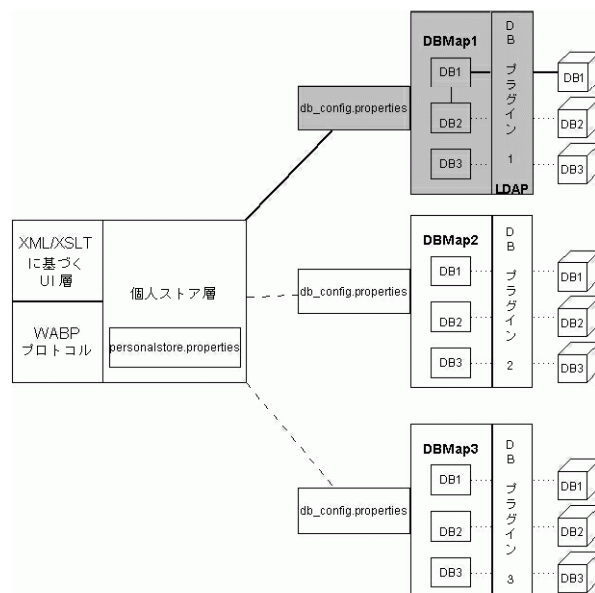


図 4-1 アドレス帳の水平方向のスケラビリティ

psRoot は、ユーザーの LDAP 内の属性であり、ホスト、ディレクトリインスタンスのポート、およびユーザーのアドレス帳エントリがある DN を指定します。psRoot は次の形式になります。ldap://ldap_host:ldap_port/DN

psRoot 属性の値によって、DB のタイプと DB の場所が決定されます。

psRoot の例では、

「ldap://mydir.com:389/piPStoreOwner=jsmith,o=siroe.com,o=PiServerDb」
 になっています。

「ldap://」は、ユーザーのアドレス帳個人ストアが LDAP DB プラグインを使用してアクセスされることを示しています。

「mydir.com:389」は、LDAP のホストとポートを指定しています。

「piPStoreOwner=jsmith,o=siroe.com,o=PiServerDb」は、個人ストアの DN を指定しています。

注 - アドレス帳サーバーには、スケラビリティポリシーに従ってユーザーの psRoot 値を分散するためのユーティリティは用意されていません。管理者は、組織にもっとも適した特定のポリシーを設定し、カスタムスクリプトでそのポリシー用の psRoot 値を設定する必要があります。

psRoot 属性は、ドメイン固有の `personalstore.properties` ファイル内にある `db.UserPsRoot` パラメータを使用して、有効または無効にすることができます。`db_config.properties` ファイル内の `defaultserver` パラメータを使用するには、このパラメータを “false” に設定します。ユーザーの psRoot 値を使用するには、このパラメータを 「true」 に設定します。psRoot で使用する各 Directory Server インスタンスには、54 ページの「[db_config.properties ファイルでのアドレス帳個人ストアパラメータの設定](#)」に一覧表示されている個人ストアパラメータを指定する必要があります。実行時に、psRoot 属性の値は `db-key.ldaphost` と `db-key.ldappport` を使用して、ディレクトリインスタンスに解決されます。ここで、`db-key` は、各インスタンスを区別するための任意の文字列です。`db-key.ldaphost` と `db-key.ldappport` の一致がまったく発見されなかった場合は、`defaultserver` インスタンスが使用されます。

psRoot 値の自動設定

新規ユーザーがログインすると、ユーザーのエントリ内の psRoot 属性にデフォルト値が設定されます。

新規ユーザーの psRoot 値は、`personalstore.properties` ファイル内に定義されている psRoot パターンと、`db_config.properties` ファイル内の `defaultserverhost` および `defaultserverPort` 値を使用して作成されます。たとえば、デフォルトの psRoot パターンを使用すると、デフォルトの psRoot 値は次の形式になります。

```
ldap://defaultserver_host  
:defaultserver_port/piPStoreOwner=%U,o=%D,o=PiServerDb
```

各表記の意味は次のとおりです。

%U = ユーザーのログイン ID。たとえば、「jsmith」。

%D = ユーザーのドメイン。たとえば、「siroe.com」。

第 5 章

シングルサインオンの実装

シングルサインオンを使用すると、エンドユーザーは 1 回認証を受ければ、もう一度認証を受けなくても複数のアプリケーションを使用できます。たとえば、シングルサインオンがカレンダーアプリケーションやメールアプリケーションで有効になっている場合、もう一度認証を受けなくても Communications Express にログインしてそのカレンダーアプリケーションやメールアプリケーションを使用することができます。Communications Express では、次の種類のシングルサインオンを実行できます。

- **Access Manager** シングルサインオン: Communications Express で Access Manager が有効になっていると、シングルサインオンが実行されます。この場合、Messenger Express と Communications Express は Access Manager シングルサインオンを使用して互いに通信します。
- **Messaging** シングルサインオン: Access Manager が存在しない場合、Messenger Express と Communications Express は、Messaging シングルサインオンを使用して互いに通信します。

この章には、次の節があります。

- [63 ページの「Access Manager シングルサインオンの設定」](#)
- [70 ページの「Messaging シングルサインオンの設定」](#)

Access Manager シングルサインオンの設定

この節では、Access Manager シングルサインオンを使用して互いに通信するように、Communications Express と Messenger Express を設定する方法について説明します。

スキーマモデルとして Sun Java System LDAP Schema, v2 を採用した場合、有効なユーザーセッションを取得するためには、Communications Express で Access Manager を有効にし、Access Manager のシングルサインオンメカニズムを使用する必要があります。

Communication Express のユーザーが Access Manager シングルサインオンを使用して、Messenger Express によって描画されるメールモジュールにアクセスできるようにするには、`msg-svr_install_root/sbin/configutil` にある `configutil` ツールを使用して、Messenger Express 固有のパラメータを変更する必要があります。インストーラでは Messenger Express 固有のパラメータが設定されないため、インストール後に、これらのパラメータを明示的に設定することが重要です。`configutil` ツールの使用の詳細については、『Sun Java System Messaging Server 管理ガイド』の第 4 章「一般的なメッセージング機能の設定」を参照してください。

Access Manager シングルサインオンを設定する場合、Communications Express と Access Manager は、同じ Web コンテナインスタンスまたは異なる Web コンテナインスタンスに SSL モードと非 SSL モードのどちらでも配備できます。Access Manager と Communications Express を異なる Web コンテナインスタンスに配備する場合は、Communications Express が配備されているシステム上に Access Manager Remote SDK を設定する必要があります。次に示すのは、Access Manager と Communications Express を異なる Web コンテナインスタンスに SSL モードと非 SSL モードの両方で配備する場合の各配備シナリオです。

- Access Manager と Communications Express を異なる Web コンテナインスタンスに非 SSL モードで配備する場合
- Access Manager と Communications Express を異なる Web コンテナインスタンスに SSL モードで配備する場合
- Access Manager は SSL モードで、Communications Express は非 SSL モードで、異なる Web コンテナインスタンスに配備する場合
- Access Manager と Communications Express を同じシステム上で動作している異なる Web コンテナインスタンスに非 SSL モードで配備する場合
- Access Manager と Communications Express を同じシステム上で動作している異なる Web コンテナインスタンスに SSL モードで配備する場合

▼ Communications Express で Access Manager によるシングルサインオンを有効にする

- 手順
1. `uwv-deployed-path/WEB-INF/config/uwcauth.properties` ファイルを開きます。
 2. 次に示す、`uwcauth.properties` ファイル内の **Communications Express** パラメータを変更して、**Access Manager SSO** を有効にします。

パラメータ	目的
uwcauth.identity.enabled	<p>Access Manager が有効かどうかを指定します。</p> <p>最初、この値は設定プログラムで設定されます。</p> <p>Access Manager を有効にするには、この属性を true に設定します。</p> <p>Access Manager を無効にするには、この属性を false に設定します。</p>
uwcauth.identity.login.url	<p>Access Manager のログイン URL のパラメータを指定します。</p> <p>たとえば、 <code>uwcauth.identity.login.url=http://siroe.example.</code></p>
uwcauth.identity.cookieName	<p>Access Manager で使用する Cookie 名を指定します。</p> <p><code>uwcauth.identity.cookieName</code> の値は、Access Manager 設定プログラムで指定した値に対応していなければなりません。</p> <p>Access Manager で使用されるデフォルトの Cookie 名は、<code>iPlanetDirectoryPro</code> です。</p>
uwcauth.identity.binddn	<p><code>amAdmin</code> の完全な DN を指定します。</p> <p>たとえば、 <code>uid=amAdmin, ou=People, o=siroe.example.com, o=example.com</code></p> <p>注: <code>uwcauth.identity.binddn</code> および <code>uwcauth.identity.bindcred</code> の値は、Access Manager のインストール時に入力した値に対応していなければなりません。</p> <p>たとえば、 <code>uwcauth.identity.binddn=uid=amAdmin, ou=People, o=siroe.example.com, o=example.com, uwcauth.identity.bindcred=password</code> など</p>
uwcauth.identity.bindcred	<p><code>amadmin</code> のパスワードを指定します。</p>

パラメータ	目的
uwcauth.http.port	<p>Communications Express が非 SSL ポート上に設定された場合の、Communications Express が待機するポート番号を指定します。</p> <p>デフォルトのポート番号は 80 です。</p>
uwcauth.https.port	<p>Communications Express が SSL ポート上に設定された場合の、Communications Express が待機する https ポート番号を指定します。</p> <p>デフォルトの https ポート番号は 443 です。</p>
identitysso.singlesignoff	<p>シングルサインオフの状態を指定します。</p> <p>この値が true に設定されていると、ログアウトによって Access Manager セッションは完全に無効になり、この Access Manager セッションに参加しているすべてのアプリケーションがサインアウトされます。</p> <p>この値が false に設定されていると、Communications Express セッションだけが無効になり、ユーザーは identitysso.portalurl に設定されている URL に移動されます。</p> <p>デフォルトの状態は true です。</p>
identitysso.portalurl	<p>Communications Express がリダイレクトされる URL を指定します。</p> <p>Access Manager が有効になっていて、シングルサインオフが false に設定されていると、Communications Express は identitysso.portalurl に割り当てられた URL にリダイレクトされます。</p> <p>デフォルトでは、Communications Express は http://www.sun.com にリダイレクトされます。</p>

3. **Access Manager** シングルサインオン用に **Communications Express** を設定する場合は、パラメータ **uwcauth.messagingsso.enable** の値を **false** に設定します。

これで、Communications Express は Access Manager のシングルサインオンメカニズムを使用して、有効なユーザーセッションを取得できるようになります。

▼ Access Manager と Communications Express を同じ Web コンテナインスタンスに配備する

- 手順
1. `IS-SDK-BASEDIR/lib/AMConfig.properties` ファイルを開きます。
`IS-SDK-BASEDIR` の例に、`/opt/SUNWam/lib` があります。
 2. 次のプロパティーが `AMConfig.properties` ファイルに設定されていることを確認します。
`com.ipplanet.am.jssproxy.trustAllServerCerts=true`
`AMConfig.properties` は `IS-SDK-BASEDIR/lib` にあります。
たとえば、`/opt/SUNWam/lib` などです。
 3. **Web** コンテナを再起動して、変更内容を有効にします。
これで、同じ Web コンテナインスタンスに SSL モードで配備された Access Manager と Communications Express は、Access Manager のシングルサインオンメカニズムを使用して、有効なユーザーセッションを取得できるようになります。

▼ Access Manager と Communications Express を異なる Web コンテナインスタンスに配備する

- 手順
1. `IS-INSTALL-DIR/bin` に移動します。
 2. **Access Manager** の `IS-INSTALL-DIR/bin/amsamplesilent` ファイルをコピーします。

```
cp amsamplesilent amsamplesilent.uwc
```
 3. 前の手順で作成された `amsamplesilent` のコピーを編集します。
配備の詳細に対応するようにパラメータを設定します。

Access Manager SDK を Sun Java System Web Server や Sun Java System Application Server などの Web コンテナに配備している場合は、`DEPLOY_LEVEL` 値を 4 に設定します。つまり、「コンテナ設定のみの SDK」のオプションを選択します。
 4. `AM_ENC_PWD` に、**Access Manager** のインストール時に使用したパスワード暗号鍵の値を設定します。
この暗号鍵は、次のファイルにあるパラメータ `am.encryption.pwd` に格納されています。

`${IS_INSTALL_DIR}/lib/AMConfig.properties`
 5. `NEW_INSTANCE` を `true` に設定します。

6. **Access Manager SDK** を **Sun Java System Web Server** に配備している場合は、**WEB_CONTAINER** を **WS6** に設定します。
Access Manager SDK を Sun Java System Application Server に配備している場合は、**WEB_CONTAINER** を **AS7** または **AS8** に設定します。
7. **amsamplesilent** ファイルのその他のパラメータの詳細と、**Access Manager Remote SDK**のパラメータを設定する方法については、『**Sun Java System Identity Server 管理ガイド**』の第1章「**Identity Server 2004Q2 設定スクリプト**」を参照してください。
8. **Web** コンテナで **Access Manager SDK** を設定します。
Access Manager で使用されている Directory Server が動作していることを確認してください。
9. **Access Manager SDK** を配備する **Web** コンテナインスタンスを起動します。
10. **IS-INSTALL-DIR/bin** にディレクトリを変更します。
11. 次のコマンドを実行します。

```
./amconfig -s amsamplesilent.uwc
```
12. **Web** コンテナインスタンスを再起動して、設定を有効にします。
これで、異なる Web インスタンスに SSL モードおよび非 SSL モードで配備された Access Manager と Communications Express は、Access Manager のシングルサインオンメカニズムを使用して、有効なユーザーセッションを取得できるようになります。

注 - Communications Express を配備したあとで Access Manager を有効または無効にする手順については、119 ページの「[Communications Express のチューニング](#)」を参照してください。

▼ Messenger Express で Access Manager によるシングルサインオンを有効にする

- 手順 1. **configutil** ツールを実行します。

```
msg-svr_install_root /sbin/configutil
```

Messenger Express を MEM として配備している場合は、次に示す Messaging Server のパラメータの値が、バックエンドの Messaging Server コンポーネント **mshttpd** とフロントエンドの MEM で同じであることを確認してください。

- **local.webmail.sso.uwclogouturl**
- **local.webmail.sso.uwchome**

- local.webmail.sso.uwcenabled
- local.webmail.sso.uwcport
- local.webmail.sso.singlesignoff
- local.webmail.sso.uwccontexturi
- local.webmail.sso.amcookieName
- local.webmail.sso.amnamingurl

2. 次に示す **Messenger Express** パラメータを設定して、**Communication Express** のユーザーが **Access Manager** シングルサインオンを使用して **Messenger Express** にアクセスできるようにします。

パラメータ	目的
local.webmail.sso.amnamingurl	<p>Access Manager の SSO を有効にします。</p> <p>このパラメータは、Access Manager がネーミングサービスを実行する URL を指すようにします。</p> <p>例</p> <pre>configutil -o local.webmail.sso.amnamingurl -v http://siroe.example.com:85/amserver/namingservi</pre>
local.webmail.sso.uwcenabled	<p>Communications Express から Messenger Express にアクセスできるようにします。</p> <p>アクセスを無効にするには、このパラメータを 0 に設定します。</p>
local.webmail.sso.uwclogouturl	<p>Messenger Express が Communications Express セッションを無効にするために使用する URL を指定します。</p> <p>Messenger Express で local.webmail.sso.uwclogouturl を明示的に設定している場合は、この値がログアウトに使用されます。それ以外の場合、Messenger Express は、要求ヘッダー内の http ホストに基づいてログアウト URL を作成します。</p> <p>例</p> <pre>http://siroe.example.com:85/base/UWCmain? op=logout</pre> <p>Communications Express が /uwc のように、/ の直下に配備されていない場合、このパラメータの値は次のようになります。</p> <pre>http://siroe.example.com:85/uwc/base/UWCmain? op=logout</pre>

パラメータ	目的
local.webmail.sso.uwcpport	Communications Express のポートを指定します。 たとえば、85
local.webmail.sso.uwcontexturi	Communications Express が配備される URI パスを指定します。 このパラメータは、Communications Express が / の下に配備されていない場合だけ指定します。 たとえば、Communications Express が /uwc に配備されている場合は、local.webmail.sso.uwcontexturi=uwc となります。
local.webmail.sso.amcookiename	Access Manager セッション Cookie 名を指定します。 uwcauth.properties ファイルで、uwcauth.identity.cookieName の値が local.webmail.sso.amcookiename の値に設定されていることを確認してください。 たとえば、iPlanetDirectoryPro
local.webmail.sso.uwchome	ホームリンクへのアクセスに必要な URL を指定します。

Messenger Express 固有のパラメータが設定されると、Communications Express のユーザーは Access Manager シングルサインオンを使用して Messenger Express にアクセスできます。

Messaging シングルサインオンの設定

この節では、Communications Express で Messaging シングルサインオンを設定する方法について説明します。スキーマモデルとして Sun Java System LDAP Schema, v.1 の採用を選択した場合は、Communications Express で Messaging SSO を有効にすることによって、認証に Messaging シングルサインオンメカニズムを使用する必要があります。

Communications Express を設定するとき、設定ウィザードでは SSO 関連の必須パラメータは何も設定されません。あとで説明する方法で、必要なパラメータを手動で設定する必要があります。また、Messaging SSO では仮想ドメインはサポートされておらず、さらに、Messaging SSO が有効になっている場合は Messenger Express を SSL モードで実行することはできません。

Messenger Express を MEM として配備している場合は、次に示す Messaging Server のパラメータの値がバックエンドとフロントエンドで同じであることを確認してください。

- local.webmail.sso.id
- local.webmail.sso.uwclogouturl
- local.webmail.sso.uwchome
- local.webmail.sso.ims.verifyurl
- local.webmail.sso.prefix
- local.sso.uwc.verifyurl
- local.webmail.sso.cookieDomain
- local.webmail.sso.enable
- local.webmail.sso.uwcenabled
- local.webmail.sso.uwcport
- local.webmail.sso.singlesignoff
- local.webmail.sso.uwccontexturi

▼ Messaging SSO を使用して Communications Express を有効にする

- 手順
1. `uwc-deployed-path/WEB-INF/config/uwcauth.properties` ファイルを開きます。
 2. `uwcauth.properties` ファイル内の、次のメール固有のパラメータを変更して、**Communications Express** から **Messenger Express** にアクセスできるようにします。

パラメータ	目的
uwcauth.appprefix	<p>他の信頼されるアプリケーションが SSO 用に生成した Cookie を検索するために使用されるプレフィックスを指定します。</p> <p>このプレフィックスは、シングルサインオン中に他の信頼されるアプリケーションによって生成された Cookie を探すために使用されます。</p> <p>配備に Messaging SSO を使用する場合、この属性には、Messaging Server の設定中に設定した <code>local.webmail.sso.prefix</code> の値を割り当てます。</p> <p>デフォルト値は <code>iPlanetDirectoryPro</code> です。</p>
uwcauth.appid	<p>Communications Express のアプリケーション ID を指定します。</p> <p>デフォルト値は <code>uwc</code> です。</p>
uwcauth.cookieDomain	<p>シングルサインオン Cookie の一部として保存されたドメイン名を指定します。</p>
uwcauth.messagingssso.enable	<p>Messaging シングルサインオン機能を有効または無効にします。</p> <p>このパラメータを <code>true</code> に設定するとシングルサインオンが有効になり、<code>false</code> に設定するとシングルサインオンが無効になります。</p> <p>また、Access Manager シングルサインオン用に Communications Express を設定する場合は、<code>uwcauth.messagingssso.enable</code> が <code>false</code> に設定されていることも確認してください。</p> <p>デフォルト値は <code>true</code> です。</p>
uwcauth.messagingssso.cookiepath	<p>シングルサインオン Cookie を保存する URI パスを指定します。</p> <p>デフォルト値は <code>/</code> です。</p>

パラメータ	目的
messagingssso.xxx.url	<p>SSO Cookie を検査するために使用する URL を指定します。</p> <p>xxx の値は、サーバーのアプリケーション ID で置き換えてください。</p> <p>たとえば、アプリケーション ID が “msg60” である Messaging Server で SSO を有効にする場合は、次の設定パラメータを追加する必要があります。</p> <p>messagingssso.msg60.url=http://servername/VerifySSO</p> <p>ここで示す xxx の値は、Messenger Express で local.webmail.sso.id に割り当てた値と同一でなければなりません。</p> <p>デフォルト値は http://servername/VerifySSO? です。</p>
messagingssso.uwc.url	<p>Communications Express が /uwc のように、/ の直下に配備されていない場合、このパラメータの値は次のようになります。</p> <p>http://servername:85/uwc/VerifySSO?</p>
messagingssso.appid	<p>Messaging Server のアプリケーション ID を指定します。</p> <p>messagingssso.appid の値は、Messaging Server の設定中に設定された local.webmail.sso.id と同じでなければなりません。</p> <p>デフォルト値は ims です。</p>
messagingssso.ipsecurity	<p>セッションアクセスログイン IP アドレスを制限するかどうかを指定します。</p> <p>この値が true に設定されていると、ユーザーがログインしたとき、サーバーはそのユーザーがログインに使用した IP アドレスを記憶します。その後、Messaging Server で SSO を確立しているときにそのユーザーに発行するセッション Cookie の使用を、その IP アドレスだけに許可します。</p> <p>この値が false に設定されていると、Communications Express はこの IP アドレスの確認を実行せず、アクセスをセッションに制限します。</p> <p>デフォルト値は true です。</p>

`uwc-deployed-path/WEB-INF/config/uwcauth.properties` ファイルでパラメータが設定されると、Communications Express のユーザーは、認証に Messaging シングルサインオンメカニズムを使用して Messenger Express にアクセスできます。

▼ Messaging SSO を使用して Messenger Express を有効にする

- 手順
1. **configutil** ツールを実行します。
`msg-svr_install_root/sbin/configutil`
 2. **configutil** ツールを使用して、次に示すメール固有のパラメータを設定します。

パラメータ	目的
<code>local.sso.<uwc-appid>.verifyurl</code>	Communications Express が /uwc のように、/ の真下に配備されていない場合、このパラメータのデフォルト値は次のようになります。 <code>http://siroe.example.com:85/uwc/VerifySSO?</code>
<code>local.webmail.sso.id</code>	他のアプリケーションから Messenger Express を識別するために使用する値を指定します。
<code>local.webmail.sso.cookieDomain</code>	このパラメータの文字列値は、Messenger Express HTTP サーバーが SSO Cookie の Cookie ドメイン値を設定するために使用します。 この値は、ピリオド (.) で始まる必要があります。たとえば、完全修飾ホスト名が <code>siroe.example.com</code> の場合は “.example.com” とします。 このパラメータに指定した値が <code>uwcauth.cookieDomain</code> に入力した値と同じであることを確認してください。 たとえば、.example.com
<code>local.webmail.sso.enable</code>	Messaging シングルサインオン機能を有効または無効にします。 Messaging シングルサインオン機能を無効にするには、この値を 0 に設定します。

パラメータ	目的
local.webmail.sso.prefix	<p>他の信頼されるアプリケーションが SSO 用に生成した Cookie を検索するために使用されるプレフィックスを指定します。</p> <p>この値が、uwcauth.appprefix に入力した値に対応していることを確認してください。</p>
local.webmail.sso.singlesignoff	<p>この値が 1 に設定されていると、ユーザーがログアウトしたとき、サーバーは local.webmail.sso.appprefix の値と一致する、そのユーザーのすべてのシングルサインオン Cookie を削除します。</p> <p>この値が 0 に設定されていると、サーバーは、そのシングルサインオンユーザー Cookie だけを削除します。</p>
local.webmail.sso.uwcenabled	<p>Communications Express からの Messenger Express アクセスを有効または無効にします。</p> <p>Communications Express からの Messenger Express アクセスを有効にするには、1 に設定します。</p> <p>Communications Express からの Messenger Express アクセスを無効にするには、0 に設定します。</p>
local.webmail.sso.uwclogouturl	<p>Messenger Express が Communications Express セッションを無効にするために使用する URL を指定します。</p> <p>Messenger Express で local.webmail.sso.uwclogouturl を明示的に設定している場合は、この値がログアウトに使用されます。それ以外の場合、Messenger Express は、要求ヘッダー内の http ホストに基づいてログアウト URL を作成します。</p> <p>たとえば、 http://siroe.example.com:85/base/UWCMain?op=logout</p> <p>Communications Express が /uwc のように、/ の真下に配備されていない場合、このパラメータのデフォルト値は次のようになります。</p> <p>http://siroe.example.com:85/uwc/base/UWCMain?op=logout</p>

パラメータ	目的
local.webmail.sso.uwcport	Communications Express のポートを指定します。 たとえば、85
local.webmail.sso.uwccontexturi	Communications Express が配備されるパスを指定します。 このパラメータは、Communications Express が / の下に配備されていない場合だけ指定します。たとえば、Communications Express が /uwc に配備されている場合は、local.webmail.sso.uwccontexturi=uwc となります。 たとえば、uwc
local.webmail.sso.uwchome	ホームリンクへのアクセスに必要な URL を指定します。 たとえば、http://www.sun.com
local.webmail.sso.ims.verifyurl	SSO Cookie を検査するために使用する URL を指定します。 たとえば、 http://siroe.example.com/VerifySSO? ここでは、WebMail がポート 80 に配備されていると仮定しています。

これで、Communications Express のユーザーは、認証に Messaging シングルサインオンメカニズムを使用して Messenger Express にアクセスできます。

第 6 章

障害追跡

この章では、発生する可能性のあるよくある問題と、エラーログを作成し、有効にする手順について説明します。

この章には、次の節があります。

- 77 ページの「問題の特定と障害追跡」
- 89 ページの「ログファイル」

問題の特定と障害追跡

Communications Express は、各種の製品に依存している、統合された Web ベースの通信クライアントを提供します。このため、使用中に、障害追跡が必要な問題が発生する場合があります。

問題の原因を特定するには、問題に取り組む前に、次に示す共通の障害追跡方法を実行してください。

▼ 共通の障害追跡方法

- 手順
1. 製品を設定した際に、『Sun Java System Messaging Server リリースノート』および『Sun Java System Communications Express 管理ガイド』で説明されている手順どおりに作業したかどうかを確認してください。
 2. 詳細なエラーログを確認し、障害の原因を判別できるように、**Communications Express** ログを有効にします。ロギングを有効にする手順については、[89 ページの「ログファイル」](#)の節を参照してください。
 3. コンポーネントのログにエラーおよび例外が報告されていないかどうかを確認します。ログファイルには、**Communications Express** のインストール、設定、および

実行中に発生したエラーのリストが保持されています。

一般に判明している問題の障害追跡

この節では、インストール、設定、起動、または Communications Express ユーザーインタフェースクライアントコンポーネントにアクセスしているときに、発生する可能性のある問題の概要を説明します。

次のリストは、Communications Express コンポーネントで一般に判明している問題の一部とその考えられる原因です。

- 78 ページの「Communications Express の設定」
- 80 ページの「カレンダーへのアクセス」
- 84 ページの「アドレス帳へのアクセス」
- 87 ページの「メールへのアクセス」
- 84 ページの「アドレス帳へのアクセス」
- 88 ページの「Access Manager を使用した認証」

Communications Express の設定

Web コンテナを再起動しても、設定の変更が反映されない

設定の変更が適切な設定パス内のファイルに適用されていることを確認します。

Communications Express 設定が完了すると、次に示す設定ディレクトリがシステムに作成されます。

- *uwc-deployed-path*/WEB-INF/config
- *uwc-deployed-path*/staging/WEB-INF/config
- *uwc-basedir*/SUNWuwc/WEB-INF/config

変更内容がアプリケーションに反映されるようにするには、設定の変更を *uwc-deployed-path*/WEB-INF/config に行うようにします。

uwc-deployed-path/staging/WEB-INF/config および *uwc-basedir*/SUNWuwc/WEB-INF/config の 2 つのディレクトリは、設定プログラムが設定中に内部的に作成して使用している一時的なプレースホルダです。これらのディレクトリ内への変更は、アプリケーションに反映されません。

設定タスクが失敗した

問題を特定するには、*uwc-basedir*/SUNWuwc/install/uwc-config_TIME-STAMP.log にあるログファイルを使用します。

TIME-STAMP は設定のタイムスタンプであり、YYYYMMDDhhmmss という形式です。

設定プログラムが正しく動作しない

問題を特定するには、次に示すデバッグモードを使用してデバッグオプションを有効にし、設定プログラムを呼び出します。

-debug: 一般的なデバッグ情報を生成する。

-debugMessage: エラーおよび警告のログを生成する。

-debugWarning: 警告メッセージおよびエラーメッセージのログを生成する。

-debugError: エラーメッセージのログを生成する。デフォルトではこのオプションが有効です。

UWC アプリケーションの起動に失敗し、**Web** コンテナのログには例外が示される

このエラーは、設定が不完全であるか不正である場合に発生することがあります。

回避策

- すべての設定後の手順を終えていることを確認します。設定後の手順については、第 2 章の 42 ページの「設定後の手順」を参照してください。
- 設定ウィザードで、設定の質問にすべて正しい値を指定したことを確認します。
- 設定ウィザードで指定した **Web** コンテナユーザーおよびグループが正しいことを確認します。

設定中に、「**chown**」コマンドが失敗する

回避策

設定プログラムを実行し、「**Web** コンテナのユーザーとグループ」パネルで **Web** コンテナユーザーおよびグループに正しい値を入力します。

認証後に **Access Manager** が有効な状態で **Communications Express** にアクセスすると、「この処理の実行中にエラーが発生しました」というメッセージが表示される

回避策

`uwcd-deployed-path/WEB_INF/config/uwcauth.properties` 内の `uwcauth.identity.binddn` および `uwcauth.identity.bindcred` プロパティに、**Access Manager SDK** をインストールしたときに指定した `amAdmin DN` のプロパティが設定されていることを確認します。51 ページの「`uwcauth.properties` ファイルでの **Access Manager** パラメータの設定」の節を参照してください。

Access Manager SSO のために `uwcauth.identity.binddn` と `uwcauth.identity.bindcred` にディレクトリ管理者の資格が指定される可能性があります。ディレクトリ管理者には、**Communications Express** が正常に機能するのに必須の特定のドメイン固有属性を取得するために必要な **ACL** がありません。

Access Manager SDK 統合用に **Web** コンテナ設定を変更するためのサポートがない

設定プログラムは、**Access Manager SDK** 統合用の **Web** コンテナ設定の変更をサポートしていません。

回避策

Access Manager に用意されているツールを手動で呼び出し、Access Manager 用の Web コンテナ設定を変更します。

SSL で Messaging SSO がサポートされていない

回避策

SSL による Messaging SSO をサポートするには、次の手順に従います。

▼ SSL による Messaging SSO を有効にする方法

- 手順
1. **Web Server** を **SSL** モードで設定します。
 2. **Communications Express** で **Web Server** の **SSL** ポートを設定します。
 3. `uwcauth.ssl.enabled=true` を設定します。
 4. `uwcauth.https.port` に **Web Server** の **SSL** ポートを設定します。
 5. **Messaging Server** を **SSL** モードで有効にします。
 6. `uwconfig.properties` 内の `webmail.port` に **Messaging Server** の **SSL** ポートを設定します。
 7. `messagingssso.ims.url` に **Messaging Server** の非 **SSL** ポートを指定します。
 8. **Web Server** と **Messaging Server** の両方に **Certificate Management Server** ルート認証局 (**CMS** ルート認証局) をインストールします。
 9. **Web Server** を再起動します。
 10. `local.webmail.sso.ims.verifyurl` に、**Messaging Server** の非 **SSL** ポートを指す値を指定します。
 11. **Messaging Server** を再起動します。

カレンダーへのアクセス

Communications Express からカレンダーにアクセスすると、「この処理の実行中にエラーが発生しました」というメッセージが表示される

このエラーは、次のどれか 1 つ以上の理由で表示されることがあります。

- `uwc-deployed-path/WEB_INF/config/uwconfig.properties` の **Calendar Server** の設定が正しくない
- **Communications Express** の `uwconfig.properties` ファイル内の **Calendar Server** の `calmaster` 情報が、**Calendar Server** の `cal deploy path/bin/config/ics.conf` ファイル内の値と同じでない

53 ページの「uwconfig.properties ファイルでの Calendar Server のパラメータの設定」を参照してください。

- Communications Express と Calendar Server の両方が、ホストドメインで有効でない

Communications Express と Calendar Server の両方が仮想ドメインに対して有効になっているか、または両方が仮想ドメインに対して無効になっているかのどちらかであることを確認してください。Communications Express および Calendar Server を仮想ドメインに対して有効にする方法の詳細については、93 ページの「カレンダーでのホストドメイン設定の有効化」を参照してください。

- Calendar Server が開始していない
- カレンダーサービスがこのユーザーで利用できない

Communications Express からカレンダーにアクセスすると、「カレンダーを使用できません。表示できませんでした。選択したカレンダーは削除されたか、存在していません。または、表示するための権限がありません。別のカレンダーを選択してください」というメッセージが表示される

このエラーは、ユーザーが Schema 2 で使用される commcli を使用して、ホストされていないドメインのセットアップシナリオでプロビジョニングしている場合に起こります。このエラーメッセージは、commcli がユーザーの LDAP エントリ内の icsCalendar 属性の値に @domain を誤って付加しているために表示されます。

回避策

ホストされていないドメイン環境で commcli を使用してユーザーをプロビジョニングする場合は、commadmin コマンドで -k legacy オプションを使用します。ホストドメイン環境の場合は、-k hosted オプションを使用します。-k オプションを指定しない場合は、ホストドメインのセットアップと見なされます。

例

例 6-1 commcli によるプロビジョニング

```
./commadmin user create -D admin -w password -X siroe .varrius .com -n siroe.varrius.com -p ok
```

または

すでにプロビジョニングされているユーザーに対応するエントリを削除できない場合は、icsCalendar、icsSubscribed、および icsOwned 属性から \q@domain \q の部分を手動で削除します。

Communications Express からドメインにわたるカレンダーの可用性を検索、招待、登録、または確認すると、「ドメインにわたるカレンダーを検索できません」、「ドメインにわたるカレンダーを招待できません」、「ドメインにわたるカレンダーを登録できません」、または「ドメインにわたるカレンダーの可用性の確認を実行できません」というメッセージが表示される

回避策

カレンダーの可用性を検索、招待、登録、または確認するには、クロスドメイン検索を有効にする必要があります。『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 管理ガイド』の第 13 章にある「クロスドメイン検索の有効化」の節を参照してください。

デフォルトの予定状況フィルタに関する問題

「カレンダーのオプション」ウィンドウにあるデフォルトの予定状況フィルタは、日別、週別、および月別のカレンダー表示で表示する予定を指定します。選択可能なオプションは、次のとおりです。「受諾済み」、「暫定」、「辞退済み」、「返信なし」。

予定状況として「受諾済み」オプションが選択されていると、日別、週別、または月別のカレンダー表示には受諾済みの出席依頼だけが表示されます。ただし、作成した予定はすべて、日別、週別、または月別のカレンダー表示に常に表示されます。

「カレンダーのオプション」ウィンドウでは、デフォルトでは「受諾済み」と「暫定」だけが選択されています。つまり、ユーザーには、辞退済みの予定や、まだ返信していない予定は表示されません。

回避策

日別、週別、月別、および年別表示にすべての予定を表示するには、「カレンダーのオプション」ウィンドウですべてのオプション、つまり、「受諾済み」、「暫定」、「辞退済み」、「返信なし」を選択してください。

2M バイトを超えるファイルのアップロード中に **Communications Express** で「サーバーエラー」が表示される

このエラーは、アップロードされるファイルのサイズが 2M バイトより大きい場合に、予定や作業のカレンダーへのインポート中または連絡先のアドレス帳へのインポート中に発生します。

デフォルトでは、**Communications Express** でインポートできるのは 2M バイトまでのファイルデータです。ただし、アップロードファイルのサイズ制限は設定できます。

回避策

アップロードファイルのサイズ制限を大きな値に設定します。

アップロードファイルのサイズ制限を大きな値に設定するには、web.xml 内のフィルタ `MultipartFormServletFilter` の、次に示す初期化パラメータを設定します。

- **fileSizeHardLimit**: エラーが発生し、要求処理が停止されるまでにアップロードされるファイルコンテンツの最大のバイトサイズを指定します。たとえば、ユーザーが 1 つの要求で 3 つのファイルをアップロードし、1 つ以上のファイルが `fileSizeHardLimit` の制限を超えた場合は、すべてのファイルが破棄され、フィルタによってエラー状況が報告されます。

- **requestSizeLimit**: 着信要求全体の最大のバイトサイズを指定します。要求がこの制限に違反している場合は、要求処理が停止され、入力ストリームは破棄されます。次に、フィルタはこの違反を、コンテンツサイズの強い制限値違反として処理します。この制限のデフォルト値は 4M バイトです。
- **fileSizeLimit**: アップロードされるファイルコンテンツの最大のバイトサイズを指定します。たとえば、ユーザーが 1 つの要求で 3 つのファイルをアップロードする場合は、これらのファイルのいずれもこの制限を超えることはできません。この制限は弱い制限値です。つまり、アップロードされるコンテンツがこの制限を超えた場合、そのコンテンツは破棄されますが、要求は引き続き正常に処理されるため、サイズの違反をアプリケーションで処理できます。この制限のデフォルト値は 1M バイトです。
- **failureRedirectURL** (省略可能): エラーが発生した場合に要求が転送されるリダイレクト URL を指定します。リダイレクト URL は、`failureRedirectURL` 初期化パラメータで設定できます。リダイレクト URL が指定されていない場合は、フィルタによって例外がスローされ、要求はただちに終了されます。この制限のデフォルト値は 2M バイトです。

たとえば、アップロードファイルのサイズを 10M バイトに増やすには、次の設定手順に従います。

▼ アップロードファイルのサイズを増やす

- 手順
1. `uwv-deployed-path/WEB-INF/web.xml` から、既存の `web.xml` のバックアップを取ります。
 2. `uwv-deployed-path/WEB-INF/web.xml` で、`web.xml` ファイルを編集します。
 3. `web.xml` 内の `MultipartFormServletFilter` の設定を、コード例 5-2 の太字で示すように指定します。

```
<web-app\>
..
..
<filter\>
  <filter-name\>MultipartFormServletFilter</filter-name\>
  <filter-class\>com.sun.uwc.calclient.MultipartFormServletFilter</filter-class\>
  ..
  ..
  <init-param\>
    <param-name\>fileSizeHardLimit</param-name\>
    <param-value\>10485760</param-value\>
    <description\>Ten mega bytes</description\>
  </init-param\>
  <init-param\>
    <param-name\>requestSizeLimit</param-name\>
    <param-value\>10485760</param-value\>
    <description\>Ten mega bytes</description\>
  </init-param\>
</filter\>
```

```

<init-param>
  <param-name>fileSizeLimit</param-name>
  <param-value>10485760</param-value>
  <description>Ten mega bytes</description>
</init-param>
<init-param>
  <param-name>failureRedirectURL</param-name>
  <param-value>put your url here</param-value>
  <description>Request is redirected to this url when uploaded file size crosses fileSizeH
</init-param>
..
..
</filter>
..
..
..
..
</web-app>

```

4. **Web** コンテナを再起動して、変更内容を有効にします。

▼ アドレス帳へのアクセス

アドレス帳にアクセスすると「サーバーエラー」が発生する。**Web Server** のログには次の例外が記録されている。「**org.apache.xml.utils.WrappedRuntimeException:The output format must have a '{http://xml.apache.org/xslt}content-handler' property!**」

この例外は、JDK Web Server が JDK 1.4.2 未満のバージョンを指しているときに、Web Server がスローします。Communications Express では、XML/XSL の構文解析に、xalan および xerces の最新バージョンを使用します。このエラーは、次の場合に表示されることがあります。

- 手順
1. **JES** インストーラで配備されていない **Web Server 6.1** を使用している。**Web Server 6.1** には通常、**JDK 1.4.1** が同梱されています。
 2. **Java Enterprise System** に含まれている共有 **xalan** および **xerces** コンポーネントのバージョンが最新ではない。

回避策

- このエラーが、Web Server を JES インストーラからインストールしていないために表示されている場合は、server.xml Web Server 設定ファイル内で *java* タグの *java_home* 属性として定義されている Web コンテナの JDK バージョンを手動でアップグレードします。

または

Web Server を Java Enterprise System から再インストールして、インストールプロセスによって JDK が自動的にアップグレードされるようにします。

注 - この手順を実行すると、その他の Web アプリケーションをすべて再配備する必要があります。万が一に備えて、`server.xml` ファイルのバックアップを取得しておいてください。

- このエラーが、共有 `xalan` および `xerces` コンポーネントのバージョンが最新でないために表示されている場合は、`uwc-deployed-path/WEB-INF/lib` から `xalan.jar` および `xerces.jar` のシンボリックリンクを削除します。

例

```
# cd /var/opt/SUNWuwc/WEB-INF/lib
```

```
# rm xalan.jar xercesImpl.jar
```

次に、Web Server を再起動します。

Communications Express からアドレス帳にアクセスすると、「この処理の実行中にエラーが発生しました」というメッセージが表示される

このエラーは、個人アドレス帳 (PAB) の LDAP 設定が正しくない場合に発生します。アドレス帳にアクセスすると、**Communications Express** は個人アドレス帳ストア、つまり PAB 用に設定された LDAP に接続します。個人アドレス帳ストアで接続を確立できない場合は、エラーが表示されます。

回避策

3. `WEB-INF/config/ldappstore/db_config.properties` 内の LDAP 設定を確認します。
4. 正しくない設定を編集します。
5. **Communications Express** が配備される **Web Server** を再起動します。
詳細については、55 ページの「`db_config.properties` ファイルでの企業ディレクトリパラメータの設定」の節を参照してください。

検索を実行すると、企業ディレクトリにインラインエラーが表示される

企業ディレクトリの LDAP 設定が正しく設定されていない場合に起こります。

回避策.

`WEB-INF/config/corp-dir/db_config.properties` の LDAP 設定に誤りがないかどうか確認し、誤りを修正して、**Communications Express** を再起動します。

詳細については、55 ページの「`db_config.properties` ファイルでの企業ディレクトリパラメータの設定」の節を参照してください。

企業ディレクトリの連絡先を表示すると、「表示」ウィンドウにエラーが表示される

このエラーは、企業ディレクトリ内の連絡先エントリにアクセスするキーが「uid」でない場合に表示されます。

uid は、Communications Express に設定されたデフォルト値です。

回避策

企業ディレクトリから連絡先にアクセスするには、`uwc-deployed-path/WEB-INF/config` 内の `db_config.properties` および `xlate-inetorgperson.xml` 設定ファイルで、キー値が希望の値に設定されていなければなりません。

これらのファイルに次の変更を加えます。

6. `uwc-deployed-path/WEB-INF/config/WEB-INF/config/corp-dir/db_config.properties` で適切なキー値を設定します。
7. 次のファイルで、`entry entryID="db:uid"` の “uid” の代わりに適切なキーを設定します。
`uwc-deployed-path/WEB-INF/config/WEB-INF/config/corp-dir/xlate-inetorgperson.xml`
8. **Communications Express** が配備される **Web Server** を再起動します。
詳細については、55 ページの「[db_config.properties](#) ファイルでの企業ディレクトリパラメータの設定」の節を参照してください。

psRoot の値を設定できない

ユーザー設定にある LDAP の属性 `psRoot` は、アドレス帳サーバーの水平方向のスケラビリティのために使用されます。詳細については、59 ページの「[アドレス帳サーバーの水平方向のスケラビリティのサポート](#)」を参照してください。配備に、アドレス帳サーバーの水平方向のスケラビリティが必要なければ、このエラーは無視してかまいません。

ユーザーが **Communications Express** に最初にログインすると、`psRoot` の自動的な設定が試みられます。しかし、この値が自動的に設定されない場合もあります。この状況は、一般に、**Java Enterprise System Directory Server** がインストールされていないために、**Java Enterprise System Directory Server** インストール後の **Java Enterprise System** の `comm_dssetup.p1` が実行されていない場合に発生します。このため、LDAP Schema が更新されていません。

スキーマが更新されていないため、水平方向にスケラブルなアドレス帳サーバーの配備に `psRoot` 属性が必要な場合も、この属性を手動で設定できません。

回避策

`psRoot` 属性の設定を有効にするには、**Directory Server** を、`psRoot` 属性を含むように更新します。それには、次の場所にある `ipUser` オブジェクトクラスの定義に属性 `psRoot` を含めます。

```
Directory ServerInstance/ config/schema/99user.ldif
```

注 - psRoot 属性を含むように Directory Server を更新する必要があるのは、現在の配備で Java Enterprise System Directory Server がインストールされておらず、Java Enterprise System Directory Server インストール後に Java Enterprise System の comm_dssetup.p1 を実行していない場合だけです。

メールへのアクセス

「メール」タブをクリックすると、ログインページが表示される

Communications Express と Messaging Server との間での設定が正しく行われていない場合に、この問題が発生します。Messaging Server と Communications Express がシームレスに動作するには、Messaging Server または Access Manager のシングルサインオンが使用可能でなければなりません。Communications Express を開始する前に、第 2 章で説明しているシングルサインオン設定の手順に従ってください。

Communications Express からメールにアクセスすると、「この処理の実行中にエラーが発生しました」というメッセージが表示される

このエラーは、Communications Express のメールコンポーネントが配備されていないか、または有効になっていない場合に、Communications Express にログインしているユーザーが「メール」をデフォルトのアプリケーションとして設定した場合に発生します。

回避策

管理者は、ユーザーの LDAP エントリの属性 sunUCDefaultApplication の値を「calendar」または「addressbook」に変更する必要があります。

ユーザーが **Communications Express** からログアウトしたにもかかわらず、ログインしたままになっている

この問題は、Access Manager (以前の Identity Server) と Communications Express が別のマシンにインストールされており、かつ Access Manager Remote SDK が Communications Express と同じマシンにインストールされている場合に発生します。

回避策

Communications Express がインストールされているマシンで、AMConfig.properties ファイル内の次の設定パラメータを指定します。

```
com.ipplanet.am.notification.url=url-to-access-web-container-of-CommunicationsExpress/servlet/com.ipplanet.services.comm.server.PLLRequestServlet
```

注 - AMConfig.properties ファイルは、IS-SDK-BASEDIR/SUNWam/lib にあります。

メールからアドレス帳機能にアクセスすると、次のような問題が発生する場合があります

- カレンダ、アドレス帳、および「オプション」ページに「メール」タブページからアクセスできない。
- メール作成ウィンドウで「宛先」をクリックするか、アドレス帳で「メールの送信」をクリックすると、**JavaScript** エラーが表示される。
- メールのオプションが保存されない。

ブラウザで JavaScript を使用してこれらの機能を相互運用させるには、Communications Express と Messenger Express (MEM) を同じホストに配備しなければなりません。

Access Manager を使用した認証

有効なユーザー ID およびパスワードを入力しても認証できない

認証は次のような理由で失敗します。

- ユーザーが commcli または Access Manager (以前の Identity Server) を使用してプロビジョニングされておらず、Sun Java System LDAP Schema v.2 が使用されている。

回避策

Sun Java System LDAP Schema v.2 を使用している場合は、そのユーザーが commcli ユーティリティーまたは Access Manager UI コンソールを使用して追加されていることを確認します。

- ログインしようとしているユーザーが組織に存在しない。
uwcd-deployed-path/WEB_INF/config/uwcauth.properties に定義されている defaultdomain プロパティは、user@domain の形式のドメイン情報がない場合にユーザー ID を認証するために使用されます。ユーザーがそのドメインの組織ツリー内に存在しない場合は、認証に失敗します。
- *uwcd-deployed-path/WEB_INF/config/uwcauth.properties* にある管理者の資格が正しくない。
詳細については、51 ページの「[uwcauth.properties ファイルでの Access Manager パラメータの設定](#)」を参照してください。

ログファイル

各種のシステムコンポーネントから運用時に生成されるログ情報は、問題を切り分けて障害追跡する際に非常に役に立ちます。

▼ ロギングを有効にする

- 手順 1. `uwc-deployed-path/WEB-INF/config` ディレクトリ内のファイル `uwcllogging.properties` を編集します。

`uwcllogging.properties` ファイルには、次に示すプロパティーが格納されています。

モジュール/ログ制御ファイル	パラメータ	デフォルト値	説明
設定			ログは、 <code>/opt/SUNWuwc/install/uwc-config</code> <code>_TIME-STAMP.log</code> に タイムスタンプ付き のファイルで保持さ れます。
Communications Express <code>uwc-deployed-path/WEB-INF/config/uwcllogging.properties</code>	<code>uwc.logging.enable</code>	no	ロギングを有効また は無効にします。 ロギングを有効にす るには、 <code>uwc.logging.enable</code> のプロパティー値 を「yes」に変更しま す。たとえば、 <code>uwc.logging.enable=yes</code>
Communications Express <code>uwc-deployed-path/WEB-INF/config/uwcllogging.properties</code>	<code>uwc.log.file</code>	<code>uwc-deployed-path/logs</code> 例 <code>/var/opt/SUNWuwc/</code>	<code>uwc.log.file</code> の場所 を指定します。 必要に応じてログ ファイルの場所を変 更します。 Web Server がこの ファイルに書き込め ることを確認しま す。

モジュール/ログ制御 ファイル	パラメータ	デフォルト値	説明
Communications Express <i>uwc-deployed-path/WEB-INF/config/uwclogging.properties</i>	<code>uwc.log.level</code>	INFO	アプリケーションの ログレベルを指定し ます。 アプリケーションの ログレベルを希望す るレベルに変更しま す。 指定できるログレベ ルの値は次のとおり です。 WARNING、INFO、 および FINE、 SEVERE。

モジュール/ログ制御 ファイル	パラメータ	デフォルト値	説明
アドレス帳 <i>uwc-deployed-path/WEB-INF/config/uwcconfig.properties</i>	<code>log.file</code>	<code>/tmp/trace.log</code>	ログファイルの場所 を指定します。 必要に応じてログ ファイルの場所を変 更します。 Web Server がこの ファイルに書き込め ることを確認しま す。
アドレス帳 <i>uwc-deployed-path/WEB-INF/config/uwcconfig.properties</i>	<code>uwc.log.level</code>	3	アプリケーションの ログレベルを指定し ます。 このモジュールのロ ギングを無効にする には、この値を 0 に 設定します。
メール			『Sun Java System Messaging Server 管 理ガイド』の第 20 章「ログ記録とログ 解析」を参照してく ださい。

2. `uwclogging.properties` および `uwccconfig.properties` ファイルにデ
フォルト値を設定したら、**Web Server** を再起動します。



注意 - ログイングを有効にすると、システムのパフォーマンスに影響があります。

第7章

ホストドメインの設定

Communications Express では、組織のホストドメイン構造をサポートしています。

この章では、ホストドメインを有効にするために Communications Express に加える変更について説明します。

- 93 ページの「ホストドメインの有効化」
- 94 ページの「ホストドメインの設定」

ホストドメインの有効化

この節では、ホストドメイン (仮想ドメインともいう) を有効にするために Communications Express に加える変更について説明します。

カレンダーでのホストドメイン設定の有効化

カレンダーでホストドメイン設定を有効にするには、
`uwc-deployed-path/WEB_INF/config/uwcauth.properties` ファイル内の
`virtual domain.mode` パラメータを “y” に設定し、Calendar Server をホストドメイン用に設定する必要があります。Calendar Server をホストドメイン用に設定する方法については、『Sun Java System Calendar Server 管理ガイド』の第5章「ホストされたドメインの設定」を参照してください。

メールでのホストドメインのプロビジョニング

ドメインをプロビジョニングし、組織のツリー内にホストドメインエントリを作成する方法については、Sun Java System LDAP Schema v.1 用の『iPlanet Messaging Server 5.2 Provisioning Guide』の第2章「Provisioning Domains」を参照してください。

メールクライアントのインタフェースを各ドメイン用にカスタマイズする方法については、『Sun Java System Communications Express Customization Guide』の第8章「Customizing Communications Express for a Specific Domain」を参照してください。

アドレス帳でのホストドメイン設定の有効化

ホストドメインを有効にするには、次のファイルを変更します。

- *uwc-deployed-path*/WEB-INF/domain/personalstore.properties ファイル
- *uwc-deployed-path*/WEB-INF/domain/defaulttps/defaulttps.xml ファイル

ホストドメインの設定

ドメイン関連の設定可能なパラメータは、次に示すファイルに格納されます。

- *uwcdomainconfig.properties*
- *personalstore.properties*
- *defaulttps/defaulttps.xml*
- *lang/i18n.properties* (たとえば *en/i18n.properties*)

Communications Express を配備すると、これらのファイルはデフォルトで *uwc-deployed-path*/WEB-INF/domain ディレクトリにコピーされます。

特定のユーザーセッションでは、ドメイン関連のプロパティファイルは次の順序で検索されます。

▼ ホストドメイン

- 手順
1. *uwc-deployed-path*/WEB-INF/domain/ *user\qs domain/property-files*
 2. *uwc-deployed-path*/WEB-INF/domain/ *property-files*

ホストドメインの作成

この節では、ホストドメインを作成するために実行する必要がある手順について説明します。

▼ ドメイン関連のプロパティを特定のドメインに指定する場合は、次の手順を実行します。

- 手順
1. ドメイン名のディレクトリを `uwc-deployed-path/WEB-INF/domain` に作成します。
例: `uwc-deployed-path/WEB-INF/domain/domain-name`
 2. `uwc-deployed-path/WEB-INF/domain` ディレクトリにあるドメイン関連の設定ファイルをこのディレクトリにコピーします。ドメイン関連のパラメータについては、94 ページの「ホストドメインの設定」の節を参照してください。
 3. `uwc-deployed-path/WEB-INF/domain/domain-name` ディレクトリ内のプロパティファイルを後述のとおりカスタマイズします。

4. **Access Manager** のログイン URL を **Communications Express** のドメイン固有の URL に従って作成できるようにするには、**Access Manager** の仮想ホスト名に、完全修飾の仮想ホスト名 `uwc.isvirtualhostname` を設定します。

たとえば、

```
ce.virtualdomain.com.isvirtualhostname=is.virtualdomain.com
```

であり、`http://ce.virtualdomain.com/uwc` から **Communications Express** にアクセスしている場合、

Access Manager の URL は次のように表示されます。

```
http://is.virtualdomain.com/amserver/UI/Login.
```

完全修飾の仮想ホスト名が **Access Manager** の仮想ホスト名にマップされていない場合、**Communications Express** は **Access Manager** のログイン URL を、`uwcauth.identity.login.url` に設定されている **Access Manager** の静的ログイン URL に基づいて作成します。

たとえば、

```
uwcauth.identity.login.url=http://siroe.com:85/amserver/UI/Login
```

であり、`http://ce.varrius.com:80/uwc` などのドメイン固有の URL から **Communications Express** にアクセスしている場合、**Communications Express** は IS のログイン URL を次のように作成します。

```
http://siroe.varrius.com:85/amserver/UI/Login
```

ここで、ドメインは `varrius.com` です。

ドメインが `ce.varrius.com` の場合、**Communications Express** は **Access Manager** のログイン URL を次のように作成します。

```
http://siroe.ce.varrius.com:85/amserver/UI/Login.
```

5. **Access Manager** の設定に次の変更を加えます。

- a. **AMconfig.properties** で、**FQDN** マッピングを定義します。デフォルトでは、**AMconfig.properties** ファイルは次の場所にあります。

/etc/opt/SUNWam/config/AMconfig.properties

たとえば、Access Manager が仮想ホストから **is.virtualdomain.com** としてアクセスされている場合、FQDN マッピングは次のように表示されます。

```
com.sun.identity.server.fqdnMap[is.virtualdomain.com]=is.virtualdomain.com
```

- b. **service configuration -\> platform** の下の **cookie domains** にある追加の **Cookie** ドメインフィールドに **virtualdomain.com** を追加します。

ホストドメイン用のパラメータの設定

このあとの各節では、Communications Express 内のドメインで設定可能な次の設定について説明します。

- 96 ページの「**uwcdomainconfig.properties** ファイル内のパラメータの設定」
- 103 ページの「グローバル GUI のカスタマイズ」
- 103 ページの「**uwcdomainconfig.properties** ファイル内の言語の設定」

uwcdomainconfig.properties ファイル内のパラメータの設定

uwcdomainconfig.properties ファイルは、カレンダーおよびアドレス帳関連のユーザー設定のデフォルト値を保持します。この値は、ドメイン単位で設定可能です。これらのデフォルトユーザー設定値は、新規ユーザーが Communications Express のカレンダーおよびアドレス帳に初めてアクセスするときに、動的に割り当てられます。

表 6-1 は、アプリケーション内のデフォルトユーザー設定を一覧表示しています。

表 7-1 uwcdomainconfig.properties ファイル内のデフォルトユーザー設定

パラメータ	デフォルト値	説明
uwc-user-attr-sunUCDefaultApplication		ログイン後に表示されるページを指定します。 Messenger Express を配備すると、デフォルトで「メール」ページがログインページとして表示されます。それ以外の場合は、「カレンダー」ページが表示されます。カレンダーが配備されていない場合は、「アドレス帳」ページが表示されます。
uwc-user-attr-sunUCDefaultEmailHandler	uc, desktop	電子メールメッセージをアプリケーションから送信するためのデフォルトの電子メールクライアントを指定します。 デフォルトの電子メールクライアントを Messenger Express またはブラウザのメールクライアントに設定できます。
uwc-user-attr-sunUCDateFormat	M/D/Y	日付に表示する日、月、および年の順序を指定します。 選択可能なオプションは、次のとおりです。 M/D/Y、D/M/Y、Y/M/D
uwc-user-attr-sunUCDateDelimiter	/	日付の区切り文字を指定します。 区切り文字とは、日付の日、月、年を区切る文字のことです。 区切り文字には、カンマ (,)、スラッシュ (/)、またはハイフン (-) を指定できます。
uwc-user-attr-sunUCTimeZone	America/Los_Angeles	カレンダーを作成するタイムゾーンを指定します。 次の地域から任意の有効なタイムゾーンを選択できます。 「北米および南米」、「ヨーロッパおよびアフリカ」、「アジアおよび環太平洋地域」。

- 96 ページの「[uwcdomainconfig.properties](#) ファイル内のパラメータの設定」は、カレンダーアプリケーションに関連したユーザー設定を一覧表示しています。

表 7-2 uwcdomainconfig.properties ファイル内のデフォルトカレンダー設定

パラメータ	デフォルト値	説明
uwc-user-attr-icsExtendedUserPreferencesDefaultView	dayview	ログイン後にデフォルトのカレンダーで表示するビューを指定します。選択可能なオプションは、次のとおりです。 dayview、weekview、monthview、および yearview。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPreferencesShowCompletedTasks	true	完了した作業を、カレンダーの「作業」パネルに表示するかどうかを指定します。 完了した作業をカレンダーの「作業」ペインに表示する場合は、デフォルト値を「true」に変更します。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPreferencesDefaultCategory	Business	作成する予定または作業のデフォルトのカテゴリを指定します。 選択可能なカテゴリは、次のとおりです。 「記念日」、「約束」、「誕生日」、「仕事」、「朝食」、「クラス」、「電話会議」、「夕食」、「休日」、「昼食」、「会議」、「その他」、「個人用」、「セミナー」、「トレーニング」、「旅行」、「不在返信」、および「インタビュー」。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPreferencesDayHead	0	1日の開始時刻を時単位で指定します。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPreferencesDayTail	23	1日の終了時刻を時単位で指定します。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPreferencesHourInterval	1 (1時間)	1日を分割する間隔を指定します。 日次および週次のビューでは、1日が30分間隔または1時間間隔に分割されます。 デフォルトの分割値を PT0H30M (30分) に変更できます。
uwc-user-attr-icsFirstDay	1	カレンダーで週の初めと見なす曜日を指定します。デフォルトでは、日曜日 (1) が週の始まり、土曜日 (7) が週の終わりとして見なされます。
uwc-user-icsExtendedUserPreferencesWeekEndDays	6,7	カレンダービューで週末と見なす曜日を指定します。 デフォルトでは、日曜日 (1) が週の始まり、土曜日 (7) が週の終わりになります。 数字をカンマ区切りにしたリストが、週末とみなす曜日を表します。

表 7-2 uwcdomainconfig.properties ファイル内のデフォルトカレンダー設定 (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefsIncludeWeekends	false	カレンダーの週末および月次ビューでの週末の表示を有効または無効にします。 週末の曜日をカレンダーの週末および月次ビューに表示する場合は、デフォルト値を「true」に設定します。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefsSingleCalendar	true	カレンダーをそのカレンダーのタイムゾーンで表示するかどうかを指定します。 カレンダーをそのカレンダーのタイムゾーンで表示しない場合は、デフォルト値を「false」に変更します。その場合は、すべてのカレンダーが、「グローバルオプション」タブで指定したタイムゾーンで表示されます。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefsDefaultAlarmStart	15	アラームで予定または作業のどれだけ前にアラームを送信するかを、時間数と分数で指定します。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefsNotifyEnabled	false	新しい予定が作成されるときに、内部の招待者に電子メールメッセージ (iCal 添付書類を含む) を送信するかどうかを指定します。 有効な値は、次のとおりです。false、true。

- 表 6-3 は、設定可能なアドレス帳のデフォルトユーザー設定を一覧表示していません。

表 7-3 uwcdomainconfig.properties ファイル内のデフォルトのアドレス帳設定

パラメータ	デフォルト値	説明
uwc-user-sunAbExtendedUserPrefsAddressBook	Personal Address Book	デフォルトのアドレス帳の名前を指定します。
uwc-user-attr-sunAbExtendedUserPrefsAbDescription	personal address book.	デフォルトのアドレス帳の短い説明を指定します。
uwc-user-attr-sunAbExtendedUserPrefs-abEntriesPerPage	25	ページに表示するアドレス帳エントリの最大数を選択します。選択可能なオプションは、次のとおりです。25、50、75。
uwc-user-attr-sunAbExtendedUserPrefs-abSearchDisplayColumn	1	検索列に表示する値を指定します。デフォルトでは、第 1 列には、連絡先またはグループの名前が表示されます。

表 7-3 uwcdomainconfig.properties ファイル内のデフォルトのアドレス帳設定 (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
uwc-user-attr-sunAbExtendedUserPrefs-abSearchDisplayColumn	2	<p>アドレス帳の第 2 列に表示する値を指定します。</p> <p>表示列名には、次の項目を設定できます。</p> <p>displayname、company、title、primaryphone、workphone、homephone、faxphone、pagerphone、primaryemail、email2、email3、homeaddress、workaddress、weburl1、weburl2、calendarurl、freebusyurl、birthday、anniversary、ou、edit、viewcalendar。</p>
uwc-user-attr-sunAbExtendedUserPrefs-abSearchDisplayColumn	3	<p>アドレス帳の第 3 列に表示する値を指定します。</p> <p>表示列名には、次の項目を設定できます。</p> <p>displayname、company、title、primaryphone、workphone、homephone、faxphone、pagerphone、primaryemail、email2、email3、homeaddress、workaddress、weburl1、weburl2、calendarurl、freebusyurl、birthday、anniversary、ou、edit、viewcalendar。</p>
uwc-user-attr-sunAbExtendedUserPrefs-abSearchDisplayColumn	4	<p>アドレス帳の第 4 列に表示する値を指定します。</p> <p>表示列名には、次の項目を設定できます。</p> <p>displayname、company、title、primaryphone、workphone、homephone、faxphone、pagerphone、primaryemail、email2、email3、homeaddress、workaddress、weburl1、weburl2、calendarurl、freebusyurl、birthday、anniversary、ou、edit、viewcalendar。</p>

personalstore.properties ファイルの設定

personalstore.properties ファイル内のパラメータを変更して、アドレス帳ストア、企業ディレクトリ、および任意のリモートディレクトリを設定します。

表 6-4 は、personalstore.properties ファイルに格納されている設定を一覧表示しています。

表 7-4 personalstore.properties ファイルに格納されている設定

パラメータ	デフォルト値	説明
db.defaultpsrootpattern	ldap:///piPStoreOwner=%U/%D/%O	この LDAP 値を動的に構成するために使用するパターンを指定します。psRoot は、ユーザーエントリが格納されている場所を特定します。 %U = ユーザーの uid ("jsmith") %D = ユーザーのドメイン ("siroe.com") %O = ドメインのもっとも重要な部分 ("siroe")
db.xxx.class	com.iplanet.iabs.ldapplug	LDAP を実装している Java クラスの名前を指定します。たとえば LDAP プラグインなどです。
db.xxx.urlmatch		URL を次の形式で指定します。 ldap://host:port/DN このパラメータを基にして、xxx インスタンスを識別します。 この値は、defaultps.xml ファイルに格納されている「bookremoteurl」属性に対応していなければなりません。
db.xxx.configpath		このインスタンスの LDAP 情報を含む設定ディレクトリへのパスを指定します。 相対パスの場合は、このファイルからの相対位置となります。
db.xxx.wildcardsearch		ワイルドカード検索で指定される最小文字数を指定します。
db.xxx.randompaging	false	プラグインでランダムアクセスをサポートするか、または、各ページには先頭ページからアクセスしなければならないかを指定します。 false の場合は、正しいページが得られるまで検索プロセスが続行されます。

表 7-4 personalstore.properties ファイルに格納されている設定 (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
db.xxx.corporatedir	false	企業ディレクトリの場合は、この値を true にします。
db.useUserPsRoot	false	ユーザーの psRoot 値を使用するには、この値を true に設定します。この値が false に設定されていると、defaultserver 値が使用されます。

defaultps.xml ファイルの設定

defaultps.xml ファイルには、ユーザーの初回ログイン時に LDAP ストアに作成された個人および企業アドレス帳のデフォルトの定義が含まれています。

各アドレス帳ノードにはアドレス帳定義があり、この定義は defaultps.xml ファイルが存在するドメイン内のユーザー用に作成されています。

次に示すのは、個人アドレス帳および企業アドレス帳の定義を含む defaultps.xml の XML セクションの例です。

個人用アドレス帳 XML

例 7-1 個人アドレス帳定義を含む XML セクション

```
<book booktype="abook"\>
<bookoc\>piLocalBook</bookoc\>
<entry entryID="pab"\>
<displayname\>_Personal Address Book</displayname\>
<description\>_This is your Personal Address Book</description\>
</entry\>
</books\>
```

企業ディレクトリ XML

例 7-2 企業アドレス帳定義を含む XML セクション

```
<book booktype="abook"
bookremoteurl="ldap://corpdirectory"\>
<bookoc\>piRemoteBook</bookoc\>
<entry entryID="idirectory"\>
<displayname\>_Corporate Directory</displayname\>
<description\>_This is Corporate Directory</description\>
</entry\>
</book\>
```

▼ 企業アドレス帳

企業およびリモートのアドレス帳の場合は、対応する xxx インスタンスが `personalstore.properties` ファイルに存在しなければなりません。`personalstore.properties` ファイル内の `db.xxx.urlmatch` の値には、`defaultps.xml` ファイル内の `bookremoteurl` 属性の値を割り当てなければなりません。

新規のリモートアドレス帳を追加するには、次に示す項目を追加する必要があります。

- 手順
1. 新規のアドレス帳ノードを `defaultps.xml` ファイルに追加します。
 2. 新規の xxx インスタンスを `personalstore.properties` ファイルに追加します。
 3. `db_config.properties` および `xlate` ファイルを格納するディレクトリを `WEB-INF/config` の下に作成します。

注 - `xlate` ファイルには、LDAP スキーマと、連絡先またはグループのアドレス帳 XML スキーマとの間のフィールドマッピングが含まれています。

グローバル GUI のカスタマイズ

テーマファイルには、Communications Express に表示されるアイコンの論理名とデフォルトの場所が含まれています。このファイルで指定するパスを変更すると、イメージの場所を変更できます。デフォルトの `theme.properties` ファイルは、`uwcd-deployed-path/WEB-INF/skin` にあります。

uwcdomainconfig.properties ファイル内の言語の設定

`uwcdomainconfig.properties` ファイルには、そのドメインでサポートされる言語のリストが含まれています。リスト内の各言語は、セミコロンで区切られています。Communications Express がドメインでサポートする言語のリストは、管理者が定義できます。

たとえば、`en` (英語)、`de` (ドイツ語)、`fr` (フランス語)、および `ja` (日本語) をドメイン `siroe.com` でサポートする場合は、そのドメインの `uwcdomainconfig.properties` ファイルの `supportedLanguages` を `supportedLanguages=en;fr;de;ja` のように設定します。

`siroe.com` の `uwcdomainconfig.properties` ファイルは、次の場所にあります。

第 8 章

PAB データのアドレス帳サーバーへの移行

従来、個人用アドレス帳 (PAB) は Sun Java System Messaging Server でユーザーの連絡先を格納するために使用されており、PAB は、Messaging Server 上に配備された Web ベースのクライアントからしかアクセスできませんでした。Communications Express 用の Messaging Server は、ユーザーの連絡先詳細を格納するために、PAB ではなくアドレス帳サーバーを使用します。そのため、既存の Messaging Server インストールを使用して Communications Express にアクセスするユーザーは、PAB データをアドレス帳サーバーに移行する必要があります。

この章には、次の節があります。

- 105 ページの「概要」
- 108 ページの「移行シナリオ」
- 108 ページの「設定後の手順」
- 112 ページの「水平方向のスケラビリティのサポートに必要な追加の設定」
- 108 ページの「移行シナリオ」

概要

移行ツールは、ユーザーの Messenger Express アドレス帳データを、Communications Express の一部であるアドレス帳サーバーに移行します。

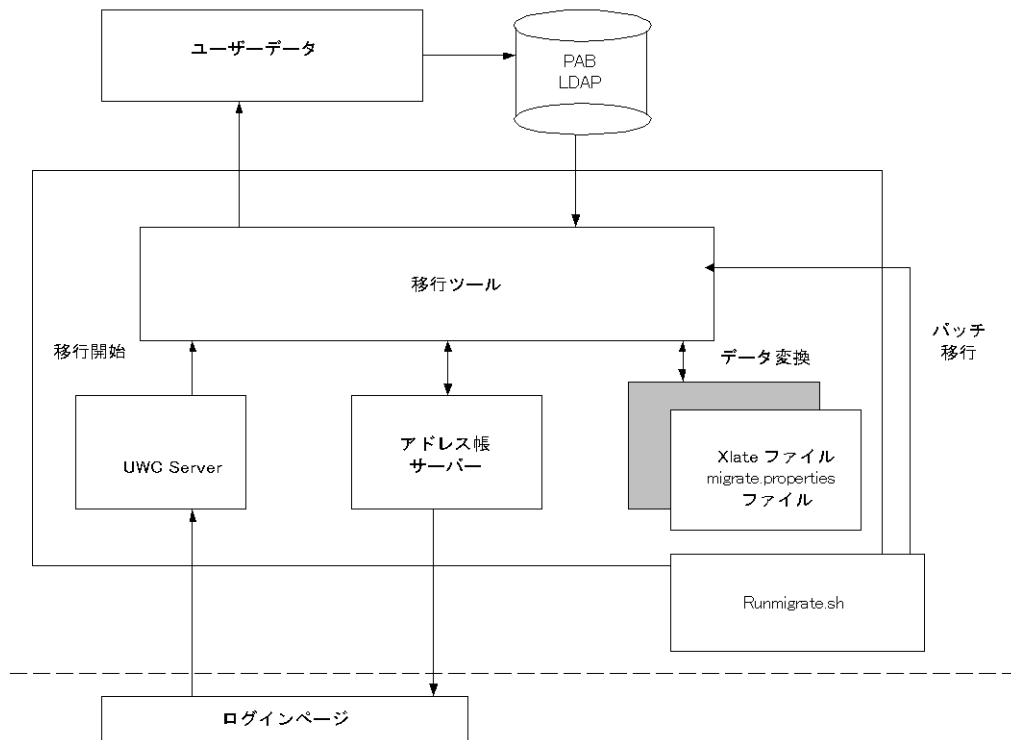


図 8-1 データ移行プロセスの概要

Messenger Express の LDAP PAB ツリーに格納されているデータは、アドレス帳サーバーの LDAP PAB ツリーに移行されます。次の例は、この移行プロセスを示しています。

ドメイン siroe.com の User1 に、移行を必要とする Entry1 のような PAB 内のエントリがある場合、図 7-2 に緑で示すように、そのエントリは PAB ツリーの ou=User1 の下にあります。

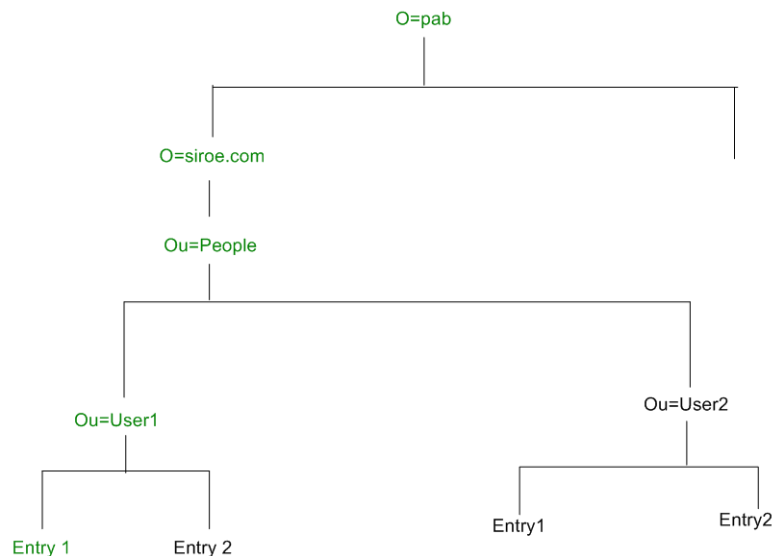


図 8-2 PAB ツリーでの Entry1 の場所

移行の後は、図 7-3 に赤で示すように、新規に作成されたアドレス帳サーバーエントリが、アドレス帳サーバーツリーの o=siroe.com の下の piEntryID=Entry1 に追加されます。

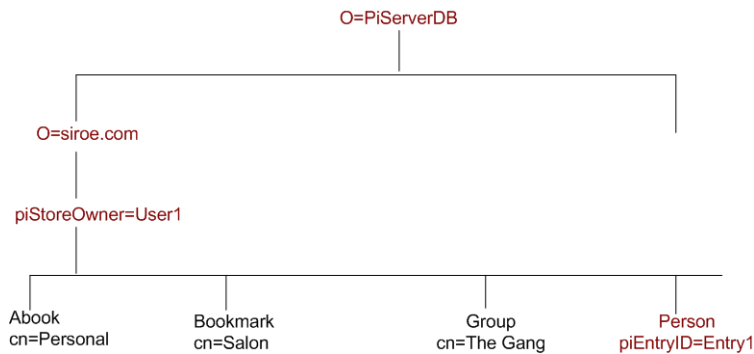


図 8-3 アドレス帳サーバーツリー内の Entry1 の場所

注 - 移行ユーティリティーは、ユーザーが最初にログインしたときに、Messenger Express の PAB にあるすべてのデータを Communications Express のアドレス帳に移行します。ただし、データがアドレス帳に移行されると、Messenger Express を使用して新たに作成した連絡先またはグループは、Communications Express のアドレス帳に表示されません。逆も同じです。

移行シナリオ

データの移行は、次の2つの方法で行われます。

- 108 ページの「動的移行」
- 108 ページの「バッチ移行」

動的移行

既存の Messenger Express ユーザーが Communications Express にログインすると、動的移行が実行されます。移行が完了すると、ユーザーは電子メールを受信します。

動的移行プロセスでは、次の処理が行われます。

- アプリケーションは、移行が `uwcuath.properties` で有効になっているかどうかを確認してから、移行プロセスを実行します。
- 次にログインロジックが `nswmextendedprefs` 属性と `mepabmigration` の値を比較し、ユーザーのデータが以前に移行されているかどうかを判断します。
- PAB 移行が完了すると、アドレス帳サーバーは移行プロセスが完了したことを示すため、ログインしているユーザーエントリの `nswmextendedprefs` および `mepabmigration` を「1」に設定します。
- ユーザーは PAB データがアドレス帳サーバーに移行すると、メールを受信します。
メールを受信するには、108 ページの「設定後の手順」で説明されているパラメータを定義する必要があります。

バッチ移行

バッチ移行プロセスでは、エンドユーザーが介入することなく、移行はサーバーレベルで行われます。管理者は `runMigrate.sh` バッチスクリプトを実行して、指定したドメインにあるメールユーザーの PAB データを移行します。複数ドメインに存在するメールユーザーに対して、管理者は各ドメインで `runMigrate.sh` スクリプトを呼び出し、ユーザーの PAB データを指定された `inetDomainBaseDN` からアドレス帳サーバーに移行する必要があります。

設定後の手順

移行を有効にするには、Communications Express を設定する必要があります。

注 - 移行に必要な設定パラメータは、管理者が手動で指定する必要があります。

表 7-1 は、移行ユーティリティーが使用する設定ファイルを一覧表示しています。

表 8-1 設定ファイルと各ファイルの目的

ファイル名	説明
migrate.properties	データを PAB からアドレス帳サーバーに移行するために必要なパラメータが含まれています。これらのパラメータについては、108 ページの「設定後の手順」を参照してください。
uwcauth.properties	移行が必要かどうかを判定するために、移行ユーティリティーによって参照されます。 移行ツールは、pab_mig_required の値を確認します。この値が true の場合は、動的移行が実行されます。
uwconfig.properties	管理者はログレベルを指定して、障害追跡のためにロギングを有効にすることができます。デフォルトでは、このパラメータは無効になっています。
runMigrate.sh (バッチ移行でのみ有効)	このスクリプトは必要な変数を設定し、次の 3 つの引数で java プログラム MigratePab を呼び出します。 # migrate.properties ファイルの絶対パス。デフォルトパスは、次のように設定されています。 ../WEB-INF/config/migrate.properties # uwcauth.properties およびその他の設定ファイルがある設定ディレクトリの絶対パス。デフォルトパスは、次のように設定されています。 ../WEBINF/config # ユーザーの inetDomainBaseDN。 このファイルは、必要なパスと引数を示すように適切に編集する必要があります。
xlate-pabperson.xml (108 ページの「設定後の手順」)	移行ユーティリティーは、Communications Express のアドレス帳 API を内部的に使用して、Messenger Express の PAB からデータを読み込みます。
xlate-pabgroup.xml (108 ページの「設定後の手順」)	xlate ファイルは、PAB の LDAP 属性を、アドレス帳サーバーのアドレス帳属性にマップするために必要です。

ユーザーのメールホストに応じて、表 7-2 に一覧表示されている PAB 設定エントリが取得され、PAB サーバーへの接続が確立されます。

表 8-2 PAB 移行用に設定可能な migrate.properties 内のパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
hostname.pabdappoolmin	4	PAB LDAP 用に作成される LDAP ユーザー接続の最小数を指定します。

表 8-2 PAB 移行用に設定可能な migrate.properties 内のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
hostname.pabldappoolmax	20	PAB LDAP用 に作成される LDAP ユーザー接続の最大数を指定します。
hostname.pabldappooltimeout	50	LDAP 接続がタイムアウトするまでの秒数を指定します。
hostname.alwaysusedefaulthost1	1	PAB URI で指定したユーザーの PAB ホストを使用するか、または保持するリストから最初の完全修飾 PAB ホスト名を使用するかを指定します。 1 に設定すると、PAB エントリの取得に最初の完全修飾 PAB ホストが使用されます。
delete_pabentry	0	移行の正常終了後に PAB エントリおよび PAB URI を削除できるようにします。
maxthreads	10	移行のスレッド数を指定します。
mailhost.pabhosts	メールホスト名は、PAB エントリが存在する PAB ホストのリストに割り当てられます。	PAB ホストのリストを指定します。
mailhost.pabports		PAB ホストのポート番号を指定します。
mailhost.pabbinddns		PAB のバインド DN を指定します。
mailhost.pabpasswds		PAB にバインドしているユーザーのパスワードを指定します。
<pabhost.pabport\>.abhostport=<abldaphost\>:<abldapport\>		migrate.properties ファイル内のロックアップテーブルで使用可能な pabhost および pabport エントリを指定します。 このパラメータでは、<pabhost.pabport\> がソースディレクトリインスタンスを示し、<abldaphost\> と <abldapport\> が PAB データを移行する必要があるターゲットディレクトリインスタンスを示します。

表 8-3 連絡先のフィールドマッピング

PAB	アドレス帳
cn	DisplayName
sn	sn
givenName	givenName
telephonenumber	piPhone1Type:work piPhone1:
homephone	piPhone2Type:home piPhone2;
pager	piPhone4Type:pager piPhone4:
mobile	piPhone3Type:mobile piPhone3:
facsimiletelephonenumber	piPhone5Type:fax piPhone5:
mail	piEmail2Type:home piEmail1:
mailalternateaddress	piEmail2Type:work piEmail2:
postoffice+street	homePostalAddress
l	homecity
st	homeState
postalcode	homePostalCode
co	homeCountry
labeleduri	piWebsite1
description	description
memberofpab	memberOfPIBook
memberofpabgroup	memberOfOIGroup

表 8-4 グループのフィールドマッピング

PAB	アドレス帳
cn	displayName
description	description

メールを受信するには、表 7-5 で説明されているパラメータを定義する必要があります。

表 8-5 PAB 移行電子メールパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
emailReqd	True	PAB データが正常に移行された後、メールを送信できるようにします。 設定可能な値は、「True」および「False」です。
smtphost	ローカルメールホスト 例: budgie.siroe.com	SMTP リレーホスト名を指定します。
smtpport	25	SMTP リレーポートを指定します。
mailsubject	PAB 移行状態	メールの件名を指定します。
from	admin@hostname	送信者の名前を指定します。

ヒント – 最初のログイン中に PAB データの移行が開始されること、そのため初期セッション中にアドレス帳データを参照できなくなることを通知する電子メールを、管理者がすべてのユーザーに送信することをお勧めします。その後 2、3 日してもユーザーがデータを見ることができなくなった場合は、管理者に連絡する必要があります。

水平方向のスケラビリティのサポートに必要な追加の設定

ユーザーの LDAP エントリにある属性 psRoot は、ユーザーの個人用アドレス帳エントリの格納や取得を行う際の元の LDAP の場所を定義する、アドレス帳サーバーに準拠した URL です。psRoot 属性を使用すると、管理者は、すべてのユーザーの PAB データが複数のディレクトリの場所に分散するようにユーザーをプロビジョニングできるようになります。

既存の WebMail ユーザーの場合、PAB 移行が有効になっていると、psRoot 属性は既存の pabURI 属性を使用して作成され、マッピング表が `uwc-deploy-dir/WEB-INF/config/migrate.properties` 内に定義されます。

`migrate.properties` ファイル内のルックアップテーブルは、次の形式をした `pabhost` および `pabport` エントリで構成されます。

```
pabhost.pabport.abhostport = abldaphost:abldapport
```

ここで、`pabhost.pabport` はソースディレクトリインスタンスを示し、`abldaphost` と `abldapport` は、PAB データを移行する必要があるターゲットディレクトリインスタンスを示します。

したがって、PAB データを `pab.example.com:389` で動作しているディレクトリから `abs.example.com:389` で動作しているアドレス帳ディレクトリに移行する場合、`migrate.properties` ファイル内のエントリは次のように表示されます。

```
pab.example.com.389.abhostport = abs.example.com:389
```

`migrate.properties` ファイルには、必要なルックアップをいくつでも追加できます。ユーザーの pabURI 属性が `pabhost` と `pabport` を使用している場合、デフォルトの psRoot パターンを使用して作成された psRoot は次の形式になります。

```
ldap://abldaphost:abldapport/piPStoreOwner=%U,o=%D,o=PiServerDb
```

pabURI 値に対してルックアップが定義されていない場合、つまり、その pabURI に一致するマッピング表にエントリが指定されていない場合は、`pabhost` 値と `pabport` 値が `abldaphost` と `abport` に対するデフォルト値として使用されます。マッピング表が存在しない場合は、アドレス帳スキーマに従って、Messaging Server の PAB エントリが同じディレクトリインスタンス内の別のルートに移行されます。このシナリオでは、[ターゲット]ディレクトリインスタンスが[ソース]ディレクトリインスタンスと同じになります。

注 - ルックアップテーブルは、パッチインストーラでは定義されません。パッチをインストールした後、ルックアップテーブルを定義し、Web Server を再起動する必要があります。

`abldaphost:abldapport` Directory Server インスタンスが、そのドメインの `personalstore.properties` で示される `db_config.properties` ファイル内で定義されていることを確認してください。

移行配備のシナリオ

移行は、次の環境から実行できます。

1. デフォルトの単一 PAB ホストを指している単一 Messenger Express インスタンス
2. 複数の PAB ホストを指している単一 Messenger Express インスタンス

3. デフォルトの PAB ホストセットを含む複数の PAB ホストを指している単一 Messenger Express インスタンス
4. 単一の PAB ホストを指している複数の Messenger Express インスタンス
5. 複数の PAB ホストを指している複数の Messenger Express インスタンス

第 9 章

チューニングとパフォーマンスについて

この章では、Sun Java™ System Communications Express のパフォーマンスを向上させるために検討する必要がある情報について説明します。

パフォーマンスを向上させるには、次に示すチューニングオプションを検討します。

- 115 ページの「[Directory Server のチューニング](#)」
- 117 ページの「[Calendar Server のチューニング](#)」
- 117 ページの「[Web Server のチューニング](#)」
- 119 ページの「[Communications Express のチューニング](#)」

Directory Server のチューニング

この節では、パフォーマンスを向上するために Directory Server で実行可能なチューニングについて説明します。

- 115 ページの「[LDAP Directory Server のインデックス作成](#)」
- 116 ページの「[nsSizeLimit および nsLookthroughLimit パラメータの設定](#)」

LDAP Directory Server のインデックス作成

Calendar Server が LDAP Directory Server にアクセスするときの Communications Express のパフォーマンスを向上させるには、次に示す LDAP 属性のインデックスを作成します。

- *icsCalendar*: カレンダーユーザーまたはリソースのデフォルトカレンダーを検索するために使用します。インデックスのタイプとして実在 (pres)、等価 (eq)、または部分文字列 (sub) を指定します。
- *icsCalendarOwned*: LDAP CLD プラグインが有効なときに登録操作を検索するために使用します。インデックスのタイプとして実在 (pres)、等価 (eq)、または部分文字列 (sub) を指定します。

- *mail* および **mailAlternateAddress**: この2つの属性は、ユーザーの基本および代替メールアドレスを指定します。

注 - `comm_dssetup.pl` スクリプトによって、`icsCalendar`、`icsCalendarOwned`、`mail`、および `mailAlternateAddress` の各属性にインデックスが追加されます。

nsSizeLimit および nsLookthroughLimit パラメータの設定

ユーザー/グループ LDAP Directory Server 設定の `nsSizeLimit` および `nsLookthroughLimit` パラメータは、検索を正常に完了させるだけの十分なサイズにすることが重要です。

これらのパラメータに適切な値が設定されていることを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
ldapsearch -b /base/  
((&(icscalendarowned=*/user/*) (objectclass=icsCalendarUser))
```

各表記の意味は次のとおりです。

`/base/` は、Calendar Server のユーザーおよびリソースのデータがある Directory Server の LDAP ベース DN です。

`/user/` は、エンドユーザーが Communications Express の「登録」オプションで、「カレンダーの検索」ダイアログに入力できる値です。

`nsSizeLimit` または `nsLookthroughLimit` パラメータが十分なサイズでない場合、LDAP サーバーはエラーを返します。

次に示すガイドラインに従って、`nsSizeLimit` または `nsLookthroughLimit` パラメータを再設定します。

- `nsSizeLimit` パラメータの値は、検索されたすべての結果が返されるのに十分なサイズである必要があります。不足する場合、一部の結果が欠落したり、検索結果全体が表示されなくなります。
- `nsLookthroughLimit` パラメータのサイズが、LDAP ディレクトリ内のすべてのユーザーおよびリソースの検索を完了するだけの十分なサイズであることを確認します。可能であれば、`nsLookthroughLimit` は `-1` に設定してください。この設定にすると、`nsLookthroughLimit` には検索の制限が設定されません。

Calendar Server のチューニング

この節では、Calendar Server 上の複数 CPU にわたるロードバランスによってパフォーマンスを向上させる方法を説明します。

複数 CPU にわたるロードバランスの使用

サーバーに複数の CPU が搭載されている場合、デフォルトで Calendar Server は `cshttpd` プロセスなどの HTTP サービスと、`csdwpd` プロセスなどの分散データベースサービスを複数の CPU に分散させます。

`ics.conf` 内の `service.http.numprocesses` および `service.dwp.numprocesses` パラメータは、各サービスで実行するプロセスの実際の数を決定します。デフォルトで、これらのパラメータはインストール時にサーバーの CPU 数に設定されますが、管理者が再設定することも可能です。たとえば、サーバーに 8 CPU あり、`cshttpd` および `csdwpd` プロセスを 4 CPU だけで実行させる場合は、次のようにパラメータを設定します。

```
service.http.numprocesses="4"
```

```
service.dwp.numprocesses="4"
```

▼ ロードバランスを無効にする

- 手順
1. `service.loadbalancing` パラメータを `ics.conf` ファイルに追加します。
 2. `service.loadbalancing` を「no」に設定します。
 3. **Calendar Server** を再起動して、変更内容を有効にします。

ロードバランスについては、『Sun ONE Calendar Server 6.0 管理者ガイド』の付録 C 「Calendar Server のパフォーマンスの調整」を参照してください。

Web Server のチューニング

この節では、パフォーマンスを向上するために Web Server で実行可能なチューニングについて説明します。

- 118 ページの「`acceptorthreads` の値の設定」

- 118 ページの「JVM オプションの設定」

acceptorthreads の値の設定

server.xml で、<vs\> (仮想サーバー) 要素の属性 acceptorthreads の値を、Web Server をホストするマシンの CPU 数に変更します。

例

```
<VS id="https-siroe.com" connections="1s1" mime="mime1" aclids="acl1" urlhosts="<webserver host na
```

JVM オプションの設定

Web Server の server.xml ファイルで、次に示す JVM オプションを追加または設定します。

次の 2 つのパラメータで、JVM のヒープサイズが決まります。

- *JVMOPTIONS-Xms(approx value according to the memory available)/JVMOPTIONS*
- *JVMOPTIONS-Xmx(approx value according to the memory available)/JVMOPTIONS*

最初のオプションは最大のヒープサイズを示し、2 番目のオプションは最小のヒープサイズを示します。

両方のオプションに同じ値を設定することをお勧めします。

次の JVM オプションを追加します。

```
JVMOPTIONS -server /JVMOPTIONS
```

ガベージコレクション用の次のパラメータを設定します。

- *JVMOPTIONS-XX:+UseParNewGC/ JVMOPTIONS*
- *JVMOPTIONS-XX:ParallelGCThreads= number-of-CPU/ JVMOPTIONS*
- *JVMOPTIONS-XX:+UseConcMarkSweepGC/ JVMOPTIONS*

Communications Express のチューニング

▼ サーバー応答の圧縮を有効にする

- 手順
1. `uwccconfig.properties` ファイルで、`uwc.gzip compression` パラメータの値を「`true`」に設定して、サーバー応答を圧縮できるようにします。
たとえば、`uwc.gzipcompression = true` のようにします。
 2. 次に、**Web Server** を再起動します。



注意 - 変更を加える前に構成ファイルのバックアップを作成します。

▼ Communications Express のセッションタイムアウトをカスタマイズする

- 手順
1. `deployed-dir/WEB-INF` ディレクトリにある `web.xml` ファイルを編集します。
この xml ファイルには、属性 `session-timeout` を含む xml タグ `session-config` が含まれています。

この属性によって、セッションタイムアウトが秒単位で定義されます。
 2. `session-timeout` 属性の値を希望の値に変更します。
たとえば、次の指定によって `session-timeout` が 10 分に定義されます。

```
<session-config>  
  <session-timeout>600</session-timeout>  
</session-config>
```


Access Manager の事後配備の有効化 または無効化

Communications Express を設定するとき、「シングルサインオンに Identity Server を有効にする」パネルで Identity Server のサポートを選択することができます。

- 「シングルサインオンに Identity Server を有効にする」パネルで Communications Express 用の Identity Server のサポートを選択していない場合、Identity Server のサポートをあとで有効にするには次の手順を実行する必要があります。

1. Access Manager Remote SDK をインストールして設定します。
2. Communications Express の Web コンテナクラスパスを、Access Manager Remote SDK の jar ファイルの場所に変更します。

たとえば、Web コンテナ用の `server.xml` ファイルにある `classpathsuffix` に、次に示す行を追加します。

```
/opt/SUNWam/lib/am_sdk.jar  
/opt/SUNWam/lib/am_services.jar  
/opt/SUNWam/lib/am_logging.jar
```

この例では、Access Manager Remote SDK が `/opt/SUNWam` にインストールされていると仮定しています。

3. Access Manager SSO を有効にするためのパラメータについては、第 5 章にある 63 ページの「Access Manager シングルサインオンの設定」を参照してください。
4. `uwc-deploydir/SUNWuwc/WEB-INF/web.xml` から、既存の `web.xml` のバックアップを取ります。
`web_IS.xml` ファイルを、
`uwc-basedir/SUNWuwc/lib/config-templates/WEB-INF` から
`uwc-deploydir/SUNWuwc/WEB-INF/` にコピーします。



注意 - バックアップした `web.xml` ファイルに含まれていた追加の設定データをすべて、`web_IS.xml` に忘れずに結合してください。

5. `web_IS.xml` の名前を `web.xml` に変更します。
- 「シングルサインオンに Identity Server を有効にする」パネルで Communications Express 用の Identity Server のサポートを選択した場合、Identity Server のサポートを無効にするには、次の手順を実行する必要があります。
 1. `uwcauth.properties` ファイルで `uwcauth.identity.enabled` を「false」に設定して、Identity SSO を無効にします。
 2. `uwc-deploydir/SUNWuwc/WEB-INF/web.xml` から、既存の `web.xml` のバックアップを取ります。
 3. `web.xml` ファイルを、
`uwc-basedir/SUNWuwc/lib/config-templates/WEB-INF` から
`uwc-deploydir/SUNWuwc/WEB-INF/` にコピーします。



注意 – バックアップした `web.xml` ファイルに含まれていた追加の設定データをすべて、`web.xml` に忘れずに結合してください。

付録 B

設定パネルシーケンス

Communications Express 用の Web コンテナを、次のいずれかのオプションを使用して設定できます。

- Web Server および Sun Java™ System LDAP Schema, v.1
または
Web Server および Sun Java™ System LDAP Schema, v.2 (Access Manager を含む)
- Application Server および Sun Java™ System LDAP Schema, v.1
または
Application Server および Sun Java™ System LDAP Schema, v.2 (Access Manager を含む)

スキーマと Web コンテナの各組み合わせに対する設定パネルの表示シーケンスは、スキーマと Web コンテナの選択に応じて異なります。表 B-1 は、スキーマと Web コンテナの各種の組み合わせに対して表示されるパネルを一覧表示しています。

表 B-1 スキーマと Web コンテナの選択に応じたパネルシーケンス

Web Server+Schema 1	Web Server+Schema 2	Application Server + Schema 1	Application Server + Schema 2
「ようこそ」	「ようこそ」	「ようこそ」	「ようこそ」
「設定ファイルとデータファイルを保存するディレクトリを選択」	「設定ファイルとデータファイルを保存するディレクトリを選択」	「設定ファイルとデータファイルを保存するディレクトリを選択」	「設定ファイルとデータファイルを保存するディレクトリを選択」
「設定するコンポーネントを選択」	「設定するコンポーネントを選択」	「設定するコンポーネントを選択」	「設定するコンポーネントを選択」
「ネットワーク接続」	「ネットワーク接続」	「ネットワーク接続」	「ネットワーク接続」
「Web コンテナを選択してください」	「Web コンテナを選択してください」	「Web コンテナを選択してください」	「Web コンテナを選択してください」

表 B-1 スキーマと Web コンテナの選択に応じたパネルシーケンス (続き)

「Web Server の設定の詳細」	「Web Server の設定の詳細」	「Application Server の設定の詳細」	「Application Server の設定の詳細」
「Web コンテナのユーザーとグループ」	「Web コンテナのユーザーとグループ」	「Application Server: 管理インスタンスの詳細」	「Application Server: 管理インスタンスの詳細」
「URI パス設定」	「URI パス設定」	「この Web アプリケーションのモジュール名」	「この Web アプリケーションのモジュール名」
「ホストドメインのサポートが必要ですか?」	「ホストドメインのサポートが必要ですか?」	「Web コンテナのユーザーとグループ」	「Web コンテナのユーザーとグループ」
「ユーザー/グループのディレクトリ (LDAP) サーバーの詳細」	「ユーザー/グループのディレクトリ (LDAP) サーバーの詳細」	「URI パス設定」	「URI パス設定」
「DC ツリーサフィックス」	「デフォルトドメイン名」	「ホストドメインのサポートが必要ですか?」	「ホストドメインのサポートが必要ですか?」
「デフォルトドメイン名」	「シングルサインオンに Identity Server を有効にする」	「ユーザー/グループのディレクトリ (LDAP) サーバーの詳細」	「ユーザー/グループのディレクトリ (LDAP) サーバーの詳細」
「シングルサインオンに Identity Server を有効にする」	「Messaging Express ポート」	「DC ツリーサフィックス」	「デフォルトドメイン名」
「Messaging Express ポート」	「Calendar Server のホストおよびポートの設定」	「デフォルトドメイン名」	「シングルサインオンに Identity Server を有効にする」
「Calendar Server のホストおよびポートの設定」	「Calendar Server の管理者の詳細」	「シングルサインオンに Identity Server を有効にする」	「Messaging Express ポート」
「Calendar Server の管理者の詳細」	「PAB ディレクトリサーバーの詳細」	「Messaging Express ポート」	「Calendar Server のホストおよびポートの設定」
「PAB ディレクトリサーバーの詳細」	「設定の準備が完了しました」	「Calendar Server のホストおよびポートの設定」	「Calendar Server の管理者の詳細」
「設定の準備が完了しました」		「Calendar Server の管理者の詳細」	「PAB ディレクトリサーバーの詳細」
		「PAB ディレクトリサーバーの詳細」	「設定の準備が完了しました」

表 B-1 スキーマと Web コンテナの選択に応じたパネルシーケンス (続き)

		「設定の準備が完了しました」	
--	--	----------------	--

Messaging Server なしで、シングルツリー構造を使用した Communications Express のインストール

次の状態のマシンに Communications Express をインストールする場合は、ユーザー/グループのエントリを取得するために、既存のディレクトリ情報ツリーをデュアルツリーのネームスペースにマップしなければなりません。

- Messaging Server がインストールまたは設定されていない
- ユーザー/グループのエントリの取得に、シングルツリーのネームスペース構造が使用されている

次の各セクションでは、Communications Express で 2 DIT ツリーメカニズムを使用する方法と、既存のシングルツリーのネームスペース構造をデュアルツリーのネームスペースにマップする方法を説明します。

2 ツリーネームスペースのメカニズム

ディレクトリのネームスペースは、組織ツリーとドメインコンポーネントツリー (DC ツリー) という 2 つのディレクトリ情報ツリー (DIT) で構成されます。組織ツリーには、ユーザーおよびグループのエントリが含まれています。DC ツリーは、ローカル DNS 構造をミラーし、システムがデータエントリを含む組織ツリーのインデックスとして使用します。また DC ツリーには、サービス固有の属性など、ドメインを運用するためのパラメータが含まれています。

2 ツリーネームスペースメカニズムの動作

このセクションでは、Communications Express が 2 DIT メカニズムを使用する方法を説明します。

Communications Express がユーザーまたはグループエントリを検索するときは、まずユーザーまたはグループのドメインノードを DC ツリーで検索し、inetDomainBaseDN 属性の値を抽出します。この属性には、実際のユーザーまたはグループエントリを含んでいる組織サブツリーへの DN 参照が保持されています。

そのドメインのユーザーを見つけることができる組織ツリー内のノードを DC ツリー内のドメインコンポーネントノードが指していれば、このモデルを使用して、Communications Express では任意のタイプのディレクトリツリーに格納されているエントリをサポートします。

2 つのディレクトリ情報ツリーを使用する理由

このデュアルツリーメカニズムにより、次のように機能が向上します。

- 組織固有のアクセス制御用データのパーティション分割。つまり、各組織では、ユーザーおよびグループエントリが存在する DIT に個別にサブツリーを作成できます。そのようなデータにアクセスできるのは、サブツリーの該当する部分にあるユーザーだけです。
- サブドメインに別のネームスペースを設定可能。たとえば、west.siroe.com および siroe.com は、別々の組織サブツリーにマップできるため、同じ UID を持つユーザーエントリをそれぞれの組織サブツリーに作成できます。

▼ 既存の DIT をデュアルツリーのネームスペースにマップする方法

組織ツリーのルートサフィックスが o=isp であるとしてします。

また、現在の組織 DN が o=siroe.com,o=isp で、ユーザーコンテナが ou=People,o=siroe.com,o=isp であるとしてします。

- 手順
1. ルートサフィックス **o=internet** を DC ツリーに作成します。
ルートサフィックスは、Directory Server コンソールで作成できます。
 2. この DC ツリールートサフィックスの下に、次の DN を持つドメインエントリを作成します。
`dc=siroe,dc=com,o=internet`
次に示す LDIF を使用して、ldapmodify コマンドでドメインエントリを作成します。

注 - LDIF ファイルに記述されている組織ルート、組織名、組織 DN、オブジェクトクラス、および属性値を、配備の詳細を反映するように変更してください。

```
root suffix
Organization root suffix: o=isp
Organization name: siroe
DNS domain name: siroe.com
Organization DN: o=siroe.com,o=isp
```

次のオブジェクトクラスおよび属性は、メールサービスで使用されます。

```
ObjectClasses:
mailDomain, nsManagedDomain
Attributes:
mailDomainStatus, preferredMailHost, mailDomainDiskQuota, mailDomainMsgQuota
mailDomainReportAddress, nsMaxDomains, nsNumUsers, nsNumDomains, nsNumMailLists
```

注 - メールサービスのオブジェクトクラスおよび属性を使用しない場合は、LDIF からこれらの値を削除してください。

LDIF の `inetDomainBaseDN` 属性の値に組織 DN が割り当てられているようにしてください。

LDIF ファイルの例

3. LDIF ファイルのエントリを DC ツリーに追加するには、`ldapmodify` コマンドを使用してください。

例 C-1 LDIF ファイル 1

```
dn: dc=com,o=internet
dc: com
objectclass: top
objectclass: domain
```

例 C-2 LDIF ファイル 2

```
dn: dc=com,o=internet
dc: com
objectclass: top
objectclass: domain
dn: dc=siroe,dc=com,o=internet
objectClass: top
objectClass: domain
objectClass: inetDomain
objectClass: mailDomain
objectClass: nsManagedDomain
```

```
dc: siroe
aci: (targetattr="icsTimeZone||icsMandatorySubscribed||icsMandatoryView||icsDefaultAccess||icsRecu
description: DC node for siroe.com hosted domain
inetDomainBaseDN: o=siroe.com,o=isp
inetDomainStatus: active
mailDomainStatus: active
preferredMailHost: mailhost.siroe.com
mailDomainDiskQuota: -1
mailDomainMsgQuota: -1
mailDomainReportAddress: postmaster@siroe.com
nsMaxDomains: 1
nsNumUsers: 1
nsNumDomains: 1
nsNumMailLists: 0
```

付録 D

設定パラメータのリファレンス

この付録には、設定パラメータ、そのデフォルト値、および説明が記載されています。

- 132 ページの「uwconfig.properties および uwcauth.properties ファイル内のアプリケーション全体のパラメータ」
- 133 ページの「db_config.properties file」
- 137 ページの「uwconfig.properties」
- 140 ページの「uwcauth.properties ファイル」
- 146 ページの「uwclogging.properties ファイル」
- 147 ページの「uwcdomainconfig.properties」
- 153 ページの「personalstore.properties ファイル」

uwccconfig.properties および uwcauth.properties ファイル内のアプリ ケーション全体のパラメータ

表 D-1 uwccconfig.properties 内のパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
uwc.zipcompression	true	Communications Express の HTTP 応答での GZIP 圧縮を有効にします。 HTTP 応答の GZIP 圧縮を有効にするには、この値を true に設定します。これにより、Communications Express ページアクセスのスループットが向上します。
uwc.renderhtml	n	カレンダーデータを HTML 形式で描画する必要があるかどうかを指定します。 カレンダーデータを HTML 形式で描画するには、この値を「y」に設定します。
manual_purge_enabled	true	jsessionid を持つユーザーがアドレス帳サーバーコマンド、 <code>purge_entries.wabp</code> を呼び出し、削除用にマークされたすべてのエントリを完全に削除できるようにします。
auto_purge_enabled	false	<code>login.wabp</code> が呼び出されたときに、削除用にマークされた連絡先を自動的にページします。 <code>login.wabp</code> が呼び出されたときの連絡先の自動ページを有効にするには、この値を true に設定します。
expire_period	0	削除用にマークされたエントリが完全に削除されるまでのページ期間を日数で指定します。 このパラメータは、 <code>auto_purge_enabled</code> が true に設定されている場合だけ有効です。

表 D-1 uwccconfig.properties 内のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
purge_interval	30	ページ間隔を日数で指定します。 ページサイクルは、 <code>auto_purge_enabled</code> が <code>true</code> に設定されている場合だけ、ここで指定した間隔で起動されます。
addressbook.wabp.version	1.0	アドレス帳のプロトコルバージョンを指定します。

表 D-2 uwcauth.properties 内のパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
defaultdomain		ドメインに必要なプロパティーが設定されていない場合に使用されるデフォルトドメインを指定します。これらのプロパティーは、デフォルトドメイン名から生成されます。 属性 <code>defaultdomain</code> には、設定中に入力された値が割り当てられます。
defaultlocale	en	アプリケーションで使用されるデフォルトのロケールを指定します。
virtualdomain.mode		Communications Express が仮想ドメインモードで実行されているかどうかを指定します。 Calendar Server で、ホストドメインのサポートを有効にした場合は、このオプションを有効にします。 <code>virtualdomain.mode</code> には、設定中に入力された値が割り当てられません。

db_config.properties file

表 D-3 は、db_config.properties ファイルのパラメータを一覧表示しています。

表 D-3 企業ディレクトリパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
defaultserver.ldappoolmin		LDAP クライアント接続の最小数を指定します。

表 D-3 企業ディレクトリパラメータ (続き)

defaultserver.ldappoolmax		LDAP クライアント接続の最大数を指定します。
defaultserver.ldappooltimeout		LDAP 接続がタイムアウトするまでの秒数を指定します。大規模な検索結果に対応するには、この値を大きくします。
defaultserver.ldaphost		LDAP ホストを指定します。
defaultserver.ldapport		LDAP ポートを指定します。
defaultserver.ldapbinddn	cn=Directory Manager	LDAP にバインドするために使用する DN を指定します。 ログインのタイプが「restricted」または「proxy」の場合は、defaultserver.ldapbinddn に必ず値を割り当てる必要があります。 ログインのタイプが「anonymous」(匿名)の場合は、このパラメータの値を入力する必要はありません。
defaultserver.ldapbindcred		バインドパスワードを指定します。

表 D-3 企業ディレクトリパラメータ (続き)

login_type		<p>LDAP ストアへの接続を保持するために使用する方法を指定します。</p> <p>このパラメータには、次の 3 つのいずれかの値を割り当てることができます。</p> <p>anon - 匿名ユーザーとして LDAP に接続します</p> <p>restricted - アドレス帳ストアに対する操作権限を持つユーザーとして接続します。</p> <p>proxy - アドレス帳ストアを操作できるユーザーであると見せかけます。この値を割り当てると、各操作で LDAP バインドがバイパスされるため、パフォーマンスが向上します。</p> <p>注: 見せかけるユーザーには、読み取り専用アクセス権が付与されます。</p>
entry_id		<p>連絡先/グループエントリを特定するために使用する LDAP 内のキーを指定します。</p> <p>entry_id には、UID か、または empid や主体 ID などの連絡先/グループ情報をフェッチするために使用するキーを設定できます。</p> <p>xlate-inetorgperson.xml ファイルで、<entry entryID= "db:uid"\> の「uid」をここで指定した entry_id 値に置き換えます。</p>
retrieve_db_attrbs		<p>LDAP 検索ですべてのデータベース属性を渡すかどうかを定義します。</p>
lookthru_limit	1000	<p>検索の検索クエリの上限を指定します。</p>

表 D-3 企業ディレクトリパラメータ (続き)

delete_perm		<p>連絡先/グループエントリを削除用にマークするか、または完全に削除できるようにします。</p> <p>連絡先/グループを削除用にマークするには、このパラメータを <code>false</code> に設定します。</p> <p>連絡先/グループを完全に削除するには、このパラメータを <code>true</code> に設定します。</p>
admin_group_dn		<p>管理者グループの DN を指定します。</p> <p>このグループに所属するユーザーは、削除用にマークされたすべての連絡先をページできます。</p>
entry_id	uid	<p>連絡先/グループエントリを特定するために使用する LDAP 内のキーを指定します。</p> <p><code>entry_id</code> には、UID か、または <code>empid</code> や主体 ID などの連絡先/グループ情報をフェッチするために使用するキーを設定できます。</p> <p><code>xlate-inetorgperson.xml</code> ファイルで、<code><entry entryID= "db:uid" \></code> の「<code>uid</code>」をここで指定した <code>entry_id</code> 値に置き換えます。</p>

表 D-3 企業ディレクトリパラメータ (続き)

login_type	restricted	<p>LDAP ストアへの接続を保持するために使用する方法を指定します。</p> <p>このパラメータには、次の 3 つのいずれかの値を割り当てることができます。</p> <p>anon - 匿名ユーザーとして LDAP に接続します</p> <p>restricted - アドレス帳ストアに対する操作権限を持つユーザーとして接続します。</p> <p>proxy - アドレス帳ストアを操作できるユーザーであると見せかけます。この値を指定すると、各操作で LDAP バインドをバイパスするため、パフォーマンスが向上します。</p> <p>注: 見せかけるユーザーには、読み取り専用アクセス権が付与されます。</p>
------------	------------	--

uwccnfig.properties

表 D-4 は、uwccnfig.properties ファイルのパラメータを一覧表示しています。

表 D-4 uwccnfig.properties のパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
mail.deployed		<p>Messenger Express が配備されているかどうかを指定します。このパラメータは、設定ウィザードの実行時に設定されます。</p> <p>Messenger Express が配備されると、この属性が「true」になります。</p>
webmail.host		<p>Messenger Express が配備されるマシンのホスト名を指定します。</p> <p>Messenger Express のホスト名は、Web Server が配備されるマシンの名前に対応させます。</p>
webmail.port	80	<p>Messenger Express HTTP Server が待機するポート番号を指定します。</p>

表 D-4 uwconfig.properties のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
calendar.deployed		<p>カレンダーモジュールが配備されているかどうかを指定します。このパラメータは、設定ウィザードの実行時に設定されます。</p> <p>カレンダーが配備されている場合は、この属性を「true」に設定します。</p>
calendar.wcap.host		WCAP サーバーのホスト名を指定します。
calendar.wcap.port		WCAP が待機するポート番号を指定します。
calendar.wcap.adminid	calmaster	WCAP サーバーの管理 ID を指定します。
calendar.wcap.passwd		WCAP サーバーの管理パスワードを指定します。
calendar.jcapi.serviceclass .socs	com.sun.comclient.calendar socs.SOCSCalendarStore	<p>Sun Java System Calendar Server 用に Java API for Calendar (JCAPI) を実装しているクラスの名前を指定します。</p> <p>注: この値は変更しないでください。</p>
uwc.gzipcompression		<p>Communications Express の HTTP 応答での GZIP 圧縮を有効にします。</p> <p>HTTP 応答の GZIP 圧縮を有効にするには、この値を true に設定します。これにより、Communications Express ページアクセスのスループットが向上します。</p>
uwc.renderhtml		<p>カレンダーデータを HTML で描画する必要があるかどうかを指定します。</p> <p>カレンダーデータを HTML で描画する場合は、このパラメータを「y\q」に設定します。</p> <p>有効な値は \qy\q または \qn\q です。</p>
log.file このパラメータは、アドレス帳モジュールで使用されます。	/tmp/trace.log	<p>ログファイルの場所を指定します。</p> <p>デフォルトでは、メッセージは Web コンテナのエラーログファイルに移動されます。</p>
log.level このパラメータは、アドレス帳モジュールで使用されます。	0	<p>アプリケーションのログレベルを指定します。このモジュールのロギングを無効にするには、この値を 0 に設定します。</p> <p>有効な値は次のとおりです。</p> <p>level = 0 (オフ)、1 (デバッグのみ)、2 (エラーのみ)、3 (すべて)。</p>

表 D-4 uwccconfig.properties のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
log.components このパラメータは、アドレス帳モジュールで使用されます。	127	ロギング用のコンポーネントレベルを指定します。
maxpostcontentlength	1000000	コンテンツの種類がマルチパートであり、オクテットのフォームデータ (ファイルアップロード用) を含む POST コマンドの最大のコンテンツ長を指定します。 -1 は、制限がないことを示します。
uwccloginpath	/base/UWCCMain	Communications Express ログインページへのパスを指定します。
sessionobjfactory.pstore.class	com.iplanet.iabs.core.CorePersonalStoreFactory	SessionObjectFactory を実装しているクラスを定義します。
sessionobjfactory.pstore.configpath		プラグインの設定パスを指定します。このパスは、現在のファイルのパスからの相対パスまたは絶対パスのどちらかです。
sessionobjfactory.pstore.sessionid	com.iplanet.iabs.pstore	ユーザーのセッションでオブジェクトを格納するときの名前を指定します。
addressbook.wabp.version		アドレス帳のプロトコルバージョンを指定します。
manual_purge_enabled		jsessionid を持つユーザーがアドレス帳サーバーコマンド、purge_entries.wabp を呼び出し、削除用にマークされたすべてのエントリを完全に削除できるようにします。
auto_purge_enabled		login.wabp が呼び出されたときに、削除用にマークされた連絡先を自動的にページします。 login.wabp が呼び出されたときの連絡先の自動ページを有効にするには、この値を true に設定します。
expire_period		削除用にマークされたエントリが完全に削除されるまでのページ期間を日数で指定します。 このパラメータは、auto_purge_enabled が true に設定されている場合だけ有効です。

表 D-4 uwconfig.properties のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
purge_interval		ページ間隔を日数で指定します。 ページサイクルは、auto_purge_enabled が true に設定されている場合だけ、ここで指定した間隔で起動されます。
uwc.homepageurl		ホームページの URL を指定します。 ユーザーがホームリンクをクリックすると、この URL に移動します。 このパラメータがないときに、ユーザーがホームリンクをクリックすると、ユーザーのデフォルトのアプリケーションに移動します。

uwcauth.properties ファイル

表 D-5 は、uwcauth.properties ファイルのパラメータを一覧表示しています。

表 D-5 uwcauth.properties のパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
defaultdomain		ドメインに必要なプロパティが設定されていない場合に使用されるデフォルトドメインを指定します。これらのプロパティは、デフォルトドメイン名から生成されます。 デフォルトドメインには、設定中に入力された値が割り当てられます。
defaultlocale		アプリケーションのデフォルトのロケールを定義します。
virtualdomain.mode		Calendar Server を実行するモードを定義します。Calendar Server をホストドメイン (仮想ドメインともいう) モードで実行する場合はこのパラメータ値を \qy\q に、そうでない場合は \qn\q に設定します。
uwcauth.ssl.enabled		SSL を有効にするかどうかを定義します。
uwcauth.ssl.authonly		SSL を認証専用で有効にするかどうかを定義します。

表 D-5 uwcauth.properties のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
ldapauth.ldaphost		LDAP ホスト値を指定します。 通常、ldapauth.ldaphost の値は ldapusersession の値と同じです。必要に応じて異なる値を設定できます。
ldapauth.ldapport		LDAP ポート番号を指定します。
ldapauth.dcroot		認証ツリーの DC ルートを指定します。
ldapauth.domainattr	inetDomainBaseDN inetDomainStatus inetDomainSearchFilter domainUidSeparator preferredLanguage	ユーザーが認証されるドメインエントリから取得する属性のリストを指定します。
ldapauth.domainfilter	(!(objectclass=inetDomain) (objectclass=inetDomainAlias))	ドメインエントリを取得する基となるフィルタを指定します。
ldapauth.ldapbinddn	<binddn\>	認証 LDAP にバインドしているユーザーのユーザー DN を指定します。
ldapauth.ldapbindcred	<binddncredentials\>	認証 LDAP にバインドしているユーザーのパスワードを指定します。
ldapauth.enablessl	false	認証を実行するディレクトリが SSL モードにあるかどうかを指定します。 セキュリティ保護された LDAP 接続を設定するには、デフォルト値を「true」に変更します。
ldapusersession.defaultugfilter		ユーザーエントリを取得するときに使用するデフォルトフィルタの構文を指定します。
ユーザー検索用のパラメータ		

表 D-5 uwcauth.properties のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
ldapusersession.ugattr	uid,inetUserStatus, preferredLanguage, psRoot, pabURI, cn,mail, mailHost	エントリ検索中に LDAP から返される属性セットを指定します。
ldapusersession.ldaphost		ユーザー検索に使用する Directory Server のホスト名を指定します。代替用に、複数のホストを指定できません。 サーバーの名前は、セミコロン (;) で区切られます。 代替サーバーの名前は次の形式にします。「ホスト名: ポート番号」
ldapusersession.ldapport		ユーザー/グループの Directory Server のポート番号を指定します。
ldapusersession.ldapbinddn		ユーザーグループの Directory Server にバインドしている管理者のユーザー DN を指定します。
ldapusersession.ldapbindcred		ユーザーツリーにバインドしている管理者のパスワードを指定します。
ldapusersession.dcroot		Sun Java System LDAP Schema v.1 内のユーザーエントリを解決するために使用するユーザー/グループ LDAP 内のドメインコンポーネント (DC) ツリーを指定します。
ldapusersession.domainfilter	(!(objectclass=inetDomain) (objectclass=inetDomainAlias))	ドメインエントリを特定するために使用するフィルタを定義します。
ldapusersession.ldapoolmin		保持する LDAP クライアント接続の最小数を指定します。
ldapusersession.ldapoolmax		保持する LDAP クライアント接続の最大数を指定します。
ldapusersession.ldapooltimeout		LDAP 接続がタイムアウトするまでの秒数を指定します。 大規模な検索結果に対応するには、この値を大きくします。

表 D-5 uwcauth.properties のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
ldapusersession.enablessl		認証を実行するディレクトリが SSL モードにあるかどうかを指定します。 セキュリティ保護された LDAP 接続を設定するには、デフォルト値を「true」に変更します。
一般的な認証設定		
uwcauth.sessioncookie	JSESSIONID	サーブレットコンテナがセッションを監視するために使用する Cookie の名前を指定します。 この値は変更しないでください。
uwcauth.appprefix		他の信頼されるアプリケーションがシングルサインオン用に生成した Cookie を検索するために使用される、ホストアプリケーションのプレフィックスを指定します。 配備に Messaging SSO を使用する場合、この属性には、Messaging Server の設定中に設定した local.webmail.sso.prefix の値を割り当てます。
uwcauth.appid	uwc	ホストアプリケーションの一意なアプリケーション ID を含む Cookie 名を指定します。
messagingssso.appid	ims	Communications Express はこの Cookie を使用して、Messenger Express にログアウト要求を発行するかどうかを判定します。 messagingssso.appid の値は、Messaging Server の設定中に設定された local.webmail.sso.id の値と同じでなければなりません。
uwcauth.cookieDomain		シングルサインオン Cookie の一部として保存されたドメインまたはパスを指定します。
MessagingSSOAuth のフィルタ設定		

表 D-5 uwcauth.properties のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
uwcauth.messagingsso.enable		<p>Messaging シングルサインオン機能を有効または無効にします。</p> <p>このパラメータを「true」に設定するとシングルサインオンが有効になり、「false」に設定するとシングルサインオンが無効になります。</p> <p>Access Manager シングルサインオン用に Communications Express を設定する場合は、uwcauth.messagingsso.enable が「false」に設定されていることを確認してください。</p>
uwcauth.messagingsso.cookiepath		<p>シングルサインオン Cookie を保存する URI を指定します。</p>
messagingssso.xxx.url	<p>http://servername/ VerifySSO?</p>	<p>SSO Cookie を検査するために使用する URL を指定します。</p> <p>xxx の値は、サーバーのアプリケーション ID で置き換えてください。</p> <p>ここで示す xxx の値は、Messenger Express で local.webmail.sso.id に割り当てた値と同一でなければなりません。</p>
messagingssso.uwc.url	<p>http://servername:85/ uwc/VerifySSO?</p> <p>Communications Express が /uwc のように、「/」の直下に配備されていない場合、このパラメータの値は次のようになります。</p> <p>http://servername:85/ uwc/VerifySSO?</p>	<p>Communications Express の確認 URL を指定します。</p> <p>このサーバーの uwcauth.appid の値を編集した場合は、messagingssso.uwc.url 内の uwc を新規の uwcauth.appid で置き換えます。</p>
Identity SSO		

表 D-5 uwcauth.properties のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
uwcauth.identity.enabled		<p>Access Manager を有効にするかどうかを指定します。</p> <p>Access Manager を有効にするには、この属性を「true」に設定します。Access Manager を無効にするには、この属性を「false」に設定します。最初、この値は設定プログラムで設定されます。</p>
uwcauth.identity.login.url	http://nicp160.india.sun.com/99/amserver/UI/Login	Identity Server のログインページの URL を指定します。
uwcauth.identity.binddn		<p>amAdmin の完全な DN を指定します。</p> <p>例</p> <p>uid=amAdmin, ou=People, o=siroe.example.com, o=example.com</p> <p>注: uwcauth.identity.binddn および uwcauth.identity.bindcred の値は、Access Manager のインストール時に入力した値に対応していなければなりません。</p> <p>たとえば</p> <p>uwcauth.identity.binddn=uid=amAdmin, ou=People, o=siroe.example.com, o=example.com and uwcauth.identity.bindcred=password などです。</p>
uwcauth.identity.bindcred		amadmin のパスワードを指定します。
uwcauth.identity.cookieName	PlanetDirectoryPro	<p>Access Manager セッション Cookie 名を指定します。</p> <p>uwcauth.properties ファイルで、uwcauth.identity.cookieName の値が local.webmail.sso.amcookieName の値に設定されていることを確認してください。</p>

表 D-5 uwcauth.properties のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
uwcauth.http.port	80	Communications Express が非 SSL ポート上に設定された場合の、Communications Express が待機するポート番号を指定します。
uwcauth.https.port	443	Communications Express が Web Server 上に設定された場合の、Communications Express が待機する https ポート番号を指定します。
uwcauth.identitysso.cookiepath		Identity SSO Cookie のパスを指定します。
identitysso.singlesignoff		Identity シングルサインオン機能を有効または無効にします。 この属性が true に設定されていると、ユーザーがログアウトしたとき、この IS セッションに参加しているすべてのアプリケーションがサインアウトされます。 この属性が false に設定されていると、Communications Express セッションだけが無効になり、ユーザーは identitysso.portalurl に設定されている URL に移動されます。
identitysso.portalurl		Communications Express の確認 URL を指定します。 Access Manager が有効になっていて、シングルサインオフが false に設定されていると、Communications Express は identitysso.portalurl を表示します。
pab_mig_required	true	アドレス帳ディレクトリを移行するかどうかを指定します。 PAB 移行が必要な場合はこの属性を「true」に、そうでない場合は「false」に設定します。

uwclogging.properties ファイル

表 D-6 は、uwclogging.properties ファイルのパラメータを一覧表示しています。

表 D-6 デフォルトのロギング設定ファイル

パラメータ	デフォルト値	説明
uwc.logging.enable	no	ロギングを有効または無効にします。ロギングを有効にするには、デフォルト値を yes に変更します。
uwc.log.file	/var/opt/SUNWuwc/logs/ uwc.log	uwc.log ファイルの場所を指定します。 必要に応じてファイルの場所を変更します。
uwc.log.level	INFO	アプリケーションのログレベルを指定します。アプリケーションのログレベルを希望するレベルに変更します。 指定できるログレベルの値は次のとおりです。 WARNING、INFO、および FINE、SEVERE。
uwc.log.formatter	SimpleFormatter	ハンドラの設定情報を記述します。 デフォルトのフォーマッタは SimpleFormatter です。XMLFormatter を指定することもできます。

uwcdomainconfig.properties

uwcdomainconfig.properties ファイルには、ドメイン単位に設定できるすべてのオプションが含まれています。次に示すオプションは、ドメインに対するデフォルトユーザー設定です。

これらの値が設定されていない場合は、表 D-7 に示す値を使用してユーザー設定が作成されます。

表 D-7 uwcdomainconfig.properties 内のパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
グローバルオプション		
uwc-user-attr-locale	en	ドメインに使用するデフォルトのロケールを指定します。
uwc-user-attr-sunUCDefault Application	addressbook	ログイン後に表示されるデフォルトページを指定します。選択可能なオプションは、次のとおりです。mail、calendar、および addressbook。

表 D-7 uwcdomainconfig.properties 内のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
uwc-user-attr-sunUCTheme	uwc	<p>デフォルトの表示テーマを指定します。</p> <p>注: 現在、ドメイン単位のテーマはサポートしていますが、ユーザー単位のテーマはサポートしていません。</p> <p>詳細については、『Sun Java System Communications Express Customization Guide』を参照してください。</p>
uwc-user-attr-sunUCColorScheme		デフォルトの表示配色を指定します。
uwc-user-attr-sunUCDefaultEmailHandler		<p>電子メールメッセージをアプリケーションから送信するためのデフォルトの電子メールクライアントを指定します。</p> <p>デフォルトの電子メールクライアントを Messenger Express またはブラウザのメールクライアントに設定できます。</p>
uwc-user-attr-sunUCDateFormat	M/D/Y	<p>日付に表示する日、月、および年の順序を指定します。</p> <p>選択可能なオプションは、次のとおりです。</p> <p>M/D/Y、D/M/Y、Y/M/D</p>
uwc-user-attr-sunUCDateDelimiter		<p>日付の区切り文字を指定します。</p> <p>区切り文字とは、日付の日、月、年を区切る文字のことです。</p> <p>区切り文字には、カンマ (,)、スラッシュ (/)、またはハイフン (-) を指定できます。</p>
uwc-user-attr-sunUCTimeFormat	12	時間の表示形式を指定します。選択可能な形式は、12 または 24 時間形式です。

表 D-7 uwcdomainconfig.properties 内のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
uwc-user-attr-sunUCTimeZone	America/Los_Angeles	<p>カレンダーを作成するタイムゾーンを指定します。</p> <p>次の地域から任意の有効なタイムゾーンを選択できます。</p> <p>「北米および南米」、「ヨーロッパおよびアフリカ」、「アジアおよび環太平洋地域」。</p>
supportedLanguages		<p>ドメインでサポートする言語のリストを指定します。リスト内の各言語は、セミコロンで区切られています。Communications Express がドメインでサポートする言語のリストは、管理者が定義できません。</p> <p>たとえば、 en;es;de;fr;ja;ko;zh-CN;zh-TW</p>
ユーザーのカレンダーオプション		
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefsDefaultView		<p>ログイン後にデフォルトのカレンダーで表示するビューを指定します。選択可能なオプションは、次のとおりです。</p> <p>dayview、weekview、monthview、および yearview。</p>
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefsShowCompletedTasks	false	<p>完了した作業を、カレンダーの「作業」パネルに表示するかどうかを指定します。</p> <p>完了した作業をカレンダーの「作業」ペインに表示する場合は、デフォルト値を「true」に変更します。</p>

表 D-7 uwcdomainconfig.properties 内のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefs-DefaultCategory	Business	新しく作成する予定または作業のデフォルトのカテゴリを指定します。 選択可能なカテゴリは、次のとおりです。 「記念日」、「約束」、「誕生日」、「仕事」、「朝食」、「クラス」、「電話会議」、「夕食」、「休日」、「昼食」、「会議」、「その他」、「個人用」、「セミナー」、「トレーニング」、「旅行」、「不在返信」、および「インタビュー」。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefs-ceDayHead		1日の開始時刻を時単位で指定します。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefs-ceDayTail		1日の終了時刻を時単位で指定します。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefs-PTOHInterval	PT0H30M	1日を分割する間隔を指定します。 日次および週次のビューでは、1日が30分間隔または1時間間隔に分割されます。 デフォルトの分割値をPT0H30M(30分)に変更できます。
uwc-user-attr-icsFirstDay	1	カレンダーで週の初めと見なす曜日を指定します。デフォルトでは、日曜日(1)が週の始まり、土曜日(7)が週の終わりで見なされます。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefs-ceWeekEndDays		カレンダービューで週末と見なす曜日を指定します。 デフォルトでは、日曜日(1)が週の始まり、土曜日(7)が週の終わりになります。 数字をカンマ区切りにしたリストが、週末とみなす曜を表します。

表 D-7 uwcdomainconfig.properties 内のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefs-includeWeekendInView	true	カレンダーの週次および月次ビューでの週末の表示を有効または無効にします。 週末の曜日をカレンダーの週次および月次ビューに表示する場合は、デフォルト値を「true」に設定します。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefs-singleCalendarTZID	0	カレンダーをそのカレンダーのタイムゾーンで表示するかどうかを指定します。 カレンダーをそのカレンダーのタイムゾーンで表示しない場合は、デフォルト値を「0」に変更します。この値が0に設定されていると、すべてのカレンダーが「グローバルオプション」タブで指定したタイムゾーンで表示されます。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefs-allCalendarTZIDs	true	ユーザーのタイムゾーンの代わりに、表示されているすべてのカレンダーのタイムゾーンを使用することを指定するブール値を定義します。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefs-defaultAlarmStart	15	デフォルトで予定または作業のどれだけ前にアラームを送信するかを、時間数と分数で指定します。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefs-notifyEnable	true	新しい予定が作成されるときに、内部の招待者に電子メールメッセージ (iCal 添付書類を含む) を送信するかどうかを指定します。
uwc-user-attr-icsExtendedUserPrefs-sunCalEventfilter	accepted	カレンダーに表示するデフォルトの出席依頼を定義します。 選択可能なオプションは、次のとおりです。accepted、tentative、declined、needs-action。
アドレス帳のデフォルトのオプション値		
uwc-user-attr-sunAbExtendedUserPrefs-addressBook	Personal Address Book	デフォルトのアドレス帳の名前を指定します。
uwc-user-attr-sunAbExtendedUserPrefs-addressBookDescription	Personal address book.	デフォルトのアドレス帳の短い説明を指定します。

表 D-7 uwcdomainconfig.properties 内のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
uwc-user-attr-sunAbExtendedUserPrefs-abSearchDisplayColumn	limited	アドレス帳の第 4 列に表示する値を指定します。 表示列名には、次の項目を設定できます。 displayname、company、title、primaryphone、workphone、homephone、faxphone、pagerphone、primaryemail、email2、email3、homeaddress、workaddress、weburl1、weburl2、calendarurl、freebusyurl、birthday、anniversary、ou、edit、viewcalendar。
uwc-mail-options-isSpamDetectEnabled	disabled	ユーザーにスパム検出フィルタを表示するかどうかを指定します。

personalstore.properties ファイル

表 D-8 は、personalstore.properties ファイルのパラメータを一覧表示しています。

表 D-8 personalstore.properties 内のパラメータ

パラメータ	デフォルト値	説明
db.psrootattribute	psRoot	psRoot の属性名を定義します。
db.useUserPsRoot	false	ユーザー単位の psRoot を使用するかどうかを指定します。ユーザー単位の psRoot を使用するには、この属性を「true」に設定します。そうでない場合は「false」に設定します。
db.defaultpsrootpattern		db.useUserPsRoot 属性が true に設定されている場合に、デフォルトの psRoot パターンを使用することを指定します。 例 ldap:///piPStoreOwner=%U,o=%D,o=PiServerDb
db.psurlprefix	ps	PS URL のプロトコルプレフィックスを定義します。

表 D-8 personalstore.properties 内のパラメータ (続き)

パラメータ	デフォルト値	説明
db.defaultpspath	defaultps	defaultps 値を格納するパスを定義します。各ロケール用の辞書ファイルがあるドメインごとに1つのパスが存在します。
db.maxpagedsearch		個人ストアのインスタンスに対して同時にページされる検索の最大数を指定します。

索引

A

acceptorthreads, 118

C

calendar.deployed, 53
Calendar Server のチューニング, 117
Calendar Server のパラメータ, 53-54
calmaster 情報, 80
comm_dssetup.pl, 29, 86, 87, 116
Communications Express のチューニング, 119

D

deployed-path, 19, 34, 78, 94
Directory Server のチューニング, 115-116

E

Enterprise System インストールウィザード, 30

I

icsCalendar, 115
icsCalendarOwned, 115
Identity Server のサポートを無効にする, 122
Identity Server のサポートを有効にする, 121

J

JVM オプションの設定, 118

L

LDAP のインデックス作成, 115
Linux、デフォルトのベースディレクトリ, 19

M

mail.deployed, 49
mail および mailAlternateAddress, 116
Messaging Server, マニュアル, 20
Messenger Express のパラメータ, 49

N

nsLookthroughLimit, 116
nsSizeLimit, 116

P

PAB 設定エントリ, 109
personalstore.properties ファイル, 100
psRoot 属性, 62

S

service.dwp.numprocesses, 117
service.http.numprocesses, 117
Sun Java™, 30

U

uwc-basedir, 19
uwclogging.properties ファイル, 89

W

Web Server のチューニング, 117-118

X

xlate, 109

あ

アップグレード, 84
アドレス帳ストアパラメータ, 54-55

い

移行シナリオ, 113-114

え

エラー, 85

か

ガベージコレクションのオプションを設定する, 118

き

企業ディレクトリ, 85
共通の障害追跡, 77

く

区切り文字, 97

こ

個人用アドレス帳 (PAB), 105
コンポーネントログ, 77

し

障害追跡, 77
シングルサインオン, 63

せ

製品の特徴, 24
設定ウィザード, 71, 79
設定可能なアドレス帳パラメータ, 99
設定プログラム, 31, 79

そ

ソフトウェアの依存関係, 24

た

タイムゾーン, 97, 149

ち

チューニングオプション, 115

て

テーマファイル, 103
デフォルトのカテゴリ, 98, 150
デフォルトの電子メールクライアント, 97, 148
デフォルトビュー, 98, 149
デフォルトページ, 147
デフォルトユーザー設定, 96

と

匿名アクセス, 53

は

バックアップ, 38

バッチ移行プロセス, 108

パフォーマンス, 115

パラメータ

calendar.deployed, 53

calendar.wcap.host, 53

calendar.wcap.passwd, 53

calendar.wcap.port, 53

defaultserver.ldapbincred, 54, 56

defaultserver.ldapbindn, 54, 56

defaultserver.ldaphost, 54, 56

defaultserver.ldappoolmax, 55, 57

defaultserver.ldappoolmin, 55, 57

defaultserver.ldappooltimeout, 55, 57

defaultserver.ldapport, 54, 56

entry_id, 56

local.sso.uwc.verifyurl, 74

local.web.sso.uwcport, 76

local.webmail.sso.amnamingurl, 69

local.webmail.sso.cookieDomain, 74

local.webmail.sso.enable, 74

local.webmail.sso.prefix, 75

local.webmail.sso.singlesignoff, 75

local.webmail.sso.uwcenabled, 69, 75

local.webmail.sso.uwclogouturl, 69, 75

local.webmail.sso.uwcport, 70

login_type, 55, 56

lookthru_limit, 55, 57

mail.deployed, 49

uwc.log.level, 90

uwc.logging.enable, 89

uwcauth.appid, 72

uwcauth.appprefix, 72

uwcauth.cookieDomain, 72

uwcauth.identity.enabled, 65

uwcauth.identity.naming.url, 65

uwcauth.messagingsso.enable, 72

uwcauth.messagingsso.path, 72

webmail.host, 49

パラメータを設定するためのガイドライン, 116

ひ

ヒープサイズ, 118

ふ

複数 CPU でのロードバランス, 117

プラットフォーム, 23

プロキシ認証, 53

ま

マニュアル

Messaging Server マニュアルの検索場所, 20
概要, 20-21

ゆ

ユーザー設定, 24

れ

例外, 84

ろ

ロードバランスを無効にする, 117

ログ情報, 89

